

下長崎遺跡
両の木神社遺跡

笛吹川農業水利事業に伴う発掘調査報告書

1989. 3

山梨県教育委員会
関東農政局笛吹川農業水利事業所

序

甲府盆地の東から南東部にかけて施行された笛吹川農業水利事業国営管水路埋設工事に伴う事前発掘調査は、1976年度に始まり本年度をもって終了いたしました。この間、発掘した26遺跡のうち17遺跡から遺構や遺物を検出し、逐次整理も進めながら調査報告書を刊行してまいりましたが、これも本年度で終了いたします。

本報告書は1987年に発掘した下長崎遺跡と両の木神社遺跡の2遺跡の調査報告を合冊したものであります。下長崎遺跡は山梨県東八代郡八代町永井字下長崎にあって、浅川扇状地の扇端に位置しております。遺跡からは古墳時代、奈良時代、平安時代の住居址10軒、掘立柱建物址2棟、配石5基、集石9基、石組溝1基や土壙などが検出され、また土師器とともに綠釉陶器、灰釉陶器や鉄器などの貴重な遺物が出土いたしました。特に平安時代の遺構と遺物については、八代荘の停廃事件に関する可能性も指摘されております。さらにこの遺跡の立地上から、八代郷と長江郷との境界に関する問題、条里型地割が施行された時期についても言及いたしております。両の木神社遺跡は、同郡一宮町末木字両の木にあって、御手洗川扇状地の扇端に位置しております。近くに国分寺や国分尼寺があり、ある時期國府があったことも想定されている古代甲斐國の中心地にあります。神社の前を通る大型広域農道建設時に行われた発掘調査では、平安時代の集落址が発見されておりますので、本遺跡から検出された大溝は、この施設か、この付近にあったといわれる古墳の周溝であろうと思われます。

両遺跡とも発掘範囲は、狭いながらも、貴重な成果をあげることができたと考えております。本報告書が今後の研究に、また地域発展のため資することができれば幸甚に存じます。

末筆ながら、調査のお世話をいただいた関係各機関、直接発掘調査に当たられた皆様に厚くお礼を申し上げます。

1989年3月25日

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯貝正義

笛吹川農業水利事業に伴う
下長崎遺跡
両の木神社遺跡
発掘調査報告書

し も な が き き
下 長 崎 遺 跡

古墳・奈良・平安時代集落址の調査

例　　言

- 1 発掘調査は文化庁の補助金と農林水産省の委託金を受けて実施した。
- 2 発掘調査と報告書の執筆、写真撮影は県埋蔵文化財センター副主幹・文化財主事森和敏が担当した。
- 3 発掘調査、資料整理、本書の作成の参加者は次のとおりである。

発掘参加者（順不同 敬称略）

○渡辺礼子 ○渡辺征子 曰城福子 石倉幸子 中村隆子 橋田睦美 倭泰子 保坂幸子 斎藤英子 石倉宙美 矢崎美恵子 長坂素代子 斎間千津子 中村あつ子 斎藤寿子 相沢正子 長井よし江 中村悦子 ○宮沢まさみ 青山ちづ子 岩沢久仁子 渡辺はるゑ 石倉栄子 中村広子

整理参加者（順不同 敬称略）

小池満恵 林部光 長尾美子 荒川奈津江 玄間千鶴 後藤良美 柏木まつ江 宮川東及び上記〇印

- 4 本書の遺構番号は発掘調査時に付したとおり使用したが、資料整理時に欠番としたものもある。
- 5 図面、本文中に使用した略記号は次のとおりである。
S B—堅穴住居址、掘立柱建物址、S—石、S D—溝、S L S—列石、I S—集石、S X—配石（性格不明遺構）、T P—トレンチ、P—ピット、G—グリッド
- 6 遺物実測図の（　）内番号は遺構平面図の遺物番号である。
- 7 遺物実測図の番号と遺物説明表の番号のものとは同一遺物である。
- 8 出土した遺物、遺構実測図・写真、遺物実測図・写真等の記録類は全て県埋蔵文化財センターで保管している。
- 9 遺物の編年、出土地名等については県埋蔵文化財センター坂本美夫・八巻与志夫文化財主事によるところが多い。
- 10 遺物の編年は神奈川考古第14号「奈良平安時代の諸問題」『甲斐地域』1983年 坂本美夫
末木健 堀内真によった。

目 次

序

例言

第1章 発掘の原因とその経過	1
第1節 発掘の原因	1
第2節 発掘の経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 位置	3
第2節 自然環境	4
第3節 歴史的環境	4
(1)歴史的環境	4
(2)発掘地域における遺物分布	5
第3章 遺跡の地層と文化層	7
第4章 遺構と遺物	8
第1節 古墳時代	8
3号住居址 6号住居址 10号住居址 11号堀立柱建物址 12号掘立柱建物址 配石遺構 土壌 集石列 鋳冶遺構 粘板岩を囲む配石 その他	
第2節 奈良時代	20
1号住居址 2号住居址 9号住居址	
第3節 平安時代	24
4号住居址 5号住居址 7号住居址 8号住居址 1号円形配石 列石 1 号溝 集石 かまど グリッド出土遺物 陶器 鉄器	
第4節 その他	52
第5章 下長崎遺跡と地域の歴史	65
第1節 条里型地割との関係について	
第2節 八代郷と長江郷について	
第6章 結び	68

挿 図 目 次

第1図	下長崎遺跡位置図	2	第38図	4号住居址出土遺物実測図	25
第2図	下長崎遺跡付近図	3	第39図	5号住居址実測図	25
第3図	下長崎遺跡発掘範囲図	4	第40図	5号住居址出土遺物実測図	26
第4図	発掘地域の遺物分布図	6	第41図	7号住居址実測図	27
第5図	6G北壁地層図	7	第42図	7号住居址上層出土遺物実測図	27
第6図	1号トレンチ地層図	7	第43図	7号住居址かまど内出土遺物実測図	28
第7図	下長崎遺跡全体図	A	第44図	7号住居址下層出土遺物実測図	28
第8図	3号住居址実測図	9	第45図	8号住居址実測図	29
第9図	3号住居址出土遺物実測図	10	第46図	8号住居址出土遺物実測図	30
第10図	3号住居址出土遺物実測図	11	第47図	1号円形配石実測図	30
第11図	6号住居址実測図	12	第48図	1号・2号・3号列石実測図	31
第12図	6号住居址出土遺物実測図	12	第49図	4号列石実測図	32
第13図	10号住居址実測図	13	第50図	5号・6号列石実測図	32
第14図	10号住居址出土遺物実測図	13	第51図	5号・6号列石、集石、G出土遺物実測図	33
第15図	11号掘立柱建物址実測図	13	第52図	7号列石、G出土遺物実測図	34
第16図	11号掘立柱建物址付近出土遺物実測図	14	第53図	1号構築実測図	35
第17図	12号掘立柱建物址実測図	14	第54図	1号構の下出土遺物実測図	36
第18図	1号配石実測図	15	第55図	水溜付近出土遺物実測図	36
第19図	1号配石出土遺物実測図	15	第56図	6号集石実測図	37
第20図	2号配石出土遺物実測図	15	第57図	7号集石実測図	37
第21図	1号土壤・2号土壤実測図	16	第58図	8号集石実測図	37
第22図	土壤出土遺物実測図	16	第59図	7号・8号集石出土遺物実測図	38
第23図	3号土壤実測図	16	第60図	11号集石出土遺物実測図	39
第24図	6号土壤実測図	17	第61図	2号かまど出土遺物実測図	40
第25図	2号集石列実測図	17	第62図	3号かまど出土遺物実測図	40
第26図	2号集石列付近出土遺物実測図	18	第63図	4号かまどの縦道実測図	40
第27図	鍛冶遺構出土遺物実測図	18	第64図	2G出土遺物実測図	41
第28図	鍛冶遺構実測図	19	第65図	5G出土遺物実測図	42
第29図	5G出土遺物（粘板岩）実測図	20	第66図	墓地内、6号集石、G出土遺物実測図	43
第30図	1号住居址実測図	21	第67図	6G上層・下層出土遺物実測図	44
第31図	1号住居址かまど見取図	21	第68図	6G下層出土遺物実測図	45
第32図	1号住居址出土遺物実測図	22	第69図	7G出土遺物実測図	46
第33図	2号住居址実測図	22	第70図	8G出土遺物実測図	46
第34図	2号住居址出土遺物実測図	23	第71図	9G出土遺物実測図	47
第35図	9号住居址実測図	23	第72図	11G出土遺物実測図	48
第36図	9号住居址出土遺物実測図	24	第73図	12G出土遺物実測図	49
第37図	4号住居址実測図	24			

第74図 12G・13G 造構包含層出土遺物実測図	50	第77図 鋼製品実測図	51
第75図 13G出土遺物実測図	50	第78図 錢貨拓影	52
第76図 14G・15G出土遺物実測図	51	第79図 道路セクション図	65
		第80図 八代町小字図	67

図版目次

- | | | | |
|------|-----------------|------|--------------------------------------|
| 図版1 | 下長崎遺跡遠景・近景 | 図版16 | 3号土壤上部 1号溝移築風景他 |
| 図版2 | 下長崎遺跡全景 | 図版17 | 11G道セクション 3・5・7号集石 |
| 図版3 | 3・9・10号住居址 | 図版18 | 11・12号集石 1号かまど 6G遺物出土状況 |
| 図版4 | 11号掘立柱建物址 6号住居址 | 図版19 | 3・6号住居址 SB11付近出土遺物 |
| 図版5 | 1・2号配石 | 図版20 | S B11付近 1・2号配石 2・3号土壤 2号集石 粘板岩付近出土遺物 |
| 図版6 | 2号土壤 錫冶遺構 | 図版21 | 2・7・8号住居址 5号列石 7・8号集石出土遺物 |
| 図版7 | 2号集石列 粘板岩を跨む配石 | 図版22 | 3号かまど 2～5G出土遺物 |
| 図版8 | 1・2号住居址 | 図版23 | 5・6・7・9・10G出土遺物 |
| 図版9 | 4・5号住居址 | 図版24 | 11・12・13・14G出土遺物出土錢貨 |
| 図版10 | 7・8号住居址 | 図版25 | 11G水溜付近出土遺物 火手跡 羽口土製円盤 |
| 図版11 | 円形配石 1・2号列石 | 図版26 | 鉄器 緑釉陶器 |
| 図版12 | 3・4号列石 | | |
| 図版13 | 5・6・7号列石 | | |
| 図版14 | 8号列石 1号溝 水溜 | | |
| 図版15 | 1号溝 水溜め | | |

第1章 発掘の原因とその経過

第1節 発掘の原因

下長崎遺跡他2ヶ所の発掘調査は農林水産省が昭和62年度に施行する笛吹川農業水利事業として關幹線管水路を埋設する工事に伴って行った。

この工事は笛吹川左岸の広い畠地帯を灌漑するための管水路を埋設する巾約3m、深さ約3mの溝を掘削する。

第2節 発掘の経過

年次計画で施行されている事業であるので、61年度中に農林水産省笛吹川農業水利事業所、県文化課と協議し、現地踏査を行って、遺物散布地3ヶ所を試掘することとした。

62年9月17日付第9～12号で下長崎遺跡、宮の後遺跡、下原遺跡の発掘通知を県文化課に提出した。

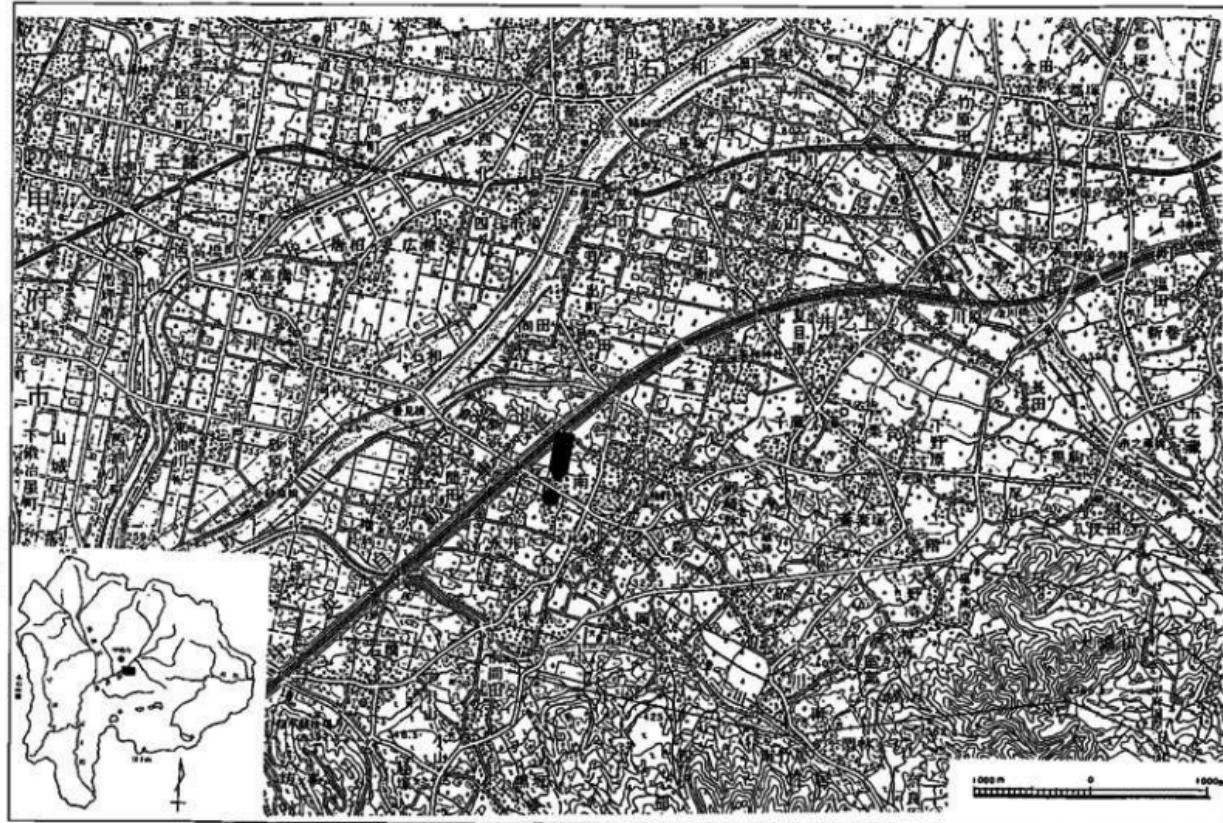
下長崎遺跡 発掘は昭和62年10月12日から同年12月23日までの期間に行った。10月6日から試掘した結果によって、遺構包含層までの耕作土等30cm～40cmをバックホーで除去した。統いて全面的に遺構包含層まで掘って、ほぼ間断なく遺構があることを確認した。この間、4Gにかけて屋敷墓地があったことがわかり、農水省では10月19日に遣族や関係者の参列のもとに、勝林寺住職の統経によって供養し、改葬の儀を行った。この下層をさらに発掘したところ、鬼高式土器を伴って焼土、かまと土を検出した。

前半の期間は8Gから14Gまでを精査し、実測、写真撮影を約8割済ませた。この間10月21日に石積した1号溝を、11月10日に1号住居址を、11月18日に15Gで2列の石垣を、11月下旬に5・6号列石やその付近で、鐵冶遺構や土壤等を検出した。この間、八代町教育委員、文化財審議会委員、民俗資料収集委員、浅川中学校PTAや甲府市上石田文化協会等が見学に来る。

後半の期間、11月下旬からは1Gから7Gを重点的に調査を行う。全面的に掘り下げたところ、3G北側から縄文陶器の破片が数点出土し、後にも灰釉陶器が出土して、重要な地点となった。しかし2G、3Gは遺構が重複していて、なお擾乱を著しく受けていて、その確認が困難であった。11月30日に5号住居址を、統いて4号住居址を、12月7日に3号住居址を、11日に粘板岩やその付近の遺構・遺物を、17日に12号掘立柱建物址を、21日には8号配石等を検出した。発掘調査の終了にあたっては、遺構があった下層を調査するために掘り下げたが、砂礫層（氾濫層）となり遺構・遺物は検出できなかった。なお12月9日には石組の1号溝を八代町民俗資料収集委員が八代町郷土館に移築復元した。

なお、宮の後遺跡と下原遺跡の調査結果については、埋蔵文化財センター「年報」4に報告したとおりである。

第一圖 下長崎道路位置圖 (25,000)



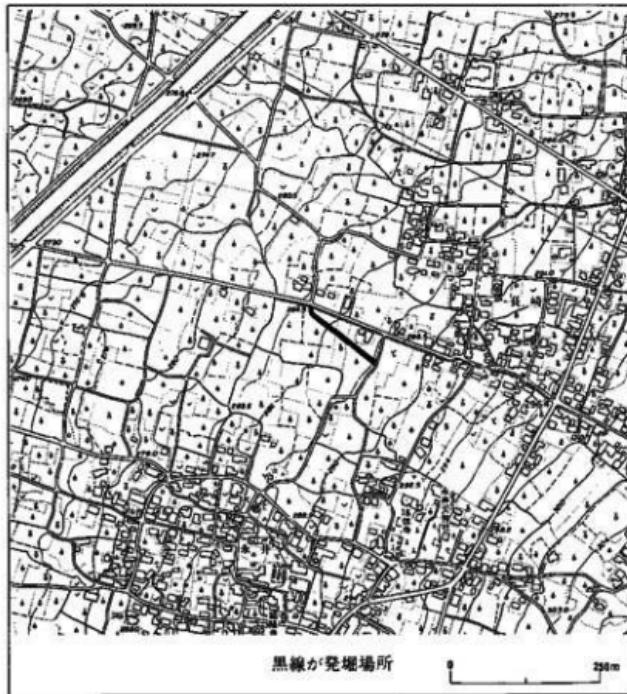
第2章 遺跡の位置と環境

下長崎遺跡は甲府盆地の東部に展開する浅川扇状地扇端にある。浅川扇状地の新しい扇状堆積層は洪積世末から沖積世始め（3万～数千年前）に形成された（八代町誌 1975）といわれ、地表は2次堆積ロームや砂礫で覆われ、肥沃土である。

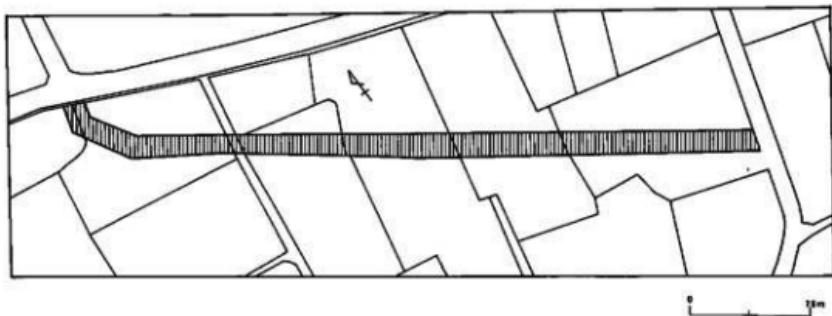
第1節 位置

下長崎遺跡の発掘地は東八代郡八代町永井字下長崎1706番地の1,1704番地、1696番地の1・3、1700番地で、発掘面積は約560m²（4m×140m）である。

遺跡は南区長崎集落の南西に接し、果樹園の中にある。県道甲府～八代線の西にある永井天神社と無碍山瑜伽寺から北西へ約200mの地点にあって、甲府市からは約8km南東の地点で、甲府盆地の南東に位置する。



第2図 下長崎遺跡付近図 (1/10,000)



第3図 下長崎遺跡発掘範囲図 ($\frac{1}{500}$)

第2節 自然環境

この遺跡は浅川扇状地の扇央から扇端に移る地域にあり、西に約1度緩やかに傾斜する平坦な場所に所在し、標高は283m～286mである。この付近は比較的水利の便は悪いが、少し西に下ると大清水、小清水、道窓池などの小字の地名があり、南北にスプリングラインが走り、その下は水利がよく、水系が発達している。盆地内に発達する急傾斜扇状地の扇端部の多くは、土石流堆積によって形成された畝地形のみられる上半部とは異なり、むしろ流水堆積に近い状態で形成された泥流舌状地であろう、といいこの境界付近では湧水（スプリングライン）があるという。この遺跡付近がこの境界であろう。さらにその下は笛吹川の沖積層となる。笛吹川はこの遺跡の1,100m西にあり、浅川等の御坂山塊から流出する諸河川を集め、釜無川（現富士川）と合流して富士川となり、太平洋に注ぐ。

浅川は扇状地を形成しながら徐々に南に移り、現在はその南端を流れていって、この遺跡の南600mにある。^(註1)

(註1) 「浅川の歴史」森和敏 『あさかわ』浅川中学校 P T A 1988

(註2) 「条里地域の自然環境」 高木勇夫 1985

第3節 歴史的環境

(1) 歴史的環境

下長崎遺跡で検出した主な遺構は古墳時代後期と奈良時代、平安時代の集落遺構及び平安時代後期かそれ以後の条里型土地割に関するものであるので、これらに関する歴史的環境について説明する。

古墳時代の集落分布については、甲府盆地では不明な点が多く、この東部でも同様である。

下長崎遺跡付近では遺物分布調査で後述するように若干発見された。古墳分布の概略は甲府盆

地では大きくは西部、北部、東部の三分布域があり、この遺跡がある東部では最も濃厚で、広く分布している。発掘地点付近では、古墳は南100mに樹塚（莊塚）古墳が、東100mに物見塚古墳があり、かつてあったと言われる（永井矢崎従道氏の父が削平したという）無名墳が北東50m（1753、1754番地荒神社地）にあり、今は全壊して不明であるが、馬見塚という小字名が残っているので北200mの付近にも古墳があったと考えられる。これらのうち樹塚（莊塚）古墳は横穴式石室をもつ古墳では初期に築造されたと考えられており、6世紀前半中頃に比定されている。その他の未確定のものを含む3基も地域的にみて後期古墳であろう。6世紀中葉は新旧首長層が交替しその中心地は甲府盆地南東から北東へと漸次移ったと考えられており、古墳の分布も後期になると大勢は浅川以北の諸扇状地に移る。この時期から扇状地は急速に開発が進み、農業生産力も著しく高まつたと思われる。

平安時代の集落分布についても、古墳時代と同様不明な点が多い。一般的には平安時代後期には盆地全域にわたって遺跡が拡散し、かつ濃密になると考えられ、山間部にまで多く分布するようになる。下長崎遺跡周囲にも広く分布し、遺跡付近にも濃厚に散布しているが、このことについては後述する。浅川・境川扇状地の条里型地割が本遺跡付近まであり、その関係については第五章とのおりである。

（2）発掘地域における遺物分布

この遺跡周囲の地表面に散布する土師器は古墳時代から平安時代（鎌倉時代以後も含まれる可能性はあるが）までの間に比定されるものがある。分布域の範囲は今回と三光神遺跡を発掘調査^(註1)した際のものを合わせると、南北500m以上、東西400mくらいであろう。この範囲の北側は長崎集落があるため、地表面の分布はわからないが、五里原遺跡まで続く可能性もあり、南側では永井区小字岩船、豊氣、雨降まで続き、一部では更に広がる。ただ前述した2遺跡の時代が違うように、その範囲内でも集落が移動しているものと考えられ、場所によって、遺跡の時期差はあろう。またこの範囲内でも土器分布の濃淡があって、大きく3ヵ所に分けることができ、その1は主に平安時代後期の下長崎遺跡、その2は東南50mにある金山遺跡（仮称、時期は特定出来ない）、その3は南西100mにある古墳時代後期（鬼高期）を主とする三光神遺跡である。ただ地表面に分布する土師器は、三光神遺跡のように上流からの押し出しによって移動したこととも考えられるので、遺跡であるかどうかは確実ではない。

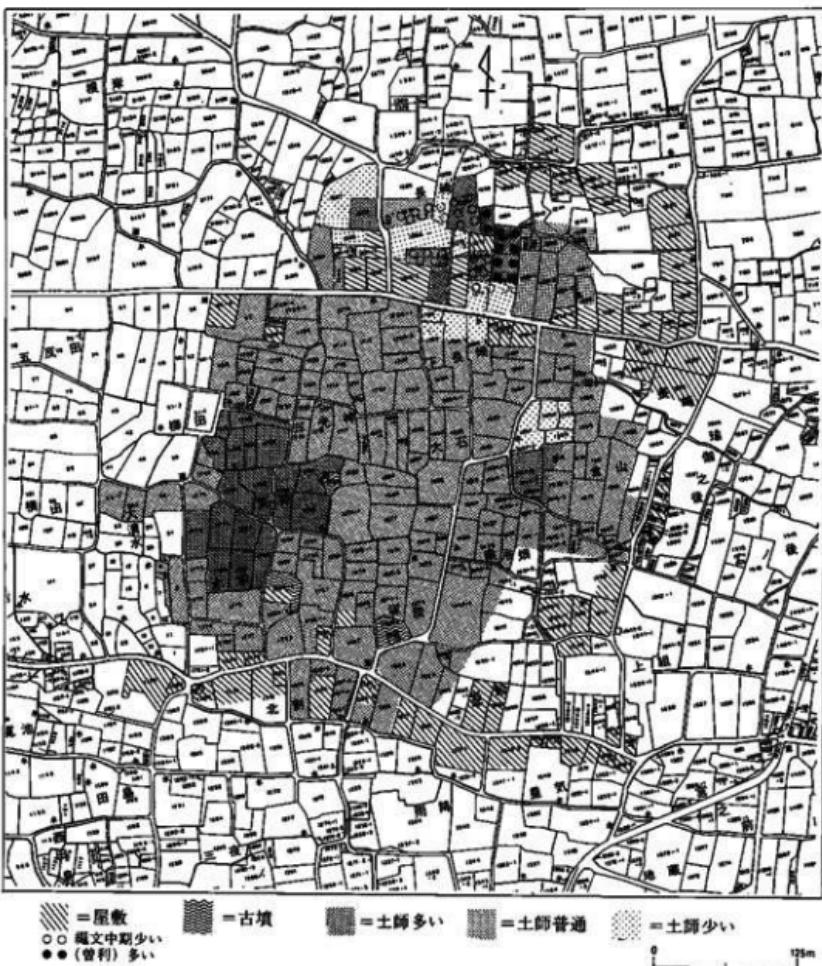
下長崎遺跡に分布している遺物は中期繩文式土器と土師器である。

中期繩文式土器は南区小字長崎1268、1282、1272番地付近に集中して、100mくらいの範囲で、ほぼ円形に散布している。かつてここから曾利式の甕（八代町郷土館所蔵）が出土したことがある。

土師器は今回の発掘地を南限として、条里型地割の道路（町道51号線）を越えて、南北150m、東西150mくらいの範囲に濃く散布していて、この地域外へも広がっている。土器の時期は古墳時代初頭の五領式から後期の鬼高、平安時代の国分式までみられる。中でも国分式が最も多いので、発掘地の遺構が北側に広がっていることは確実であろう。

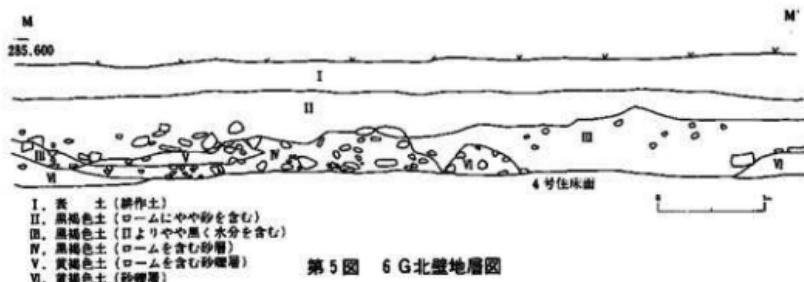
（註1）「三光神遺跡」八代町教育委員会 1987

（註2）「五里原遺跡」八代町教育委員会 1986

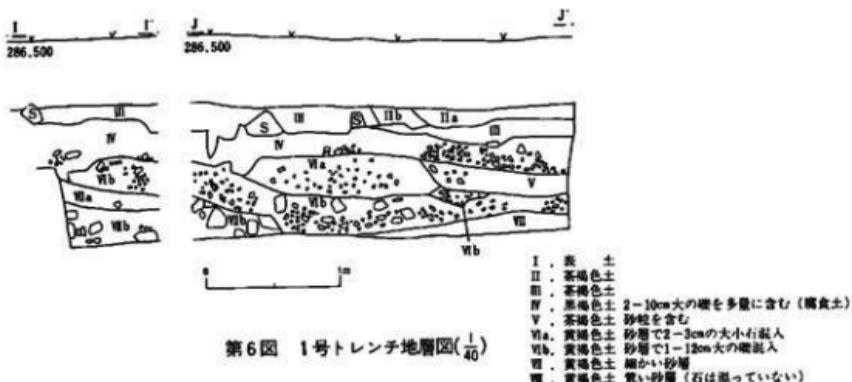


第4図 発掘地域の遺物分布図 ($\frac{1}{5,000}$)

第3章 遺跡の地層と文化層



第5図 6 G北壁地層図



第6図 1号トレンチ地層図(1/40)

本遺跡が位置する浅川扇状地扇端の表層地層は耕作土(表土)、小礫を含む氾濫層や腐食土層などで構成されている。遺構は表土の下の黒褐色土層に包含され、これを掘込み面として、包含層の深さは地表から約50cmから約120cmまでである。

表土下の地層は不整合であるため標準層序は決められないが、地表の耕作土が約20cmで、その下層が小礫を含む黒褐色腐食土層の遺構包含層(50cm~120cm)があり、その下層が大小の礫を包む砂層の氾濫層となり、この地表からの深さは60cm~130cmである。おおよそ氾濫層は下方になるにしたがって深くなる。

氾濫層(土石流)の状況は第1Gで深堀りしたトレンチの地層図(第6図)のとおりである。その直上に古墳時代から平安時代までの遺構包含層があるから、氾濫層は古墳時代直前に形成されたものと考えられる。遺構包含層の状況をみると、2号住居址、4号住居址などを埋没した地層のように、上方から相当な力によって押し流して、住居址内に堆積したようである。これは前述したように「流水堆積に近い状態で形成された泥流舌状地」の地層のように考えられる。第1

Gから第10G付近までは遺構の掘込面は黒褐色土で、その下層の氾濫層まで掘っている。

第11Gから第15Gでは遺構の掘込は下層の氾濫層まで至っていないので、その包含層は黒褐色土層中にある。しかしその掘込面は深く、地表下120cmくらいである。第11Gで検出された石組の水槽状遺構も黒褐色土層中にあり、条里型地割の畦畔（道）はこの上に構築されている。

第4章 遺構と遺物

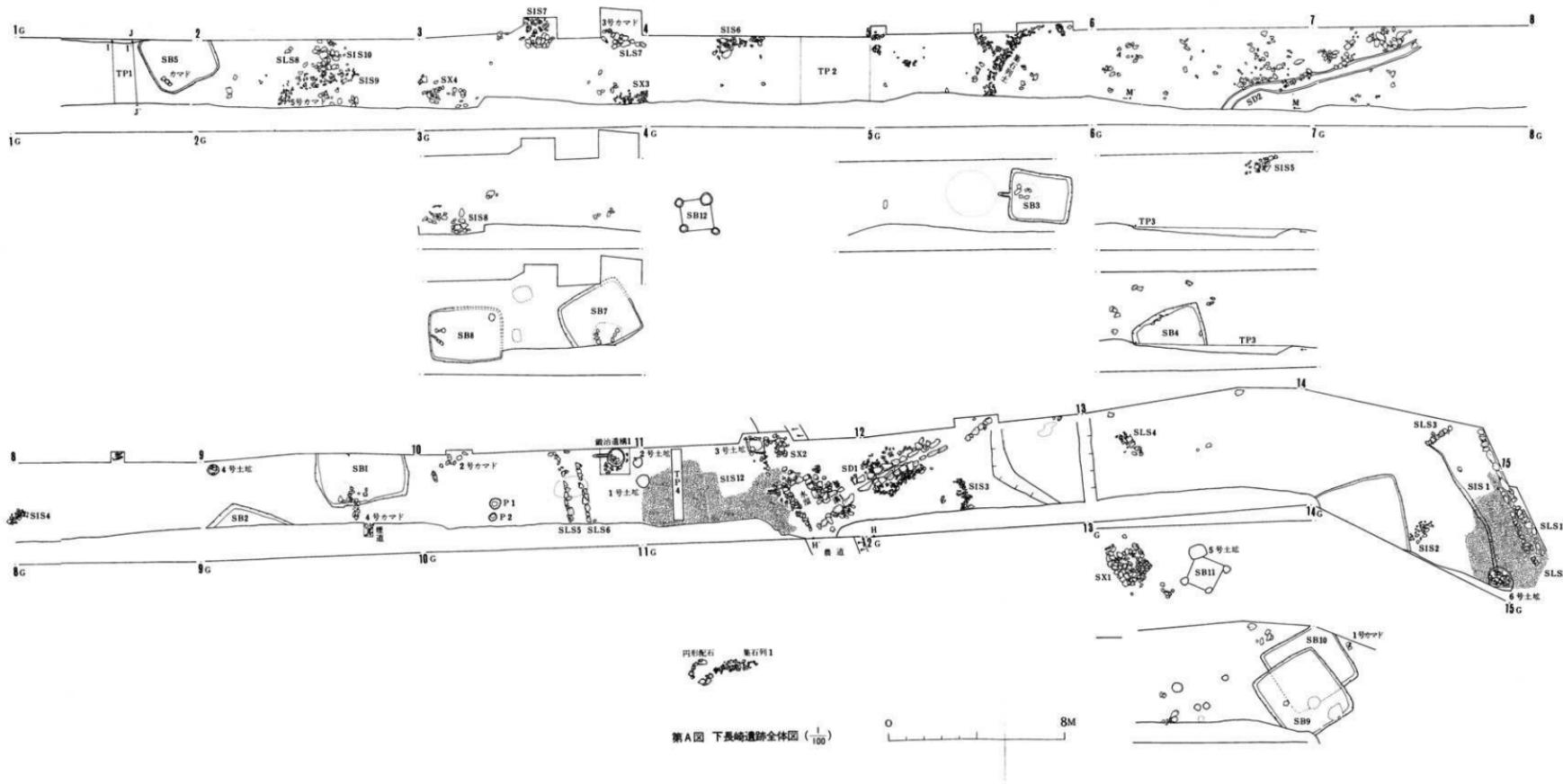
古墳時代および平安時代の遺構と遺物を、また奈良時代かと思われる遺構と遺物を若干検出した。この他に若干繩文時代中期の土器と石器、弥生式土器数個が出土した。その他時期不明の集石や土壙を数基検出した。遺構から出土した遺物でその時期を判定すると下記のとおりであるが疑問を有するものもある。古墳時代の主な遺構は後期の鬼高式土器を伴う堅穴式住居址3軒、獨立柱建物址2棟、配石遺構3基や土壙等を検出した。奈良時代では遺物と遺構包含層の状況により、1号、2号、9号住居址を疑問もあるが一応この時期とみなす。しかし1号、2号住居址は平安時代初期とみることもできよう。平安時代の主な遺構は10世紀後半から12世紀前半に比定できる遺物を伴って、堅穴式住居4軒、石垣3基、石列2基（石垣）、集石列1基や配石土壙、鐵治遺構のほか、数基のかまど址などや石垣などの石組遺構が故意に破壊された跡、と考えられる集石、捨てたと考えられる石が累積したところなど、人為的に散乱させたような石群も数箇所あった。遺物は土師器、土師質土器、須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器、鐵製品などが出土し、この中でも貴重品とされる綠釉陶器が7個体、鐵鎌など特殊な遺物が出土している。平安時代の石組遺構や特殊な遺物が検出されたことは、単なる集落遺跡ではなく、莊園の中心的な遺構か土豪の屋敷跡などが想定される。この他中世の所産かと考えられる内耳土器、石臼、三足の線香立や白磁等が主に10G～14Gで若干検出されたが、遺構との関連はないと思われる。

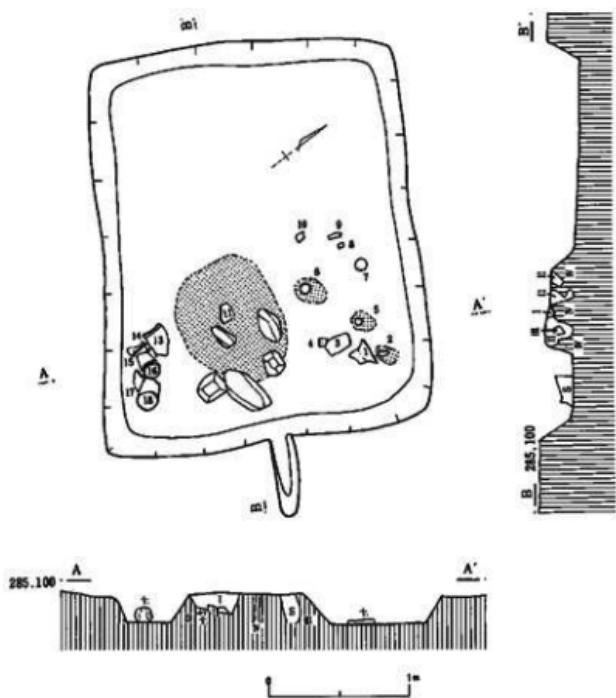
第1節 古墳時代

発掘区の西側である11G～15Gに遺構、遺物が多くいたが、4G～5Gでも検出した。遺構は3・6・10号住居址3軒と11・12号獨立柱建物址2棟、配石が1号・2号の2基、土壙が1号～4号・6号の5基、鐵治遺構が1基、集石列が1基（2号）、粘板岩を小石で囲んだ遺構の1基を検出した。遺構の時期はそのほとんどが古墳時代後期の鬼高式期に属する。遺構包含層は、13・14Gでは地表から120cmくらいあり、五里原遺跡や三光神遺跡と同程度である。

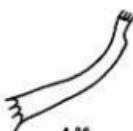
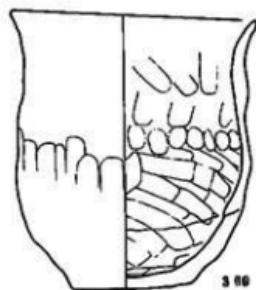
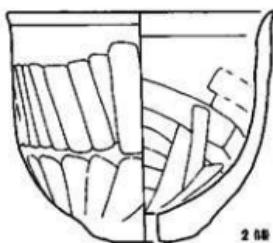
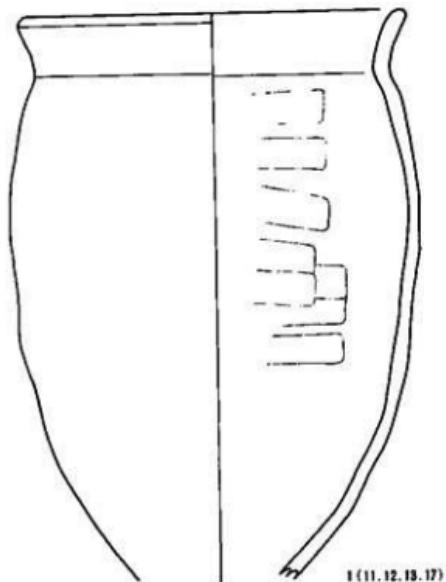
堅穴住居址

3号住居址 大きさは東西2.85m、南北2.35mと小型で、深さは15cmである。柱穴は床面に検出されなかつたので、さらにこれを削り取ってその下層を調査したがなかつた。かまどは東壁中央に石を芯として、粘土を積上げて構築され、煙道が住居址外に60cm掘られている。出土遺物は多く、中でも東南の隅には完形の瓶1箇、甕1箇と甕の破片が出土した。なお西壁外の北側が約70cm×90cmの範囲で固く踏み締められていたので、出入口と考えられる。

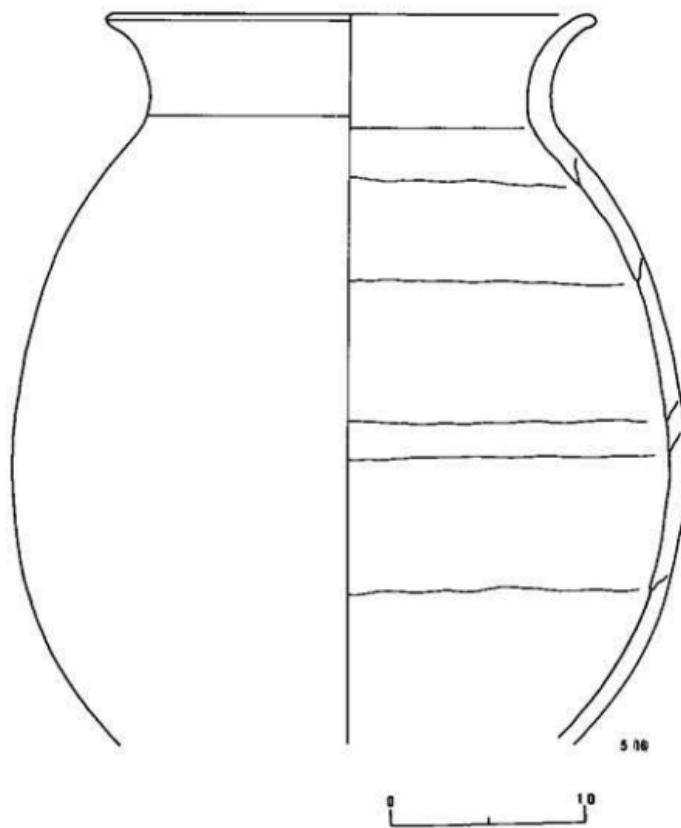




第8図 3号住居址実測図 (1/40)

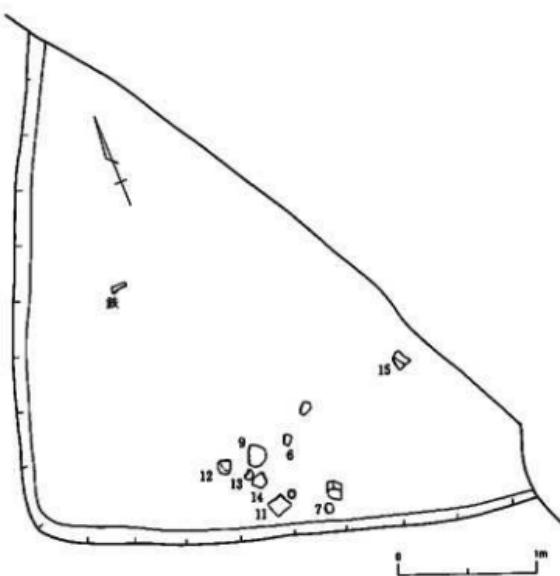


第9圖 3号住居址出土遺物実測図 (5. 6 G) (1/3)

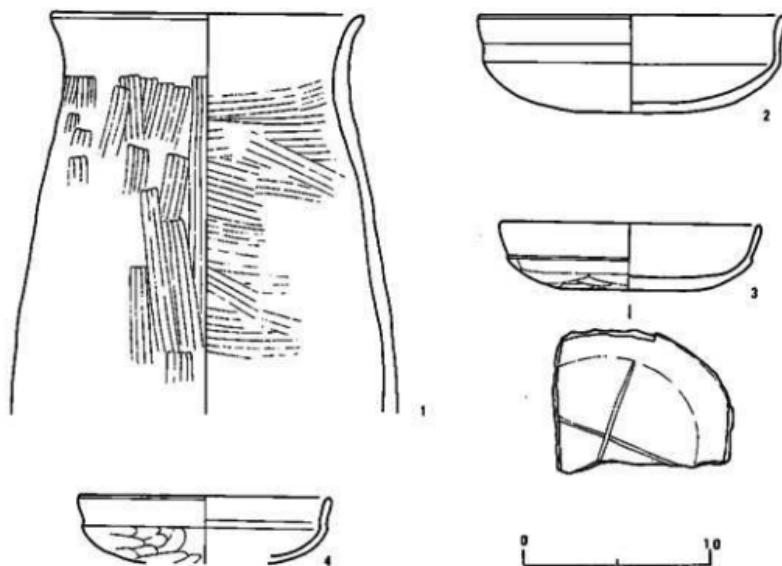


第10図 3号住居址出土遺物実測図 (5・6G) (1/3)

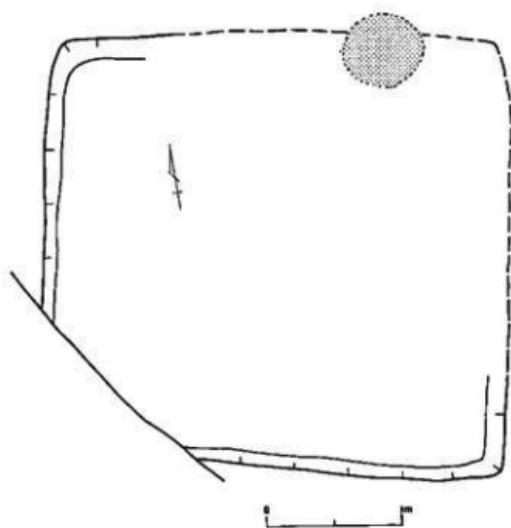
6号住居址 大半が路線外に出ているため、その大きさは不明であるが、発掘した範囲は東西3.5m、南北3.5mで、深さは20cmである。柱穴とかまどは検出できなかった。遺物は鬼高式期の焼等が出土した。



第11図 6号住居址実測図 (1/40)

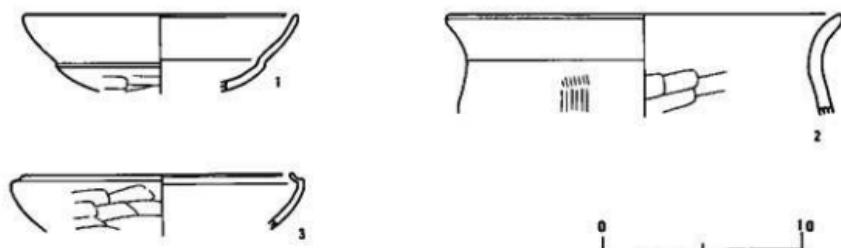


第12図 6号住居址出土遺物実測図 (14G) (1/3)

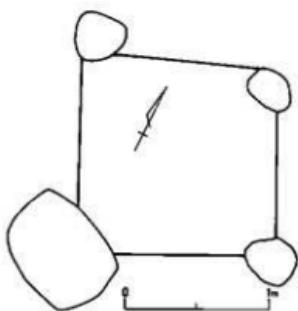


第13図 10号住居址実測図 (1/40)

10号住居址 9号住居址に
切られ、搅乱されていたため
に、そのほとんどが形態を留
めていないが、大きさは9号
住居址とほぼ同じである。遺
物は鬼高式土師器の壺や甕な
どが少量出土した。



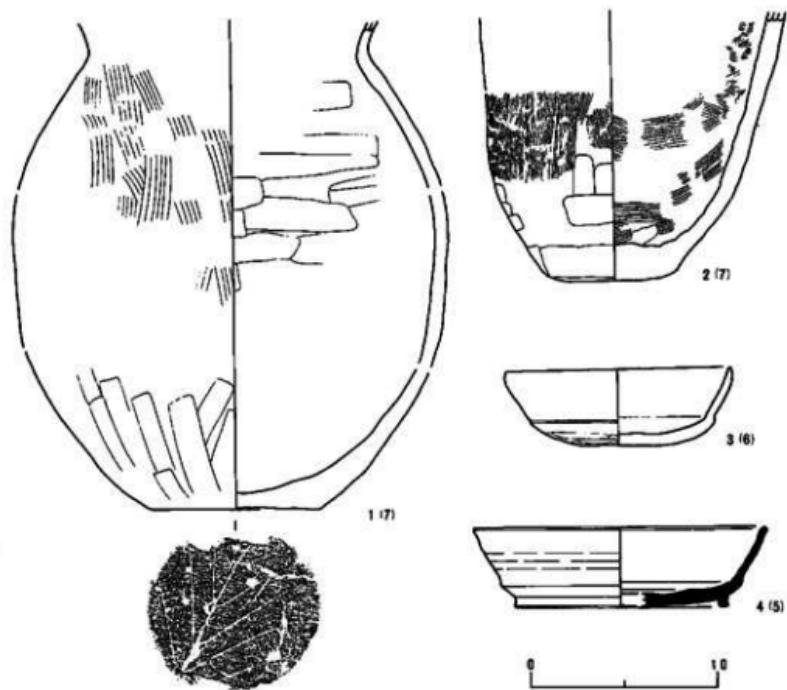
第14図 10号住居址出土遺物実測図 (13・14G) (1/3)



第15図 11号掘立柱建物址実測 (1/40)

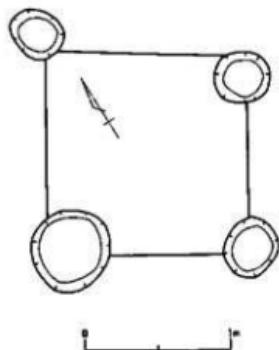
堀立柱建物址

11号堀立柱建物址 不整形な4本柱の小さい建物で
ある。柱穴の1つは土壤によって破壊されている。柱
穴の掘込面と同一レベルで東50cmから鬼高式甕と壺が
出土した。



第16図 11号掘立柱建物址付近出土遺物実測図 (13G) (1/3)

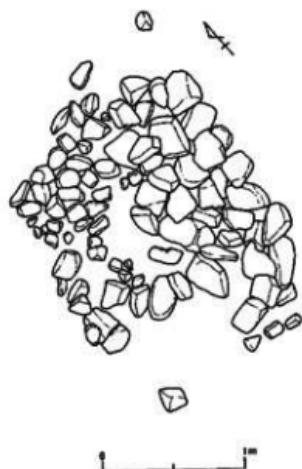
12号掘立柱建物址 不整形な4本柱の小さい建物である。柱穴は10cm~15cmと浅い。5Gで同一レベルの鬼高期のかまどを検出したので、同一時期とした。



第17図 12号掘立柱建物址実測図 (1/40)

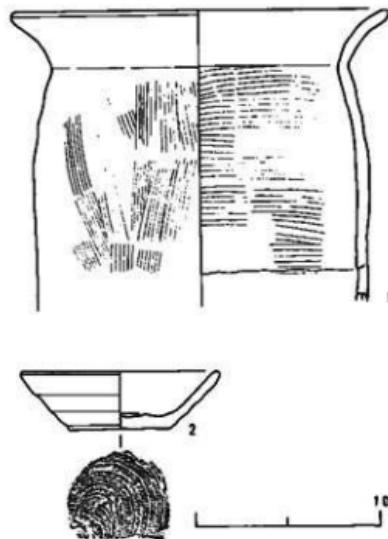
配石造構 土壙 錫冶造構 粘板岩を囲む配石 その他

1号配石造構 13Gで、地表下1.2mの深さで検出された。9・10号住居址、11号壠立柱建物址と同一レベルであるので、遺物が伴出しなかったが、これらと同時期とみなした。石敷の範囲は南北2.4m、東西1.6mで、東半分は25cm～35cmの比較的大きさの揃った石を、平の面を上にして、東側の面を削えて密に敷きつめ、西半分は10cm～20cmくらい小石を乱雑に敷いている。なおこの下層は砂砾層である。

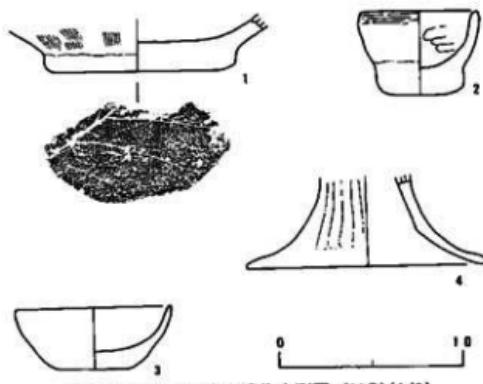


第18図 1号配石実測図(1/40)

2号配石 11G南側で、3号土壙と円形配石との間で検出された。直径約25cmの自然石を囲むように、15cmくらいの自然石が明らかに置かれていたが、この周囲には石が散乱していた。南側の未掘地域に造構が延長しているかもしれない。東にある3号土壙の掘込面と配石上面とのレベルはほぼ同一である。遺物は第20図のように古墳時代中期に比定できる甕の底部や高杯の却部が出土した。



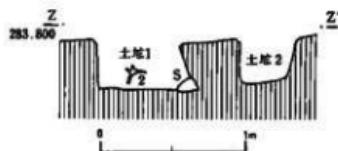
第19図 1号配石出土遺物実測図(13G)(1/3)



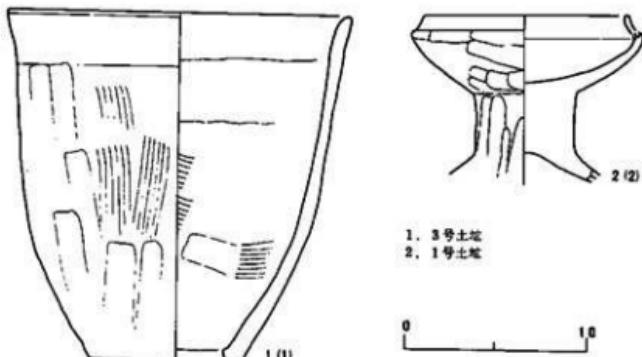
第20図 2号配石出土遺物実測図(11G)(1/3)

1号土壙 11~12Gで検出した。形は円形で、直径70cm、深さ35cmである。高杯が逆位に埋納されていたので、墓壙であるかもしれない。

2号土壙 1号土壙の南で検出した、直径38cm、深さ約30cmの円形で、掘込面は1号・3号土壙とはほぼ同じである。遺物は出土しなかったが性格は2者と同じであると思われる。

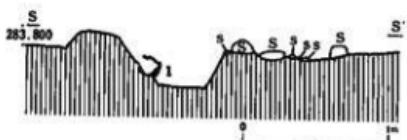
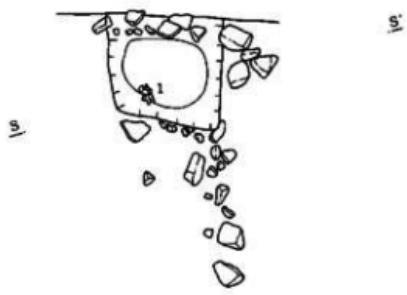


第21図 1号土壙 2号土壙実測図(1/40)



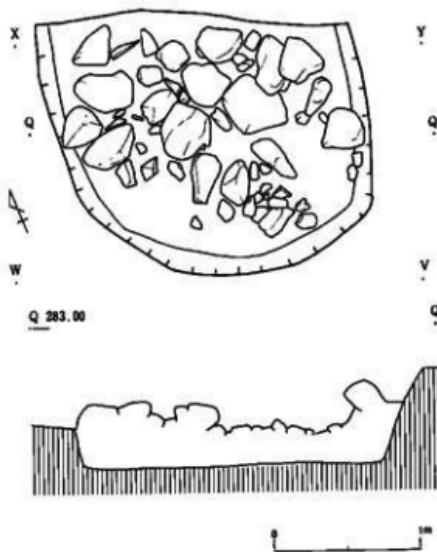
第22図 土壙出土遺物実測図 (11G) (1/3)

3号土壙 11G南側で、2号配石に接して検出した。形は上層が方形、下層が円形で、直径75cm、深さ32cmである。この上層の掘込面より上に集石があった。中には第23図のように頭が横転したように埋納されていたので、墓壙であろうと考えられる。



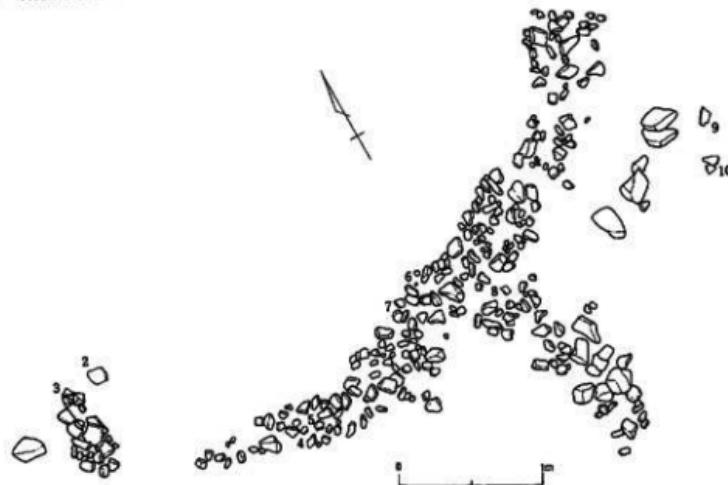
第23 3号土壙実測図(1/40)

6号土壤 15G北側で検出した。3分の1は路線外にあったために発掘できなかった。形は不整な円形で、直径は約1m、深さは約35cmである。上層には直径15cm前後の石が乱雑に置いてある。墓壙であろうか。

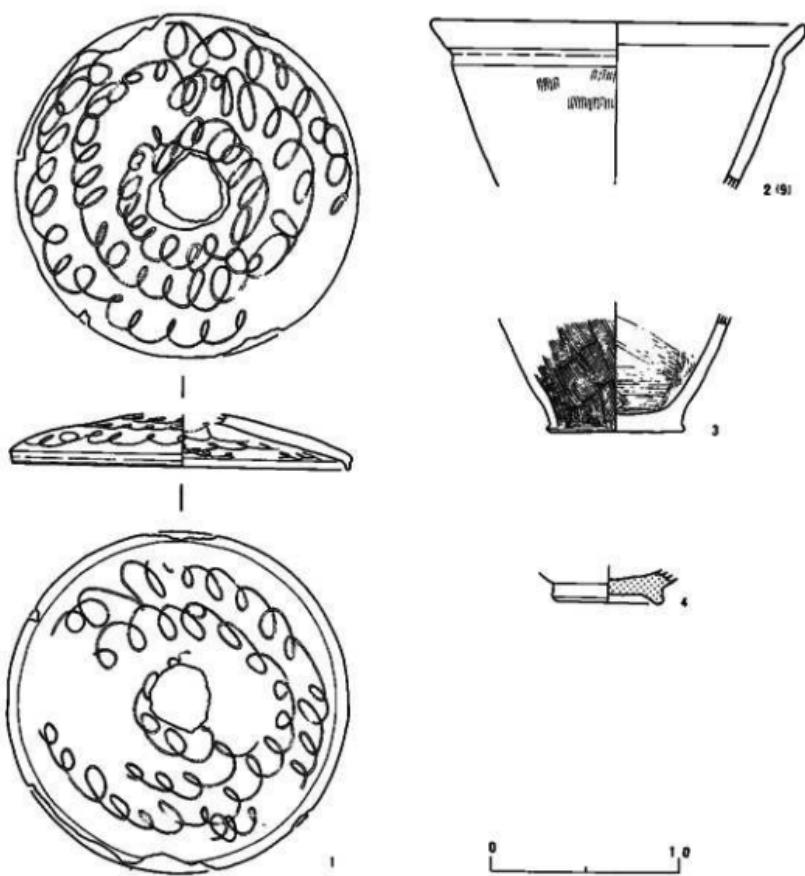


第24図 6号土壤実測図 (1/40)

2号集石列 5Gで検出した長さ5m、巾30cm、高さ15cm位の2股の形状をした性格不明の遺構である。拳大前後のほぼ円形の小石を乱雑に積み上げている。両側の発掘範囲外に延長しているが暗渠配水施設とも思われない。

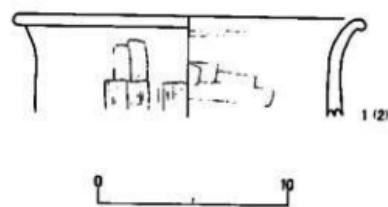


第25図 2号集石列実測図 (1/40)

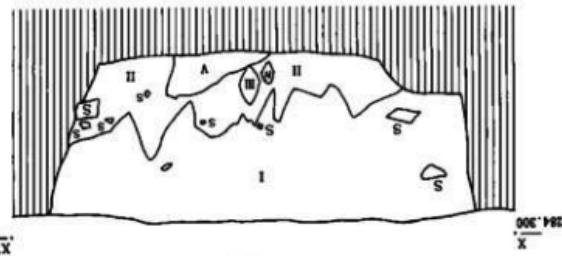


第26図 2号集石列付近出土遺物実測図 (5G) (1/3)

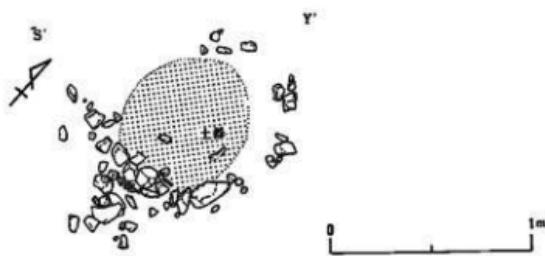
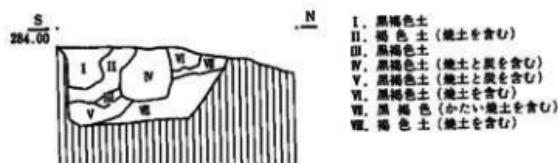
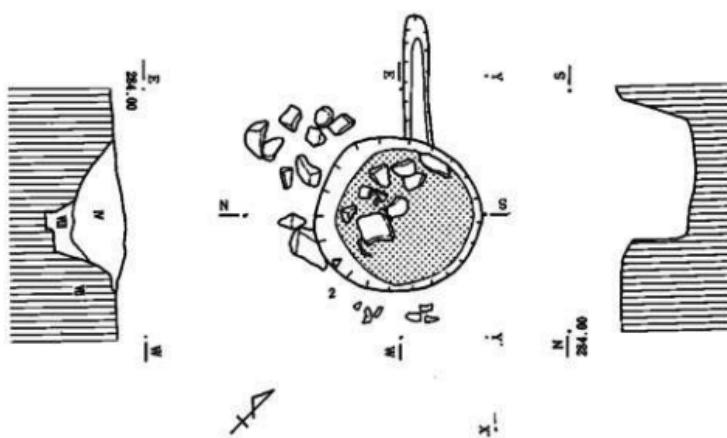
銀冶遺構 10G南側で検出した。そのほとんど
の部分が路線外にあったが、地主の了承を得て一
部分を発掘することができた。遺構は円形の鋤込
部から細長い溝が突出している。円形部には5～
20cmの石が焼土を囲むように散乱していた。円形
部には炭を含む真赤な焼土が30cmくらい堆積し、
その周囲にも厚い焼土がみられた。遺構は全体を
調査できなかったためもあって、その遺構を充分
把握できなかった。遺物は1m以内の範囲で鉄屑



第27図 銀冶遺構出土遺物実測図 (10G)(1/3)



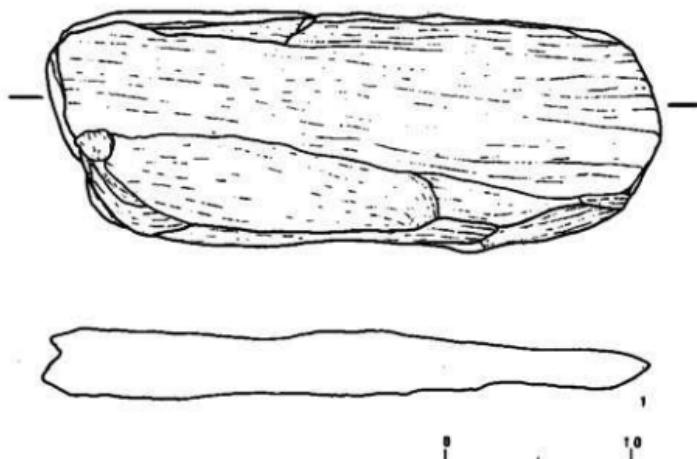
10G 南壁地層図



第28図 錫冶遺構実測図

や少量の土師器を検出した。

粘板岩を囲む配石 5 Gで検出された長さ40m、巾20m、厚さ3cmの粘板岩が、6個の拳大の礫が円弧を描くように並べられた中にある。その北に3個の鬼高式壺が置かれたような状態で検出され、周囲からも鬼高式土器が出土した。



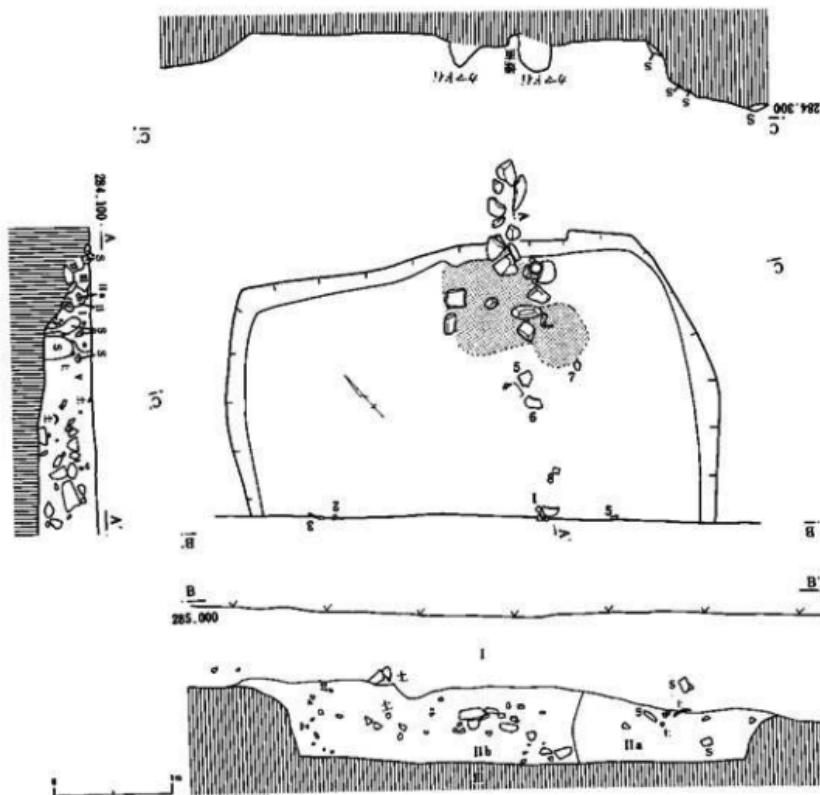
第29図 5 G出土遺物（粘板岩）実測図（1/3）

その他 3号住居址と粘板岩の間に、人頭大の石の集石があり、その下層に炭化物が直径2mくらいの円形に厚く堆積していた。また4Gに、明治時代の墓があり、これを改葬するために遣族が立合いのもとに、農林水産省笛吹川農業水利事業所員が重機で発掘した下層より、鬼高式土器を伴ったかまど址が発見され、また10号住居址が発見された。また10号住居址の南と西にも破壊されたかまど址を各1基づつ検出した。

第2節 奈良時代

堅穴住居址

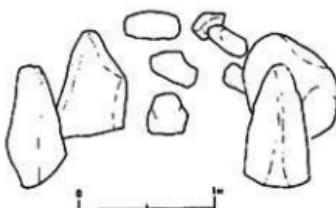
1号住居址 大きさは東西4.25m、南北は南側が路線外に出ているため不明である。深さは比較的深く66cmである。柱穴は検出されなかった。住居址の周囲には小礫を混入した粘質土で固められた帯状の周堤らしい部分が西側にあった。かまどは石を芯として北辺にあり、煙道は石を2列に並べて構築してある。覆土には大小の礫が混入して押し出した地層のようになっていた。遺物は少なく甕の破片が1点出土しただけである。



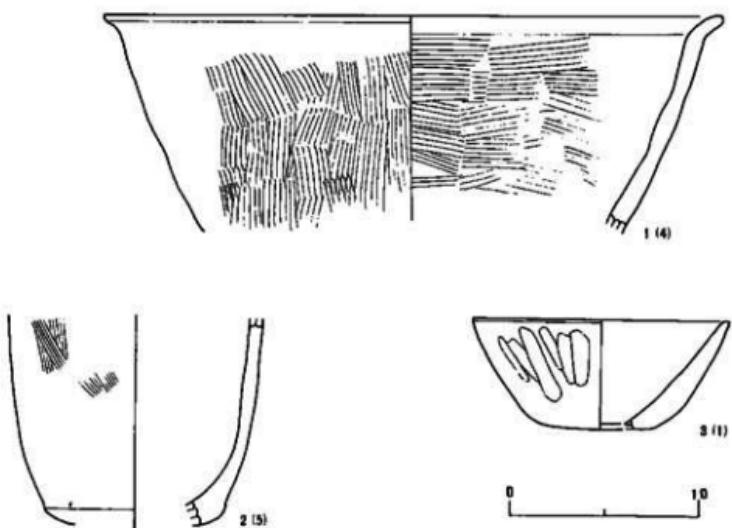
A-A' 第30図 1号住居址実測図 (1/40)

I層 黒褐色土 粘土、粘土、小砾を含む
II層 黑褐色土 粘土、粘土、砂を含む
III層 茶褐色土 砂層、小砾を含む
IV層 茶褐色土 砂層
V層 黑褐色土 少し粘土を含む住居址表土

B-B'
I. 農耕上
II. 黑褐色土大小の砾を多く含む
IIa. 黑褐色土大小の砾をわずかに含む
(住居跡植土) 1号住
III. 碎 磨

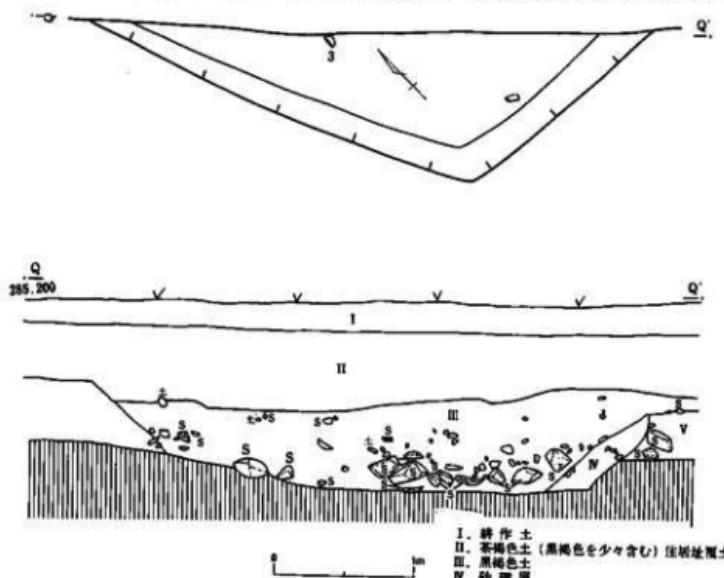


第31図 1号住居址かまと見取図

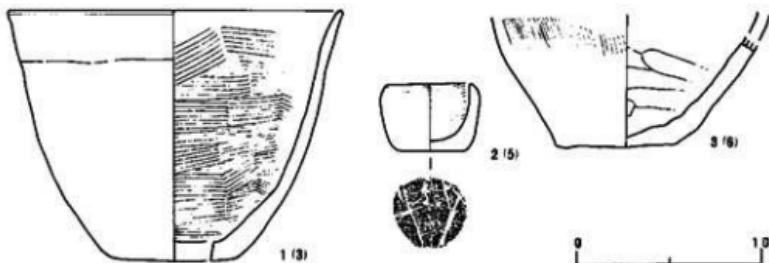


第32図 1号住居址出土遺物実測図 (7 G) (1/3)

2号住居址 9Gの北側で、わずかに隅が検出されただけで、大きさは不明である。覆土は1

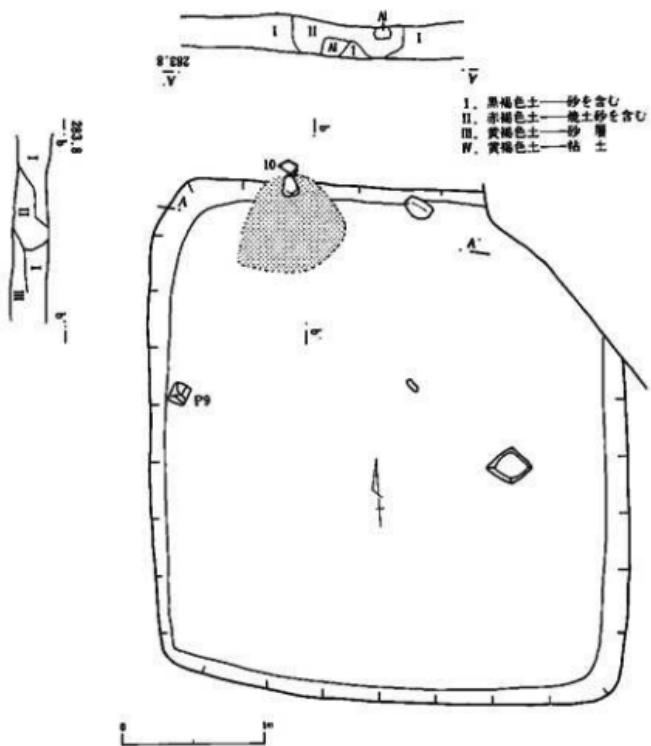


第33図 2号住居址実測図 (1/40)



第34図 2号住居址出土遺物実測図 (9 G) (1/3)

号住居址と似ていて、押し出したような地層である。遺物はこしきや手捏土器等が出土した。



第35図 9号住居址実測図 (1/40)

9号住居址 10号住居址を切って掘られている。大きさは東西3.4m、南北3.6mで、北側で焼土とかまどを検出した。真間式の杯と甕の小破片が出土した。

第3節 平安時代

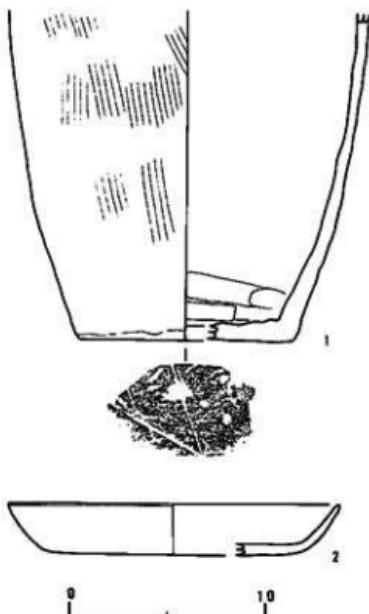
遺構は発掘区の全体に分布しているが、1G～4Gまでは特に多く、この時期のものだけで、しかも住居址が重複していたと思われる所もあった。特徴として、石で形造られた遺構が多く、またこれらが故意に破壊されたらしい痕跡や、遺構を破壊した石を集めたり、積重ねたような集石も異状に多かった。

遺構数は4・5・7・8号住居址4軒と、1号円形配石、3・4号配石の3基、列石が1～8号の8基、土壙が5号の1基、石組の溝が1基、集石列が1・2号の2基で、集石は9ヶ所あった。その他搅乱されていたため住居址が検出できなかつたかまどが4基だったので、遺構数は平安時代のものが最も多い。

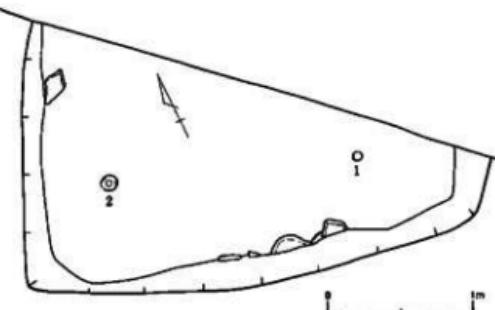
竪穴住居址

4号住居址 6Gで検出した。発掘したのは3分の1ほどで、他は路線外に出ていた。大きさはその南辺が3.2mである。住穴は検出できなかった。遺物は少なく、杯の破片3個とその小破片が少量出土しただけであった。

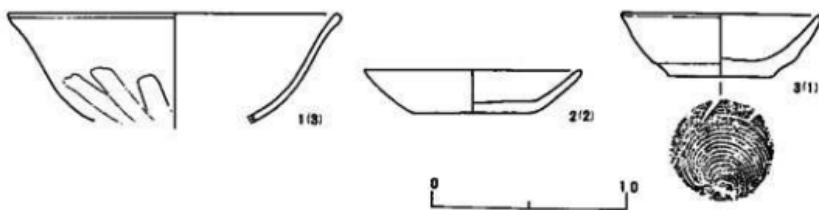
第38図の1や3に示した杯は本遺跡で出土した土器の中では終末期のものであろう。11世紀～12世紀に比定され、下長崎遺跡が廃絶する頃の住居址と考えられる。



第36図 9号住居址出土遺物実測図
(13・14G) (1/3)



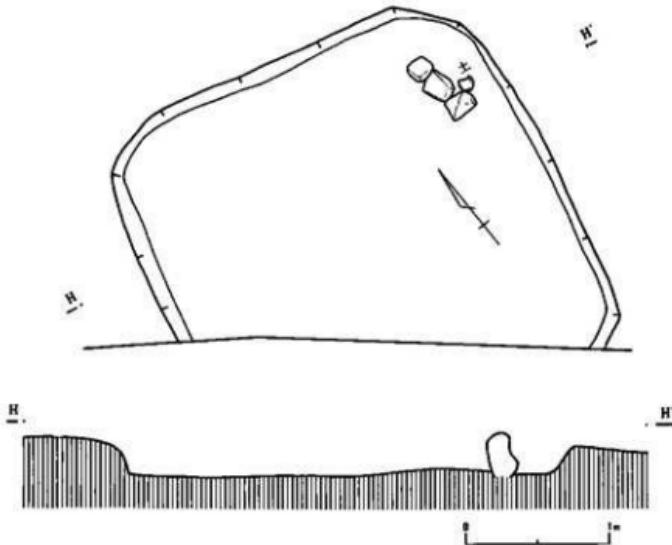
第37図 4号住居址実測図 (1/40)



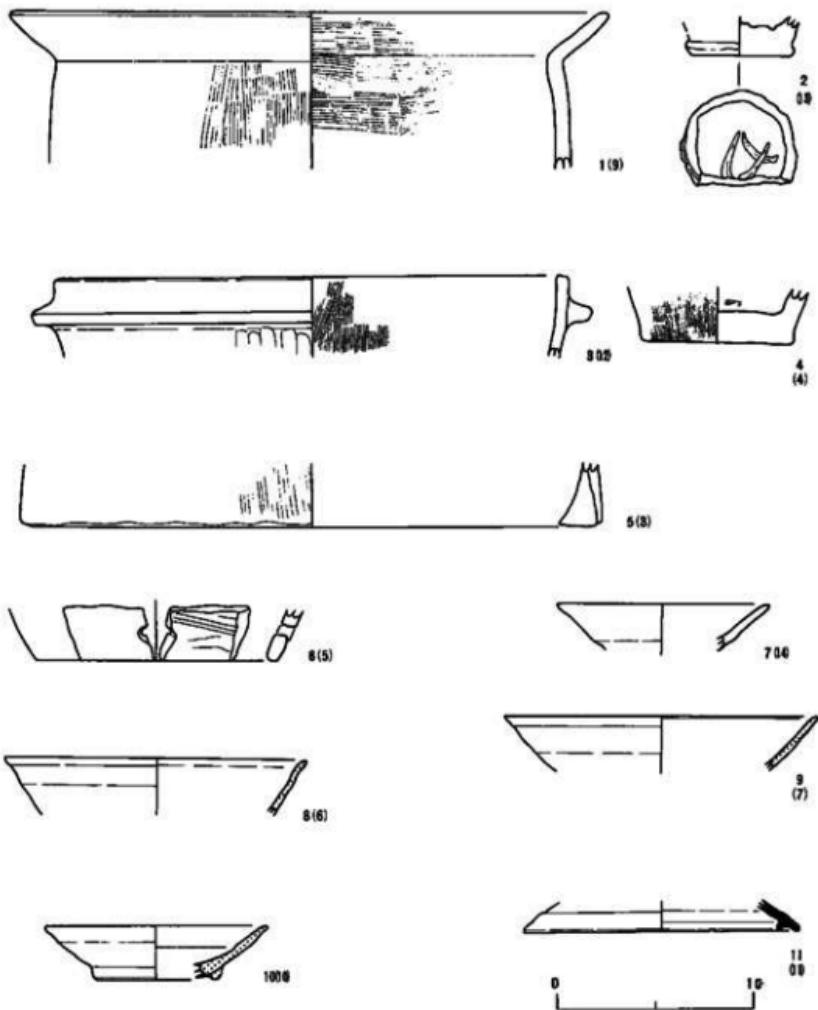
第38図 4号住居址出土遺物実測図 (6 G) (1/3)

5号住居址 東端の1G～2Gで検出した。南側4分の1が路線外に出ている。東西の長さは2.9mで北東の隅にかまどがあるが、袖石の片側は抜き去られていて、耕作によって破壊されたためか煙道は検出できなかった。遺物は多く、土師器の他に須恵器と灰釉陶器も出土している。1はやや古手の壺の口縁で、3は羽釜、5は置きかまどの底部と思われる。2は土師器の底部で、底に「か」かと思われる陰刻がある。時期は平安時代中期10世紀に比定できよう。

7号住居址 3Gから4Gにまたがって、その北側で検出した。北側の一部は路線外にあるために調査ができなかった。また南西隅は搅乱されて壁はなかった。住居址全体は上層（表土）から搅乱されて浅く、10cm～20cmの深さである。プランは東西が3.1mで南北が2.8mである。北側



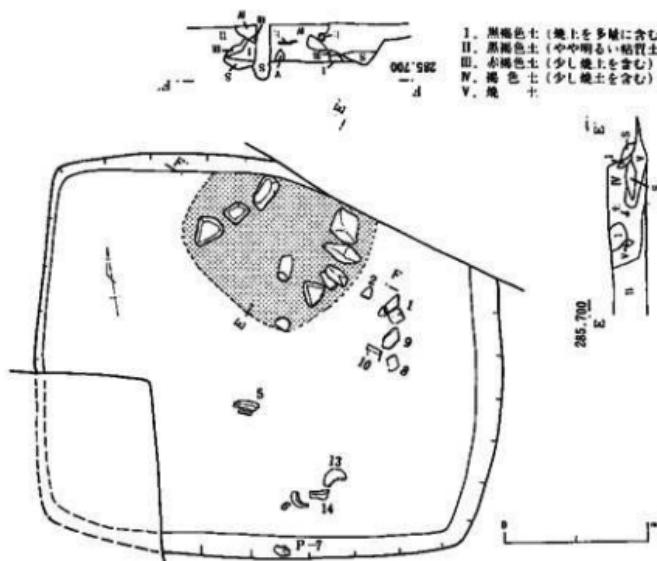
第39図 5号住居址実測図 (1/40)



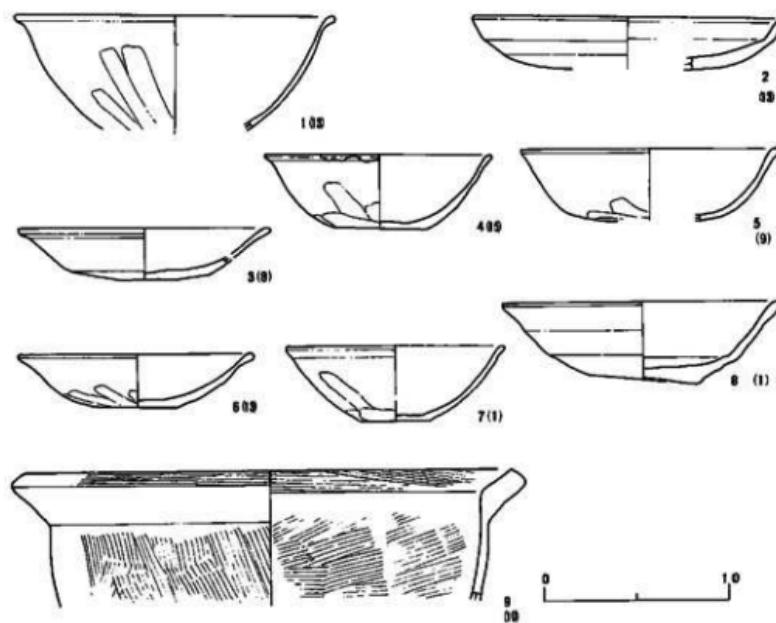
第40図 5号住居址出土遺物実測図 (1・2 G) (1/3)

にかまどがあり、その両袖に使った石がよく残っていて、焼土も厚く堆積していたが煙道は擾乱のためか検出できなかった。かまどが北側にある住居址は古い時期に属するものが多いが、この住居址は新しく、10世紀後半から11世紀頃廃絶したと思われ、この遺跡では新しい時期のものである。

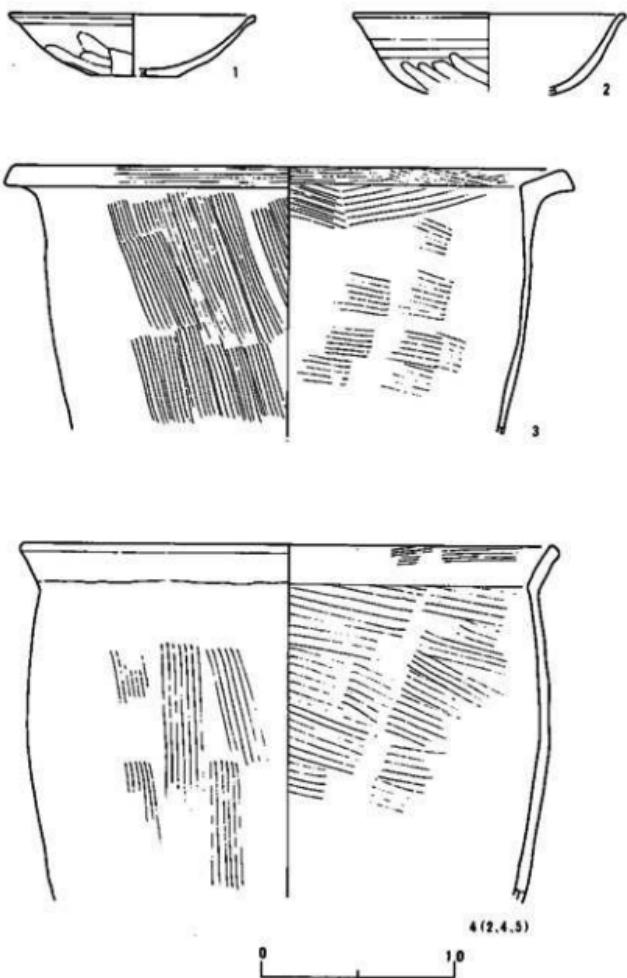
遺物は本遺跡では最も多く出土しており、挿図に示すように、住居址覆土上層と下層およびかまど内のものがある。上層から出土した土師器は杯が多く、深めで、口縁は発達した玉縁が多い。



第41図 7号住居址実測図 (1/40)



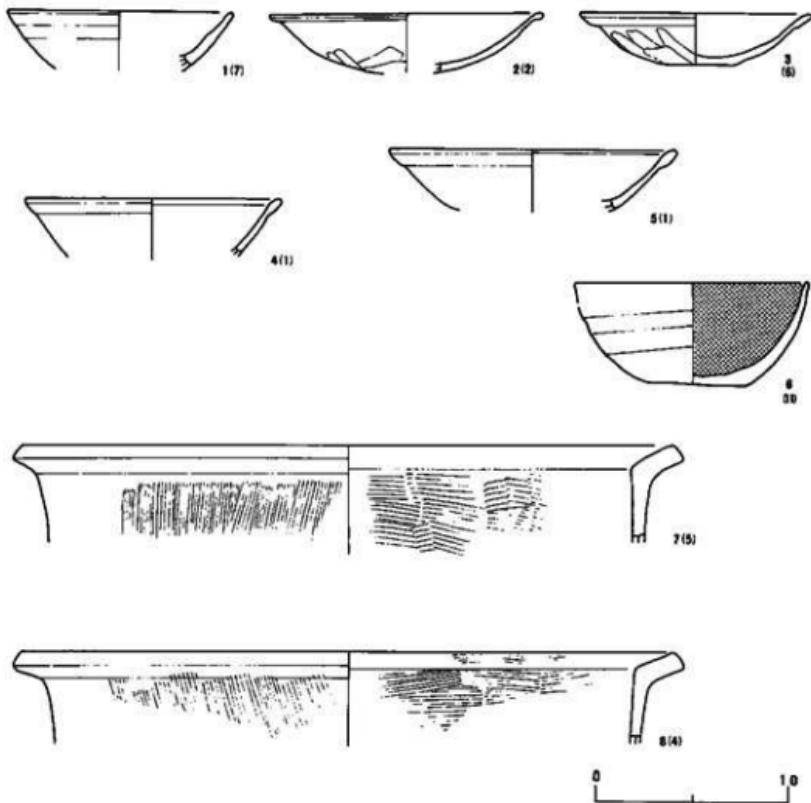
第42図 7号住居址上層出土遺物実測図 (3・4 G) (1/3)



第43図 7号住居址かまと内出土遺物実測図 (3 G) (1/3)

要も新しく、遺物全体としては11世紀前半に比定できると思われる。下層から出土した遺物は第44図No.1やNo.6のように9世紀頃に比定される可きものもあるが、浅い壺などがある、全体としては上層よりやや古手であろう。かまとから出土した甕の破片No.4は3片を接合したもので、9世紀に比定されると思われるが、その他の甕や壺は10世紀から11世紀のものと考えられ、この住居址が廃絶した時期を示すものであろう。

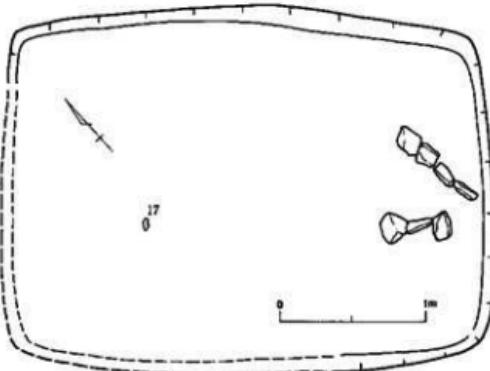
7号住居址は本遺跡で検出した住居址の中で後半のものであって、この時期に続く後の遺構は2号かまとや4号住居址であろうか。



第44図 7号住居址下層出土遺物実測図(3G)($\frac{1}{3}$)

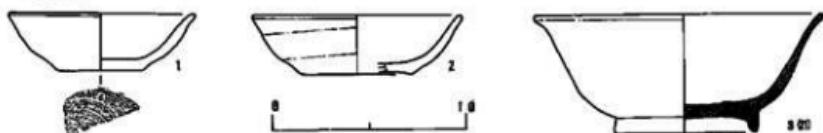
8号住居址 2G～3Gで検出された。北側は路線外に出ていたが地主にお願いをして、調査させていただいた。壁は削り取られて低くなっていた、南西の部分ではなく、床面下の固い部分が残存していた。かまどは東側にあったが煙道は検出できなかった。北東隅から北側の上層には石組の遺構が破壊された痕跡が残っていた。

遺物は縁釉陶器と11世紀に比定



第45図 8号住居址実測図($\frac{1}{40}$)

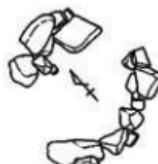
できる土師器の坏が出土した。绿釉陶器は後述するように美濃折戸53窯第5に類似しているので、10世紀後半の所産と考えられる。



第46図 8号住居址出土遺物実測図 (3G)(1/3)

配 石

1号円形配石 11Gの南壁に接した所で検出した。上部には乱雑に置かれた集石があった。人頭大～拳大の石で、直径1.2mくらいの円を描くように並べられている。西側に接して検出された1号集石列と関係ある造構かもしれない。



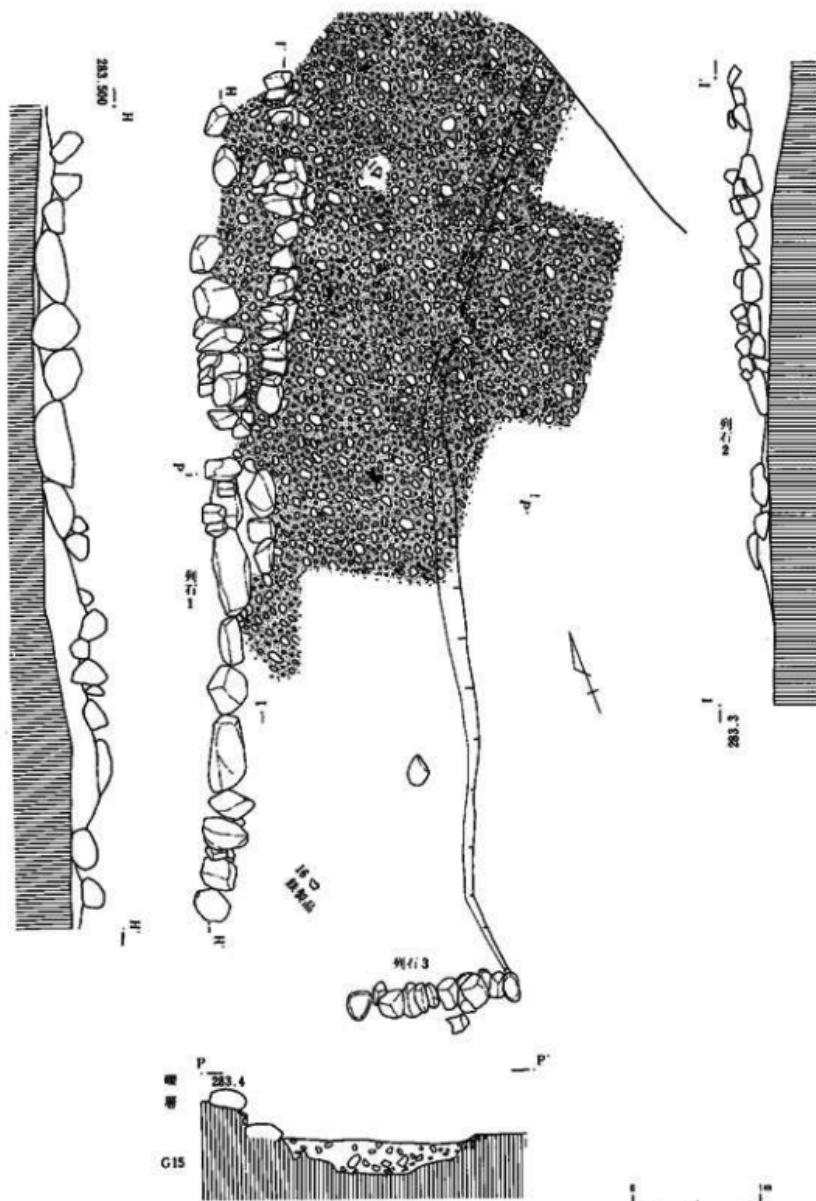
第47図 1号円形配石
実測図 ($\frac{1}{40}$)

列 石

1号列石 発掘区の西端にある石垣で、上部が破壊されている。面は上流（東）にあり、2号列石によりやや下って積まれている。南端が切れているが3号列石に連結していたようである。下流部（西側）が10m四方くらい周囲より約30m高くなっているので、何らかの造構であったと思われる。

2号列石 1号列石の東側直下にあり、上部が破壊されている。面は上流（東）にあり、前面に1号集石が広がっている。この集石下は3号列石の前まで掘り込まれている。

3号列石 14Gにあり、1号列石と直角に連結していたと思われ、面は北にある。上部は破壊されている。



第48図 1号・2号・3号列石実測図

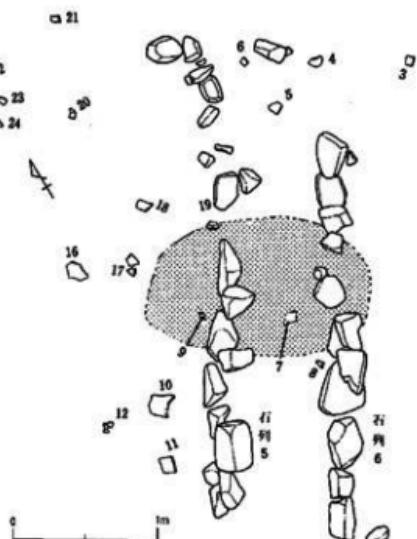
4号列石 13Gの1号配石直上から検出した。人頭大～30cmくらいの石が南北に、面を西に向けて一段で並べられており、その西側には小碑があった。列石は、破壊されたような状態であったので、おそらく延長するのであろうし、また上部にも積まれた石垣であったと考えられる。付近には平安時代の遺構は少なかったが、広い範囲に焼土や焼土塊が數ヶ所あった。

この遺構の伴出遺物はなかったので時期は確定できないが、1号配石の上層にあったことや周囲から出土した土師器の状況から平安時代後期のものと考えられる。

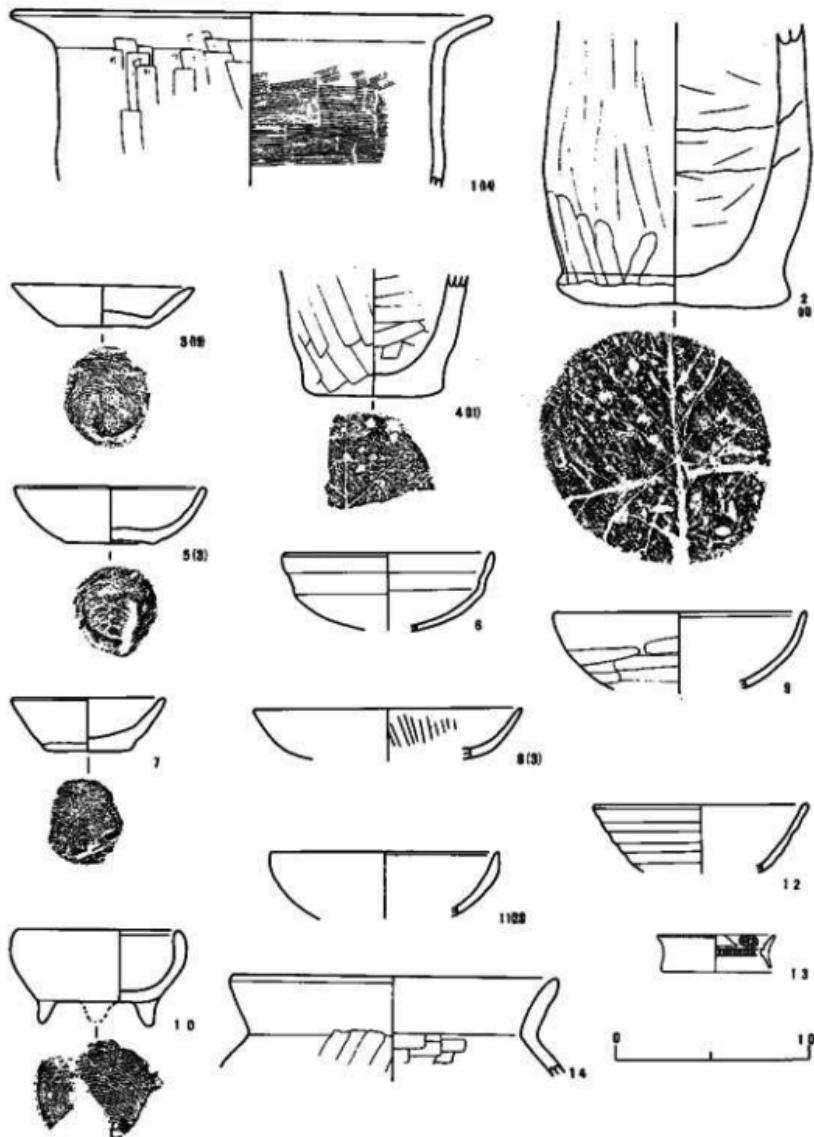


第49図 1号列石実測図
(1/40)

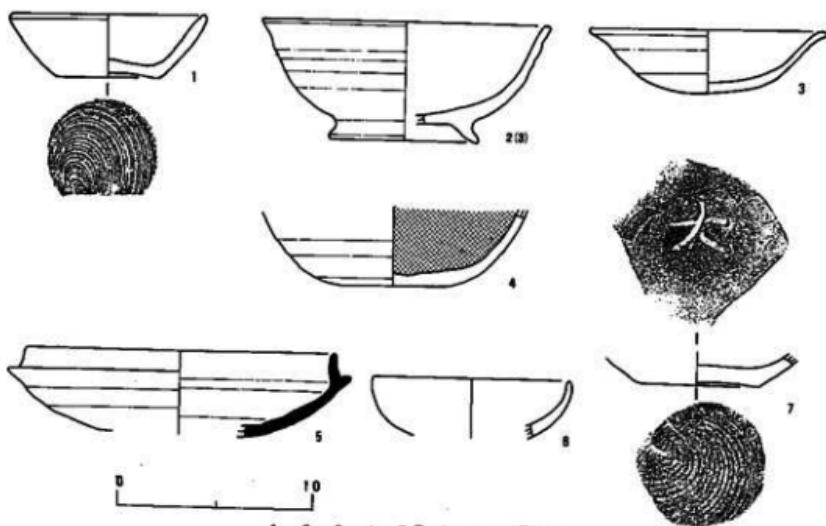
5・6号列石 10Gにあり、両者は約60cm離れて並列しており、上流（東）に面がある。現状は一段積みであるが、上部は破壊されたかどうかはわからない。破壊された可能性もあり、そうとすれば重箱積だったと思われる。発掘区外に延長している。中央部に厚い焼土があったので、この上で火を焼したものである。



第50図 5号・6号列石実測図(1/40)



2 · 3 · 4 — 5号列石 6—14集石
 5 · 8—6号列石 1 · 7 · 9 · 11 · 12 · 13—14G
 第51圖 5 · 6号列石、集石、G出土遺物實測圖



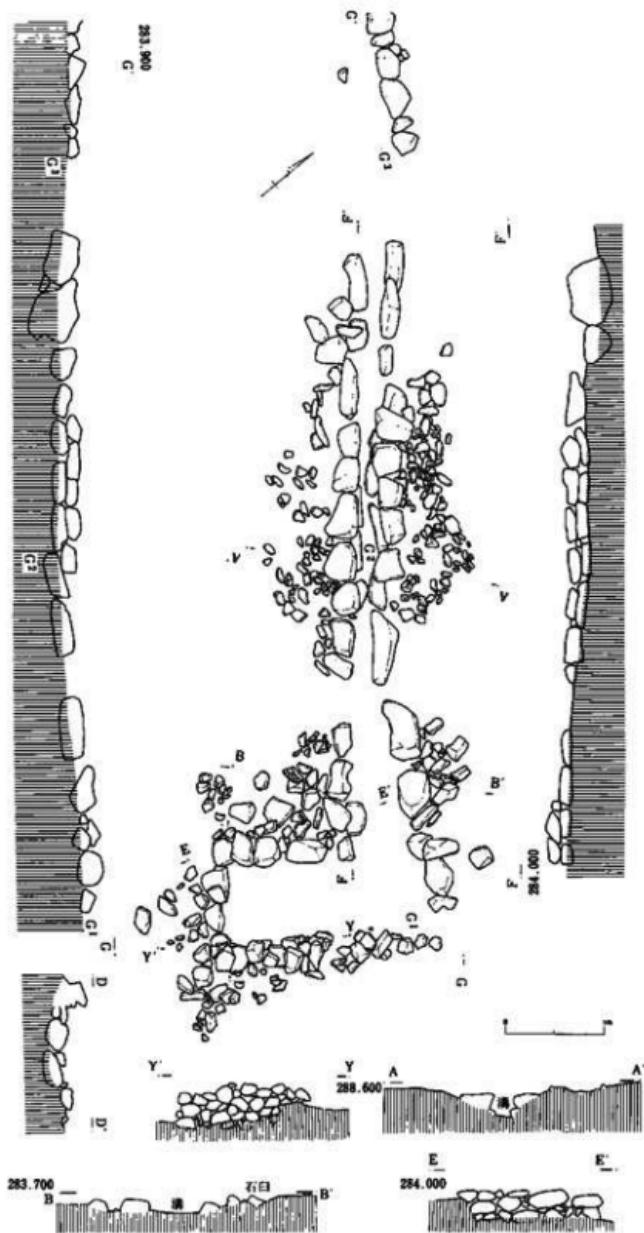
1・2・3・4—5 G 6・7—7号列石
第52図 7号列石・G出土遺物実測図(3G)(1/3)

構

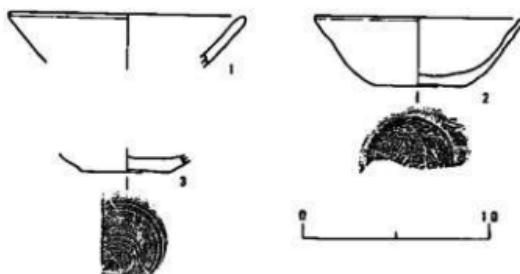
1号溝 12G～13Gで検出した水溜と水路で、自然石によって構築されている。水溜の広さは東西74cm、南北2m、深さ40cmで、東側は人頭大の石を乱雜に、南側と西側は20cm～30cmくらいの石を重箱積に積み上げている。三方にはそれぞれ裏込めの石をつめていて、西側の最上部に石臼(上臼)があった。溝部は長さ8.7m、巾10cm～30cmで、30cm～50cmくらいの大きい石を立てたり、2、3段の重箱積にしている。上面の状態によって判断すると、上に1段から2段あったかも知れない。溝の上流部と中間が破壊された形跡があり、石組が欠けている部分がある。水は西に流していて、さらに路線外に統くと思われる。裏込の石は全体ではなく、中間部の西側だけにある。溝はその底から11世紀～12世紀に比定される土師器破片が2個体出土したので、この頃に構築されたと考えられるが、前述した石臼は中世後半の所産と考えられるから、中世に構築されたものと考えられないことはない。なお掲載した実測図と写真は明らかに復元できる所を復元したものである。

上流に設施された水溜には水口が検出されなかったので、この水溜の中に湧水があったものと思われる。浅川扇状地の扇端に近いこの付近には湧水を溜める貯水池があり、またこの遺跡と同じくらいの標高をつなぐ線上には、他に3ヶ所貯水池がある。これらには現在では湧水はほとんどみられないが、かつてはあったというので、この線上にスプリングラインがあったと考えられる。

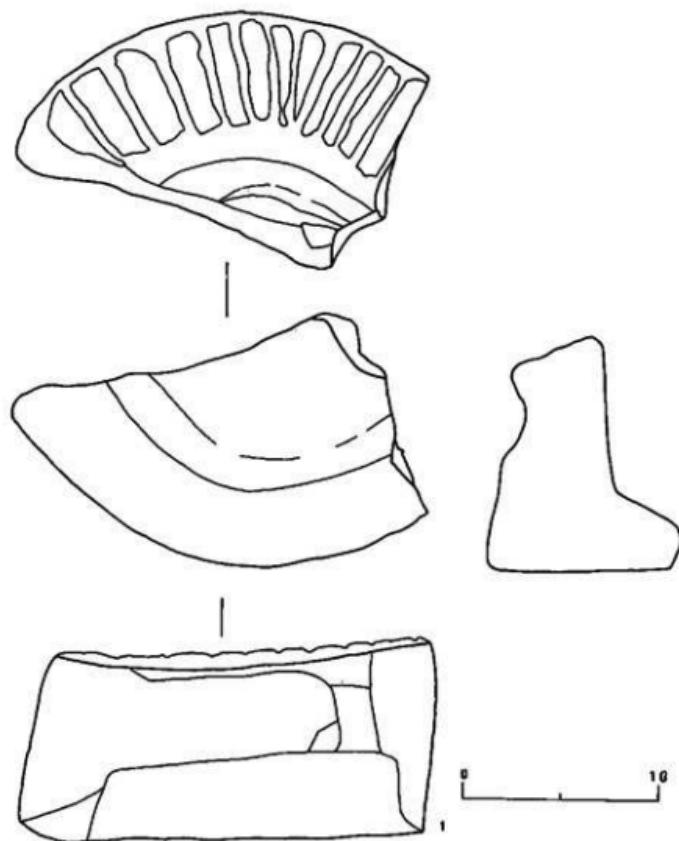
11Gにある水溜の上に、条里型地割を構成する道が南北に敷設されていて、その敷設時期が平安時代末より以後のものであることが明らかになった。



第53図 1号測定図



第54図 1号溝の下出土遺物実測図 (12G) (1/3)



第55図 水溜付近出土遺物実測図 (11G)

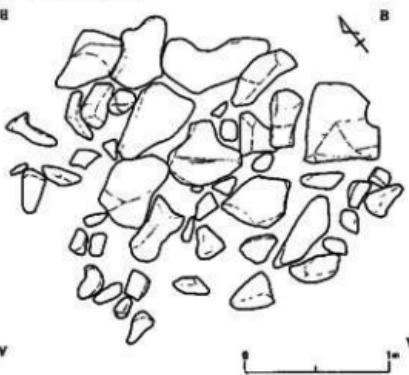


第56図 6号集石実測図

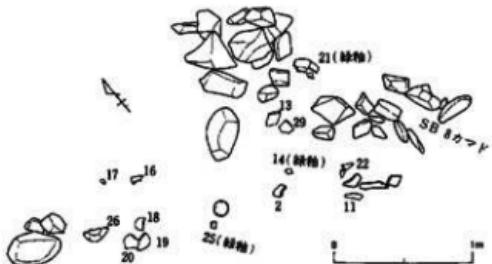
集石 その他

集石 破壊された石組遺構の石が散乱しているようなものや、人の手によって運ばれ集められたと考えられるものを集石とした。このように遺構として認められない集石が13ヵ所あり、これらが全て平安時代後期に属している。これらには遺物が伴わないので時期が不明確な集石もあったが、周囲から出土した遺物や、近くにある平安時代の遺構レベル等からその時期を判断した。

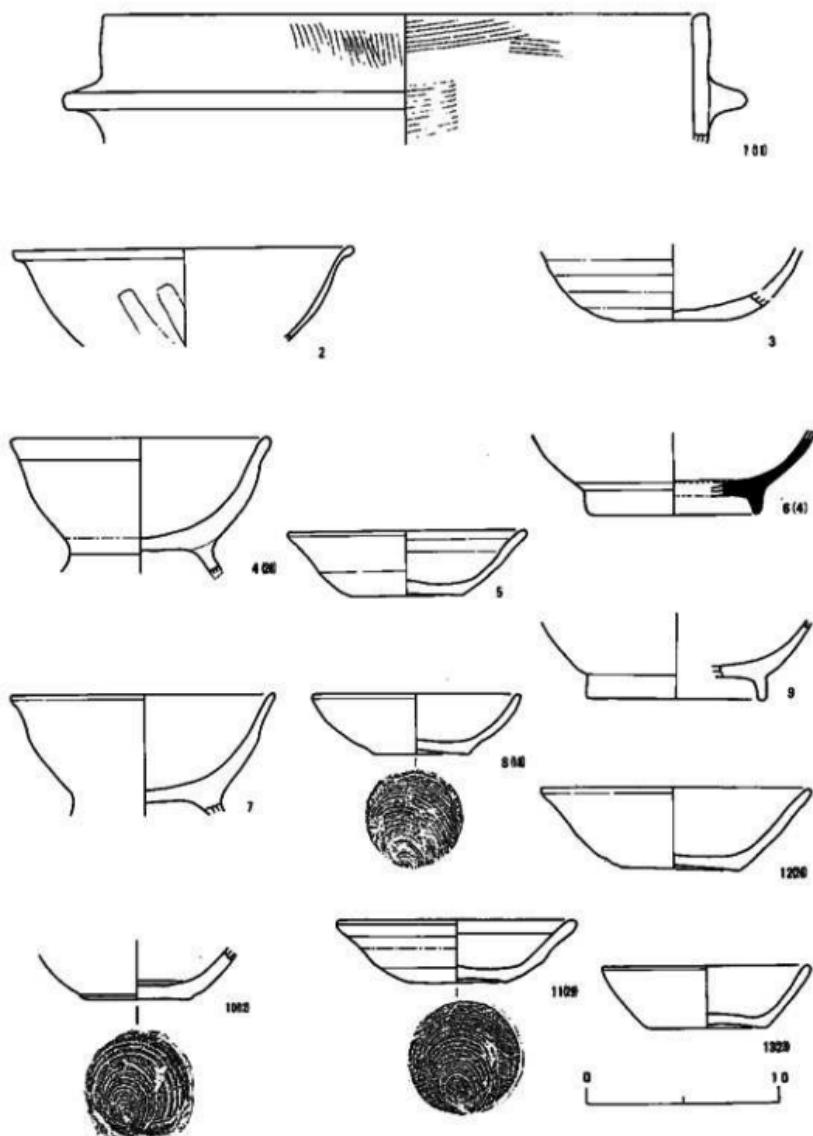
破壊されたと思われる石組遺構は1号集石から12号集石までの12基である。捨てられたような集石は1・11・12号集石の3基で前者よりも広い範囲を占めている。なおこの他にも前述した集石に類似するものも數ヶ所あった。



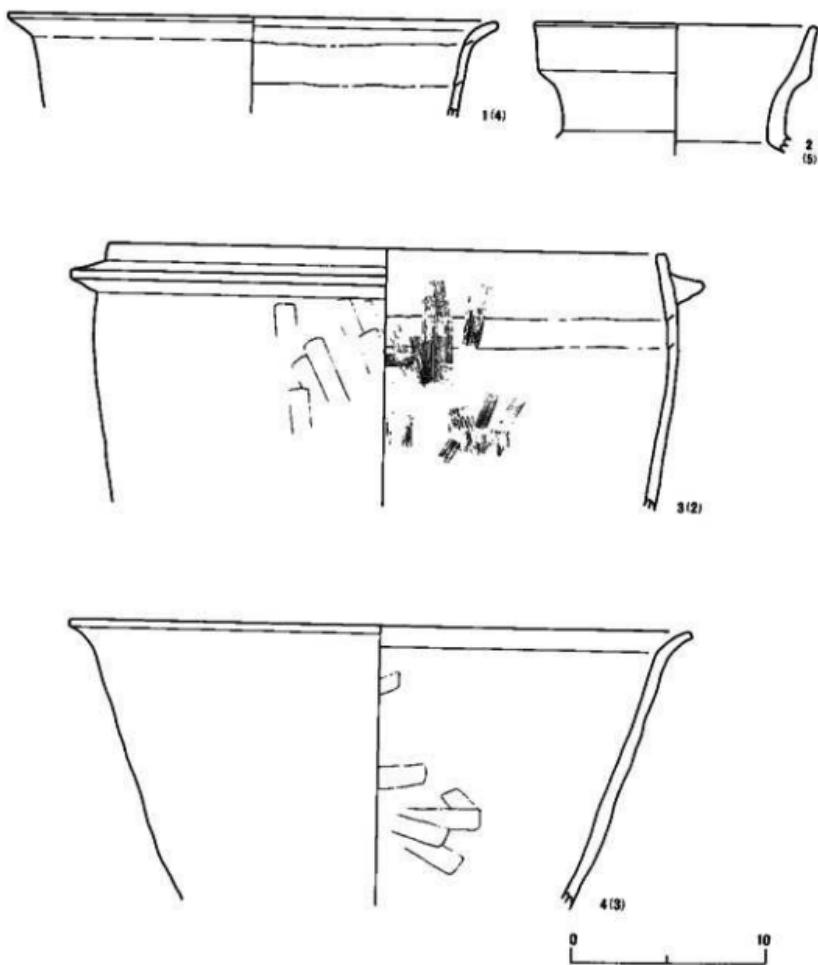
第57図 7号集石実測図 (1/40)



第58図 8号集石実測図 (1/40)



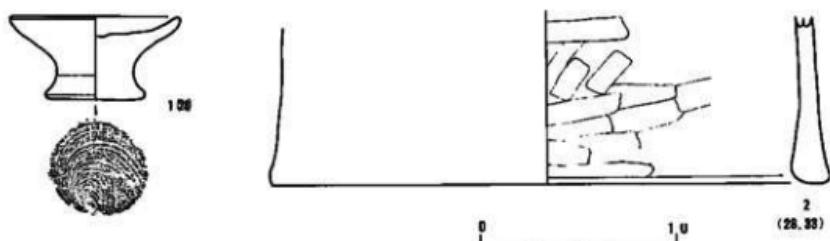
第59圖 7号-8号集石出土遺物実測図 (3 G) (1/3)



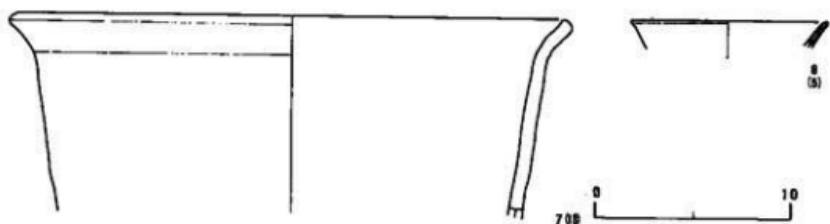
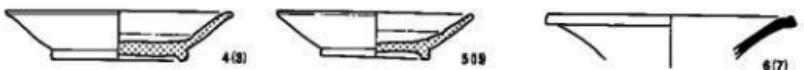
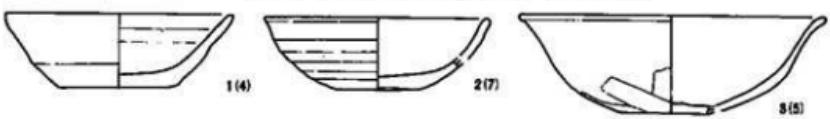
第60図 11号集石出土遺物実測図 (1 G) (1/3)

かまど 発掘地区にわずかに入っていたかまどが南の境界線に接して3基、北に1基（煙道のみ）の計4基あったが、これに伴う住居址は検出できなかった。

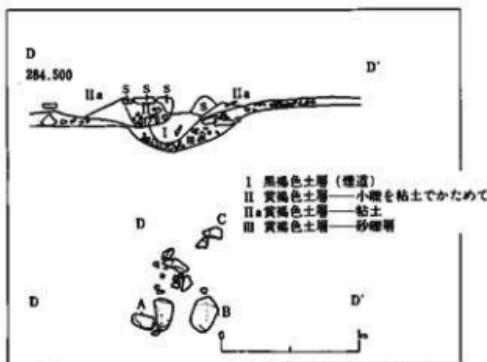
かまどは、住居址の北壁か北東隅に多くあるために、南側の3基は住居址が検出できず、北側の1基は1号住居址によって破壊されたと思われる。2号かまどから出土した第61図の1は12世紀に比定される台付窯で本遺跡の住居址中の最終末のものである。かまどだけの遺構から出土した遺物はこの頃のものが多い。



第61図 2号かまど出土遺物実測図 (10G) (1/3)



第62図 3号かまど出土遺物実測図 (3G) (1/3)



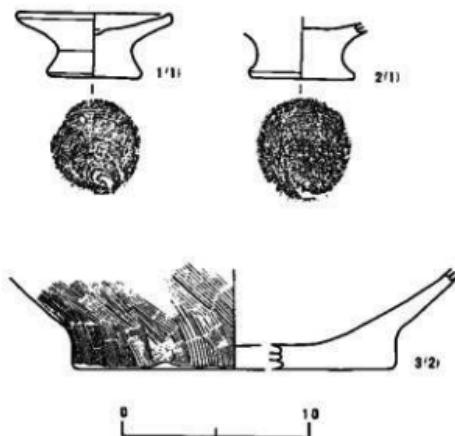
第63図 4号かまどの煙道実測図 (9G) (1/40)

その他の遺物

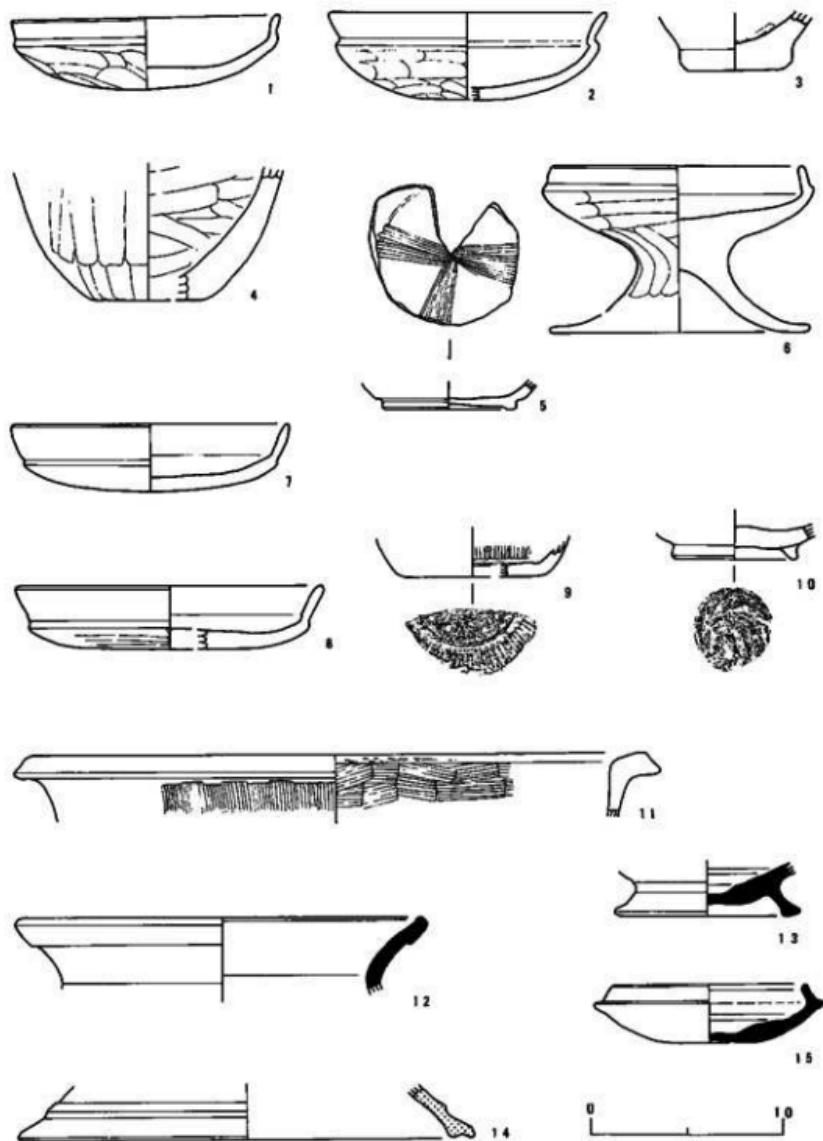
グリッド出土遺物 発掘区全体から遺構に伴わない遺物が多量に出土しているが地域的には1Gから7Gあたりまでが多い。そのほとんどは土師器であるが、前述した縁釉陶器と灰釉陶器や須恵器なども他に比較すると多いようにみられる。平安時代の土師器では、その前期のものもあるが、後期が多く、中でも11世紀を中心とする様相である。

下長崎遺跡は検出した遺構の状況等から推測すると、人為的に破壊され、その時に廃絶した可能性が考えられる。その時期を推測する資料として、グリッドから出土した土師器、土師質土器を上げると次のようである。第20図2は器肉が厚めで、浅い土師質坏。第51図7は器肉が厚く、特に内面底部の立上りのようすは第XV期（11世紀第1四半期）に比定できる7Gから出土した土師質坏である。第64図1、2は2Gから出土した土師質の台付杯で明らかに第51図7と同じ時期かやや前のものである。6G上層から出土した第67図1、3、7は折り重なった状態で出土した完形品の土師質坏である。本遺跡中では最も上層で、破壊された石の遺構のような場所から出土した。時期は前者より後、即ち12世紀中葉あたりに比定できるかも知れない。7Gから出土した第69図3は20図2に似ている。第71図9の土師質の杯は11世紀末か12世紀に、第73図2は中世の杯に似ており、第74図3と第75図9は13Gから出土した杯で11世紀から12世紀に比定されよう。以上のように挿図に掲げたものだけでも多いが、小破片は更に多い。

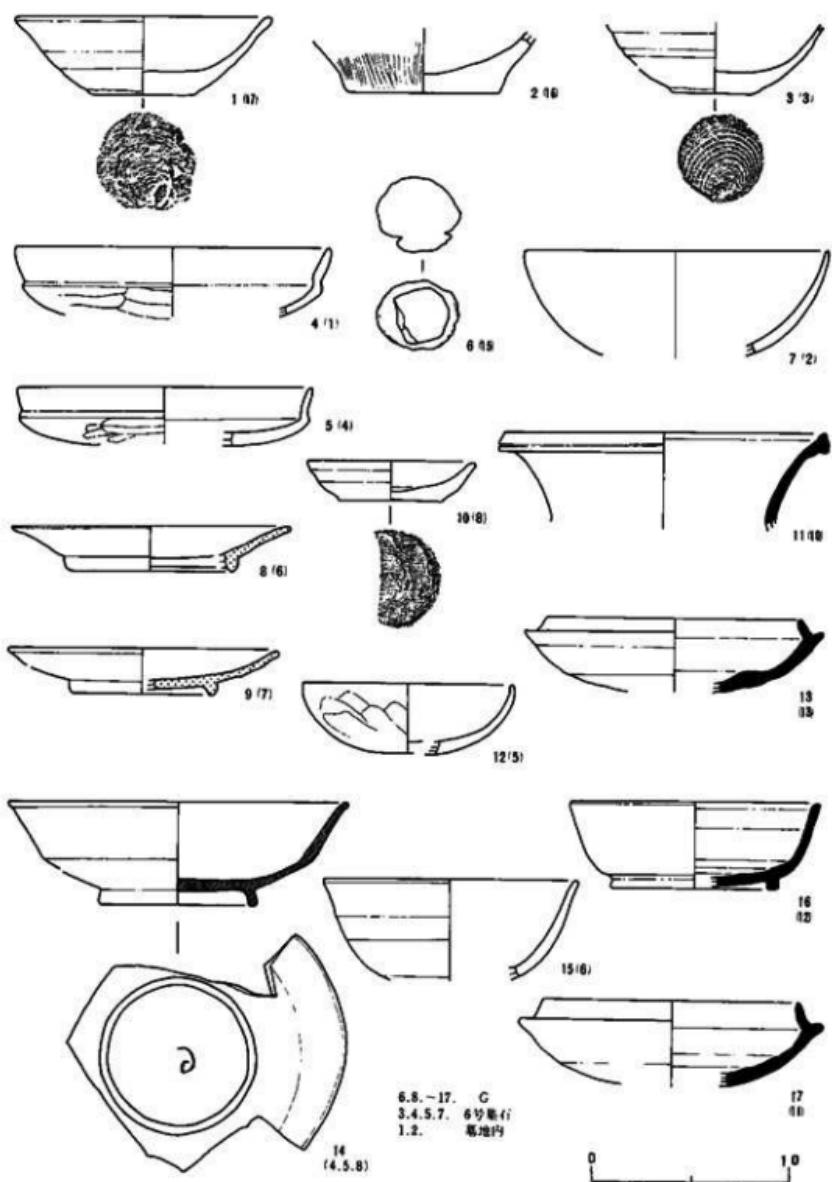
また特殊な遺物としては、第20図9、10、第75図3、第76図5の土師器土製円板が4個、第56図6の土弾状のものが1個が出土している。また第74図1は12Gから出土した羽口先の破片で、固く焼きしまり、外側は溶融して自然釉のようないわが付着している。これは前述した鉄屑とも考えあわせると、鍛冶遺構があった証拠であろう。これら特殊な遺物はその時期が特定できないが、いずれも古墳時代から平安時代までの所産であろう。



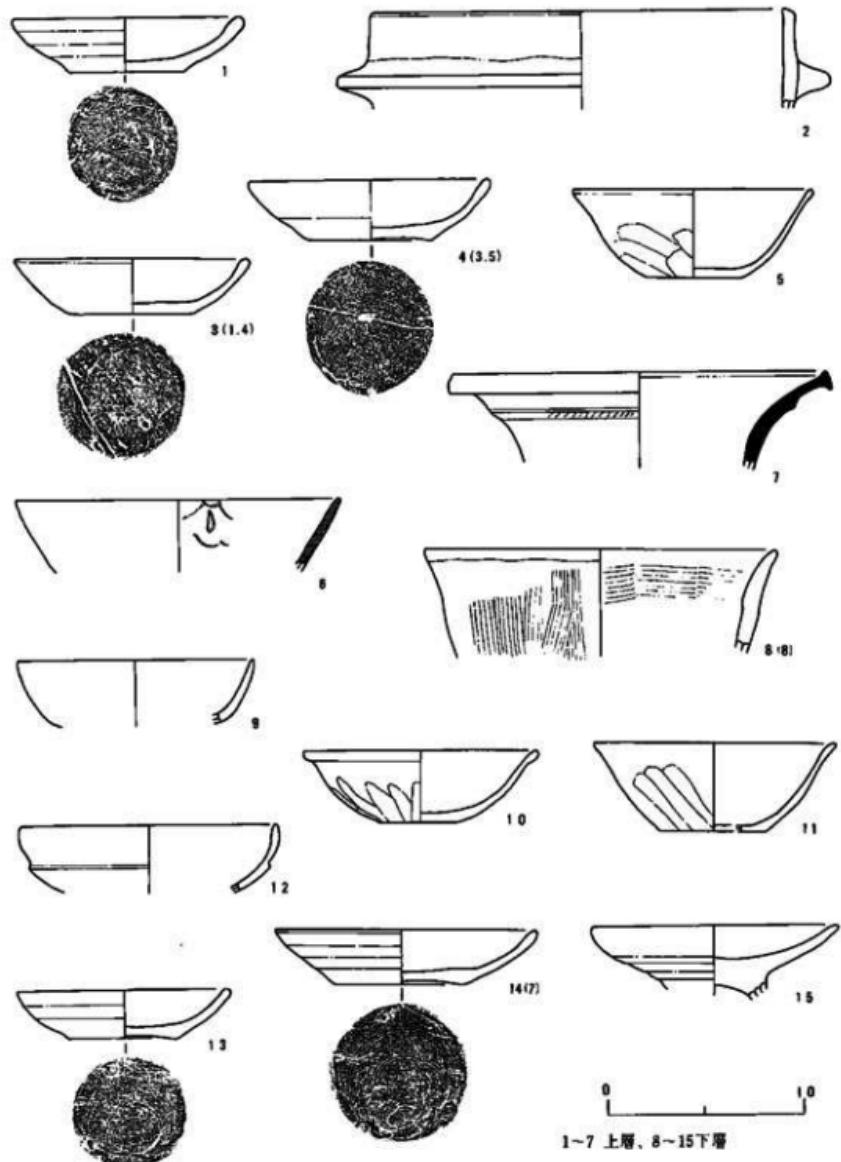
第64図 2G出土遺物実測図 (1/3)



第65図 5 G出土遺物実測図 (1/3)



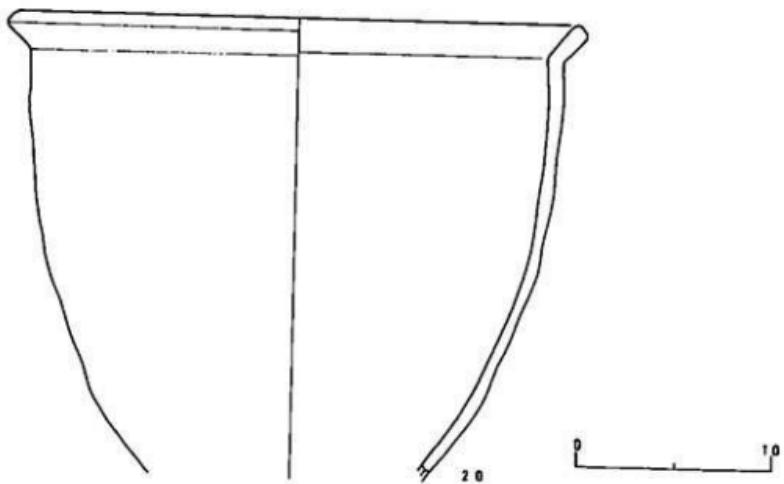
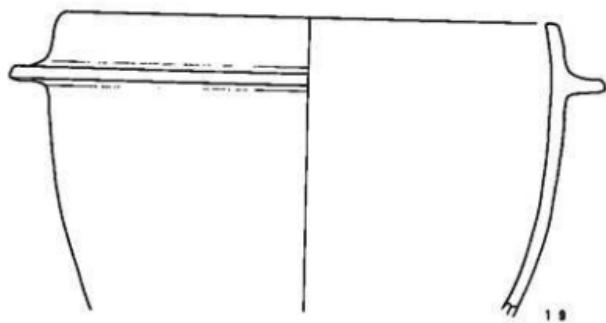
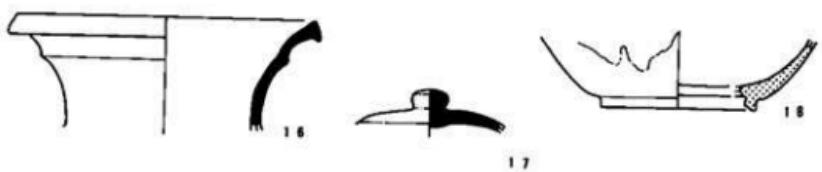
第66図 墓地内・6号集石・G出土遺物実測図(4G)(1/3)



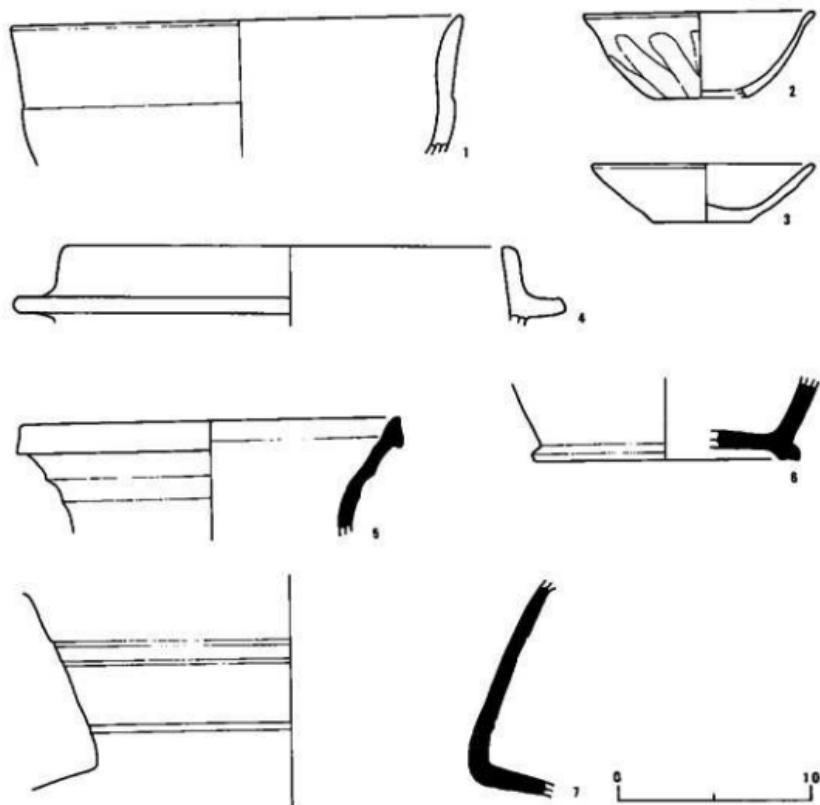
第67图 6 G上层・下层出土遗物实测图 (1/3)

1~7 上层、8~15下层

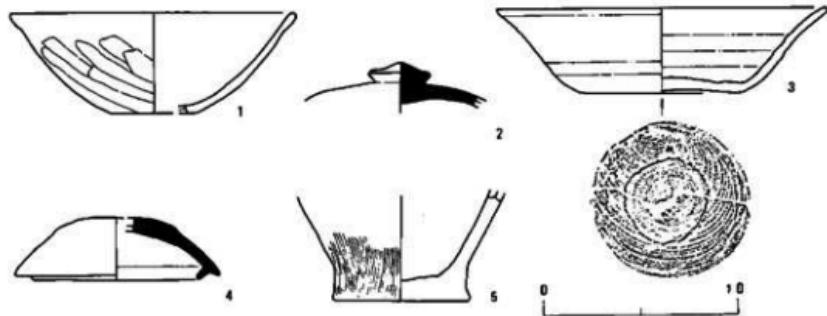




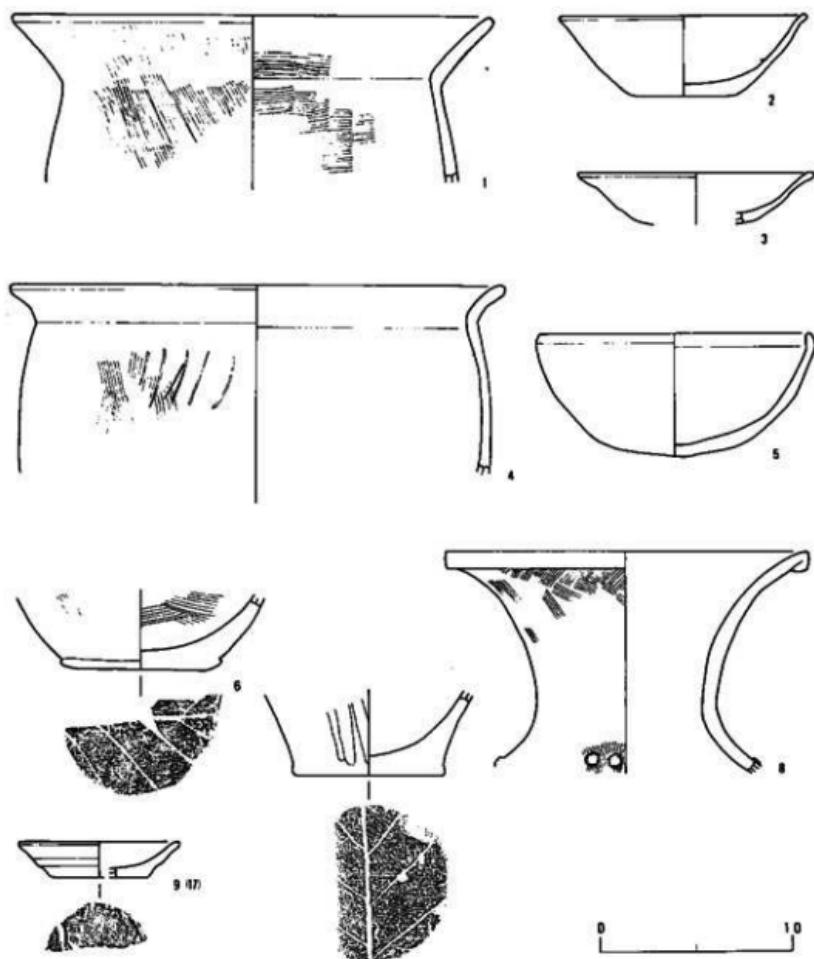
第68圖 6 G 下層出土遺物實測圖 (1/3)



第69図 7 G出土遺物実測図 (1/3)

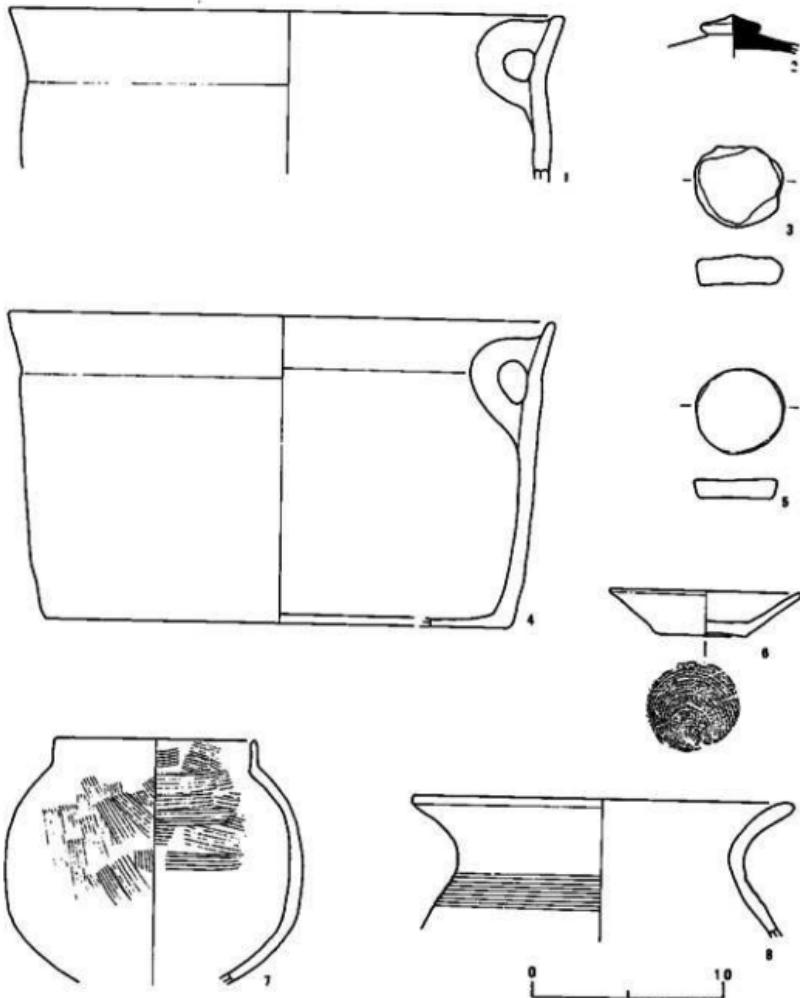


第70図 8 G出土遺物実測図 (1/3)



第71図 9G出土遺物実測図 (1/3)

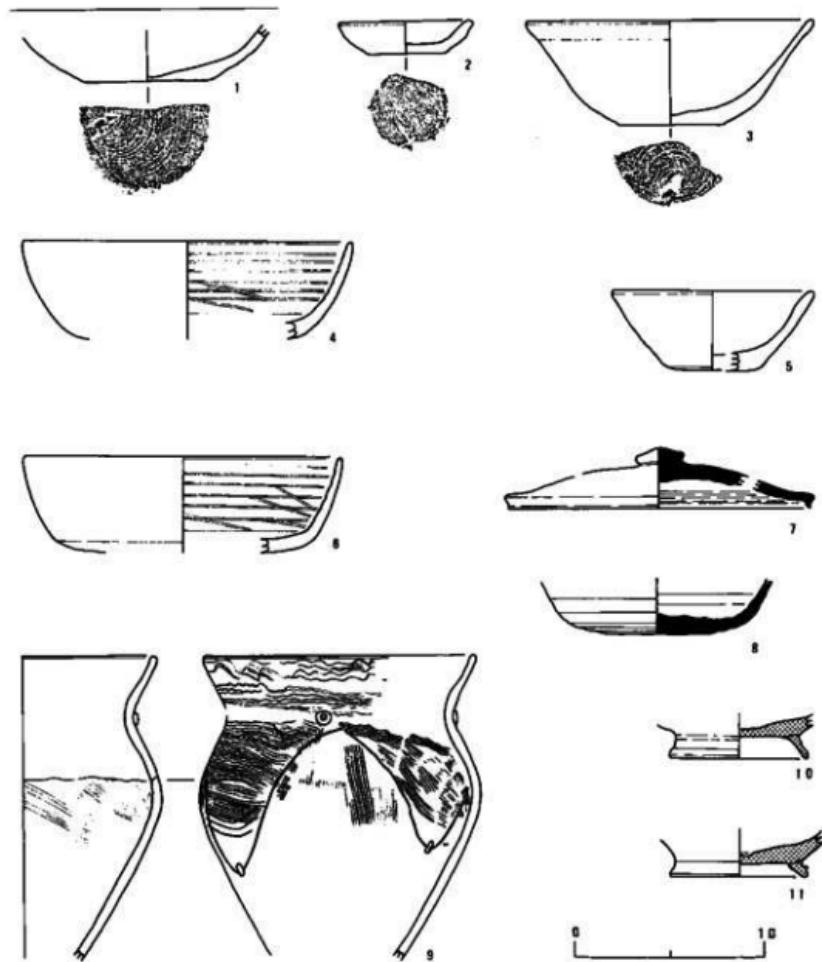
綠釉陶器 3・4Gから集中的に出土したが、6・14Gでも出土した。少なくとも9個体あり、このうち2個体は復元できた。復元できたもののうち1個は釉が斑で、1部剥落しており、胎土は軟質（陶質的）で、淡灰色をしている。他のものは全て胎土は硬質（磁器質的）であるが、釉は緑色に濃緑色の斑が混ざるもの1個体、緑色1個体（内面に線刻あり）、淡緑色1個体、茶緑色3個体、黄緑色1個体と復元できた深緑色の優品1個体（第66図14底に陰刻あり）。緑色に濃緑色の斑が混ざる個体は、釉や素地が塙尻市平井遺跡出土の瓶や群馬県山王廃寺跡出土の手付水注に似ている。「日本の陶磁」（昭62、東京国立博物館）によると、前者は中国湖南省長沙官窯



第72図 11G 出土遺物実測図 (1/3)

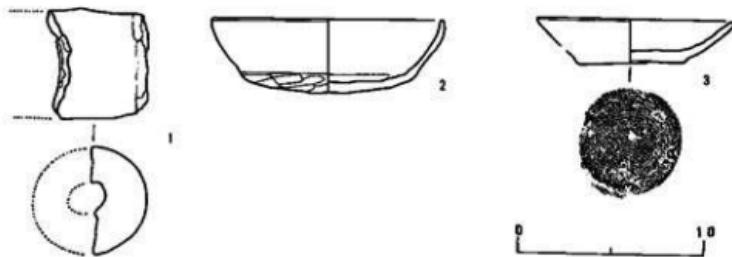
の綠釉水注を彷彿させるものがあり、素地は黒灰色で、堅く、呈発も深緑色で、むらがあるが安定した施釉技術で、おそらく9世紀末から、10世紀にかけての作であろうとしている。後者については、中国四川省窯青磁を祖型に、10世紀に日本の綠釉陶器で焼かれたものと考え、釉素地は固く、釉は暗い緑色に呈発したとしている。

綠釉陶器は本県内でも出土しているが、その出土遺跡数や量は少なく、大泉村金生遺跡・寺所

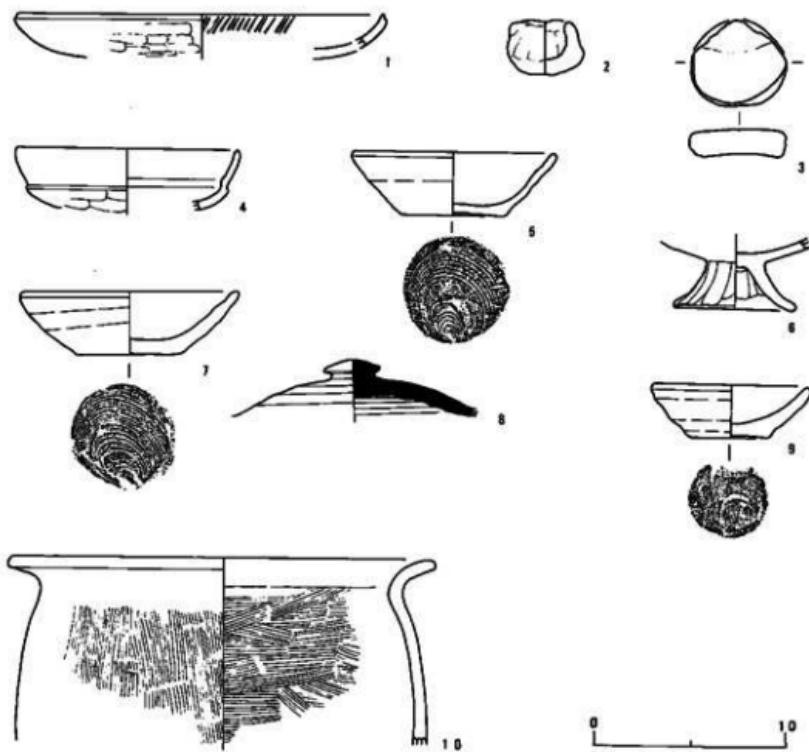


第73図 12G出土遺物実測図 ($\frac{1}{3}$)

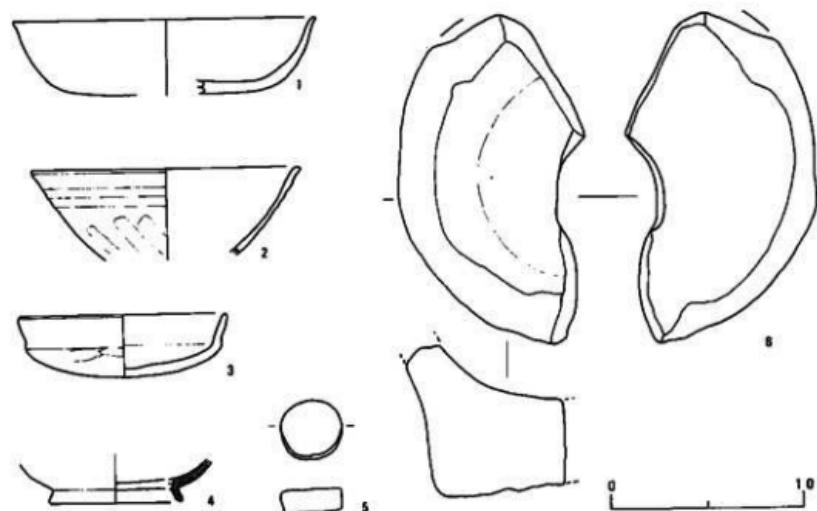
遺跡、須玉町豆生田遺跡、高根町湯沢遺跡、一宮町東新居遺跡・大原遺跡、甲府市桜井畠遺跡等があり、山梨市日下部遺跡、同江曾原遺跡でも、それらしいと思われるものが出土している（「日下部」昭62 山梨市教育委員会）。これらの遺跡では特殊な伴出遺物や遺構が検出され、通常の集落とは異なるものがある。



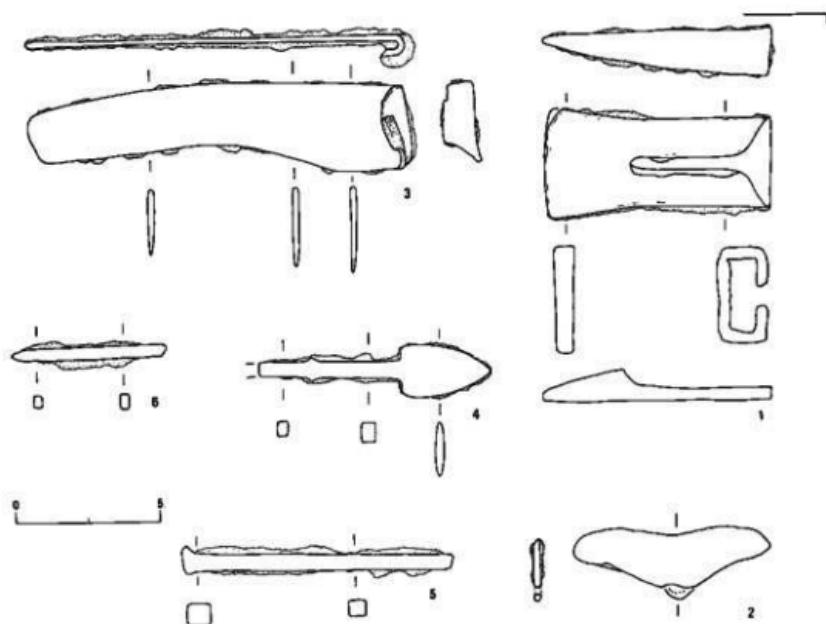
第74図 12・13G 造構包含層出土遺物実測図 (1/3)



第75図 13G 出土遺物実測図 (1/3)



第76図 14・15G出土遺物実測図 (1/3)

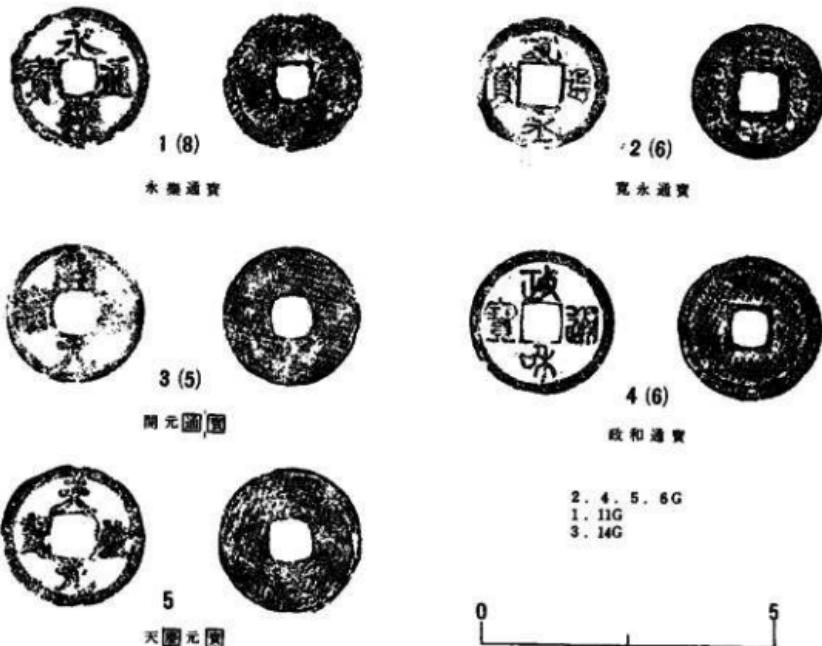


第77図 鉄製品実測図
1-14G 2-11G 3-14G
4-14G 5-7G 6-2G

鉄製品 14Gから出土した鉄製品が多く、2Gや11Gからも少し出土した。いずれも遺構は平安時代の生活面で検出した。1は有袋式鉄斧で長さ7.7cm、2は火打金で長さ6.6cm、3は鎌で長さ13.2cm、4は平根式鉄鎌で長さ8.9cmで、5と6は角釘で長さ9.2cmと鉄鎌のなかごで5.3cmと考えられる。この他鉄製品の断片が14G付近から多く、また鉄屑が5G、10G、15G等から5個体以上出土している。

第4節 その他

古墳時代～平安時代以外に縄文時代、弥生時代や中世の遺物が若干出土した。縄文時代では中期後半の曾利式土器片と粘板岩製石斧が出土した。これは下長崎遺跡の北に隣接する遺跡と同時期のものであるが遺構はなかった。弥生時代では11Gの北側発掘範囲に接して、後期前葉の箱清水式系に比定できる壺1個（第73図）¹が正位に置かれたような状態で出土したが遺構は検出できなかった。この遺跡の付近には三光神遺跡（1987、八代町教育委員会）や侃ノ下遺跡（1984、山梨県教育委員会他）、西藏福遺跡などがあるがこれは終末期の遺跡で、後期前葉の遺物は出土していない。中世では11Gから内耳瓦器、1号溝付近から石臼、16Gから青磁、白磁、天目の破片



第78図 銭貨拓影

や銭貨などが出土した。ほとんどが発掘地域の西に偏って、土師器などとともに出土している。銭貨は永樂通寶、寛永通寶、政和通寶の3個および開元通寶、天慶元寶とみられる2個が出土した。開元通寶は中國南唐の西暦966年以後、政和通寶は北宋の西暦1111年以後、天慶元寶は遼の西暦1111年以後のものである。

内耳土器（第72図）が2個体出土している。両者とも瓦質で、器形は口縁部が外反していて、Wallはやや浅めであろうか。「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」（茅野市 その5 長野県教育委員会他 昭57『中世の遺物』小林秀夫）の分類によると、長野県地方では内耳土器の口縁部が外反する器形は古い様相を示し、15世紀に比定できるとしている。

下長崎遺跡出土遺物説明表

件 名 番 号	出土地点	種類	器 形	法(口径 底径)	調 査 基			土 色 性 能	備 考
					外 面	内 面	底		
第 9 1 回	SB-3	土器	壺	19.5 — —	ナゲ整形	ナゲ整形の上を ヘラ整形		やや粗 茶良	い 色好
# 2	*	土器	瓶	13.6 11.7 5.5	ヘラ整形	横ナゲ		やや粗 茶良	い 色好
# 3	*	土器	小型壺	12.6 13.9 6.3	指頭ナゲ	ヘラ整形		やや粗 茶良	整形が 善
# 4	*	土器	高环、环部		ヘラ整形	横ナゲ		やや粗 茶良	い 色好 反転
第 10 5 回	*	土器	壺	24.8 — —	黒褐色			褐良	色好 反転
第 12 1 回	SB-6	土器	壺	17.0 — —				やや粗 茶良	い 色好 反転
# 2	*	土器	鬼高	16.2 5.2 —				茶良	密 色好 丹塗
# 3	*	土器	鬼高	17.6 3.7 —				灰良	褐 色好
# 4	*	土器	鬼高	13.2 3.7 —		ヘラ整形		密 茶良	色好
第 14 1 回	SB-10	土器	环	13.8 — —				褐良	色好 反転
# 2	*	土器	壺	20.0 — —				褐良	密 色好 砂粒含む 反転
# 3	*	土器	环	12.8 — —		ナゲ		灰良	褐 色好

屏風番号	出土地点	種類	器 形	法(口径 量) (底径)	調 査			胎 色 土 調 査	備 考
					外 面	内 面	底		
第16 1 回	SB11附近	土師	壺	— (推)28.0 9.4			木葉柄	褐 良	密 色好
* 2	*	土師	壺	— 7.0				褐 良	密 色好
* 3	*	土師	兔高	12.0 4.2 —				茶良	密 色好
* 4	*	須恵	台付环	15.6 4.3 11.4				鐵青良	灰 密色好
第19 1 回	1号配石	土師	壺	20.6 — —				黑褐良	いい 色好
* 2	*	土師	环	11.0 3.1 5.5			手切り	褐 良	密 色好
第20 1 回	2号配石	土師	圓底壺	— 10.0	細かいハケ目		木葉柄	砂粒を含む 黒褐良	
* 2	*	土師	小鉢	6.0 4.6 3.5	指頭押え	ハケ目		赤良	密 色好
* 3	*	土師	环	(推)8.5 3.3 (推)4.0	ヘラ削き			鐵茶も 褐色	密色い
* 4	*	土師	高环台部		ヘラ削き			鐵青良	密色好
第22 2 回	土礫1	土師	高环	9.0 — —				淡黄 良	反転
* 1	土礫3	土師	瓶	19.0 19.0 8.4				褐 良	密 色好
第26 1 回	銀冶造構	土師	壺	18.6	ヘラ削り	ヘラ削り		やや粗 糙良	いい 色好
第29 1 回	5G	粘板岩	自然石						長さ33.0 巾12.2 厚さ3.0
第28 1 回	2号高石列 付近	土師	环蓋	18.0 — —		一部円文不鮮明		密 色好	表と内側
* 2	*	土師	浅鉢	20.0 — —	赤色塗彩 模ナデ	ハケ整形の上を 模ナデ		褐 色	
* 3	*	土師	小形壺	— 7.4	ハケ目塗彩	ハケ目塗彩		や茶良 褐色	いい 色好
* 4	*	灰釉	底座	— 5.8	灰釉			灰白 良	密 色好
第32 1 回	SB-1	土師	鉢	33.0 — —				褐 良	反転
* 2	*	土師	壺					褐 良	反転
* 3	*	土師	鉢	13.4 5.8 6.0				褐 良	密 色好
第34 1 回	SB-2	土師	瓶	9.4 13.7 7.0				や 褐 良	いい 色好

器 固 有 号	出土地点	種類	器形	法(口径 基底径)	調 整			土 色 燒 成	備 考
					外 面	内 面	底		
* 2	*	土師	手捏	3.6 3.6 3.8	口底部四軸水引		木葉模	密 燒良	
* 3	*	土師	甕	- 7.6				密 燒良	反転
第36 1 回	SB-9	土師	甕	- 10.8			木葉模	密 燒良	反転
* 2	*	土師	甕	17.0 2.6 -				密 燒良	
第38 1 回	SB-4	土師	甕	17.0	ロクロ水引 削り	ロクロ水引へラ 削り		密 燒良	密色好
* 2	*	土師	甕	瓶(11.0) 2.2 6.2	ロクロ水引	ロクロ水引		密 燒良	
* 3	*	土師	甕	10.0 3.2 5.2	ロクロ水引	ロクロ水引	糸切り	密 燒良	色好
第40 1 回	SB-5	土師	甕	30.8 -				やや 燒良	反転
* 2	*	土師	甕	- 5.2			磨刻あり	密 燒良	小石、砂 粒を含む
* 3	*	土師	羽釜	26.6 -				やや 燒良	反転
* 4	*	土師	甕	- 7.8				やや 燒良	反転
* 5	*	土師	置カマド					やや 燒良	反転
* 6	*	土師	甕	- 12.2				密 燒良	
* 7	*	土師	甕	10.8 -				密 燒良	密色好
* 8	*	灰陶	甕	(推)15.4 -	ロクロ水引			密 燒良	密色好
* 9	*	灰陶	甕	(推)16.0 -	ロクロ水引			密 燒良	密色好
* 10	*	灰陶	甕	11.4 2.8 6.4				白 燒良	色好
* 11	*	須恵	甕の蓋	14.0 -				密 燒良	色好
第42 1 回	SB-7 カマド	土師	甕	12.6 3.2 4.4				密 燒良	反転
* 2	*	土師	甕	14.0 -				密 燒良	反転
* 3	*	土師	甕	28.0 -	タテハケ目	ヨコハケ目		砂 茶 燒 良	砂 粒 を 含 む 色好
* 4	*	土師	甕	27.4 -	タテハケ目	ヨコハケ目		砂 茶 燒 良	砂 粒 を 含 む 色好

井田番号	出土地点	種類	器 形	径(口径 厚底)	測量			胎 色	土 質	考
					外 面	内 面	底			
第 43 1 回	SB-7上層	土師	环	17.4 — —				緑赤良 褐	密 色好	反転
* 2	*	土師	皿	17.0 2.8				や や良 褐	粗 色好	反転
* 3	*	土師	皿	13.8 2.9 —				密 赤良 褐	褐 色好	一部反転
* 4	*	土師	环	12.6 4.0 5.6				緑赤良 褐	密 色好	
* 5	*	土師	环	14.0 — —				緑赤良 褐	密 色好	反転
* 6	*	土師	环	12.9 3.0 4.6				密 赤良 褐	褐 色好	
* 7	*	土師	环	13.0 4.1 4.0				密 赤良 褐	褐 色好	反転
* 8	*	土師	环	14.0 4.5 6.0				や や良 褐	粗 色好	反転
* 9	*	土師	皿	25.0 — —	側めハケ目	タテハケ目		砂粒を含む 褐	む 色	
第 44 1 回	SB-7 下層	土師	环	11.8 — —				緑 褐良 褐	密 色好	反転
* 2	*	土師	环	14.4 3.3 —				緑 赤良 褐	密 色好	反転
* 3	*	土師	皿	12.0 2.7 3.7				緑 赤良 褐	褐 色好	反転
* 4	*	土師	环	14.0 4.1 4.0				密 赤良 褐	褐 色好	反転
* 5	*	土師	环	15.0 — —				密 赤良 褐	褐 色好	反転
* 6	*	土師	环	12.0 5.3 5.2				緑 褐良 褐	密 色好	反転 内無
* 7	*	土師	皿	34.0 — —	タテハケ目	ヨコハケ目		砂粒を含む 褐良 褐	白 色好	
* 8	*	土師	皿	35.0 — —	タテハケ目	ヨコハケ目		砂粒を含む 褐良 褐	白 色好	
第 45 1 回	SB-8	土師	环	9.6 3.0 —	ヨコハケ目	回転ナゲ		密 褐良 褐	色好	手切り模
* 2	*	土師	环	11.0 3.0 5.5				や や良 褐	粗 色好	
* 3	*	縁輪	台付环	14.8 6.0 7.2				緑 褐良 褐	白 色好	粘土は 良質
第 51 2 回	5号列石	土師	円筒	— — 11.5		ヘラ調整	木型真	や や良 褐	粗 色好	
* 3	*	土師	环	9.4 2.1 4.6			密 良 褐	回転 あ切り	密 褐良 褐	色好

番号	出土地点	種類	器形	法(口径 器高 底径)	調査			土質成 分色 度	備考
					外 面	内 面	底		
# 4	〃	土師	壺	— 推(7.0)		ヘラ調整	木墨痕	砂 粘 含 場 心 色好	
# 5	6号列石	土師	壺	10.0 2.9 4.6			回転 糸切り	密 褐 良	反転
# 8	〃	土師	壺	14.0 —				粗 褐 良	い 色好
# 6	〃	集石	土師	壺 (推)11.0 (推)4.0 (推)3.0	ロクロ水引	ヘラ磨き		堅 褐 良	
14	〃	土師	壺	(推)17.0 — —	ヨコナデ	タテヘラ削り		や や 粗 褐 良	い 色好
# 1	10G	土師	壺	25.0 — —	ヘラ削り			や や 粗 褐 良	い 色好
# 7	〃	土師	壺	8.0 2.7 4.6		ロクロ水引	糸切り	堅 茶 良	青 色好
# 9	〃	土師	壺	推(18.0) — —	ヘラ削り			堅 褐 良	青 色好
# 10	〃	土師	壺	9.6 4.3 6.0	ロクロ水引	ロクロ水引	糸切り	堅 褐 良	青 色好 3脚
# 11	〃	土師	壺	12.0 — —	ヘラ削り	ロクロ水引		堅 褐 良	青 色好
# 12	〃	土師	壺	(推)10.6		ロクロ水引		褐 良	
# 13	〃	土師	耳付 (縞文)	6.0 1.9 —				堅 赤 良	褐色 土は黒 絹粘土
第 52 6 回	7号列石	土師	壺	10.4				堅 褐 良	反転
# 7	〃	土師	壺	— 6.4			糸切り	青 色好	「大」の 周印
# 1	# 3 G	土師	皿	9.7 — 5.3			糸切り	褐 良	青 色好
# 2	〃	土師	高台壺	15.0 6.0 4.8				堅 褐 良	青 色好
# 3	〃	土師	壺	12.0 3.1 —				堅 赤 皮	青 色好
# 4	〃	土師	壺		回転ナデ	黒色	糸切り 黒色	堅 褐 良	青 色好
# 5	〃	集石器	壺	13.0 3.8 —				青 良	青 色好
第 54 1 回	1号溝の下	土師	壺	12.8 — —				褐 良	反転
# 2	〃	土師	壺	11.2 4.6 3.7			回転 糸切り	や や 粗 褐 良	い 色好
# 3	〃	土師	壺	— — 4.7			回転 糸切り	褐 良	青 色好

検査番号	出土地点	種類	器形	法(口径) 直(器高) 横(底径)	測定			胎土 調成	備考
					外 面	内 面	底		
第55 1 回	木下台近	石臼	(上臼)	直径(推)27 高9.5 —	轍の巾(外側)5mm~8mm 山の巾(外側)6mm~21mm	轍の深さ1mm			般臼
第66 3 回	6号集石	土師	环	— — 4.4	マロ水引、沈線あり		糸切り痕	赤良 密 色好	
#4	"	土師	鬼高	16.0 — —	磨きあり	磨きあり		淡茶 良 色好	
#5	"	土師	鬼高	15.0 — —		内面磨きあり		黄土 良 色好	黒塗あり
#7	"	土師	施	14.9 — —				外 黒 色	
#1	墓地内	土師	环	12.6 4.0 4.8			糸切り痕	密 色 良	底部黒色
#2	"	土師	斐	— — 7.6				密 良 色好	
#6	4G	土師	土师	直径4.1 ~3.6				密 良 色好	
#8	"	灰陶	圭	14.4 2.4 —				密 良 色好	
#9	"	灰陶	圭	13.6 2.5 7.0				密 良 色好	
#10	"	土師	圭	8.4 1.9 5.4			糸切り痕	密 良 色 良	
#11	"	須恵	長形壺	16.0 — —				密 良 灰 色	
#12	"	土師	鬼高	10.6 3.6 —		内面磨きあり		密 良 色好	指揮あり
#13	"	須恵	环	13.0 3.8 —				灰 色	
#14	"	縦輪	台付环	17.3 7.9 6.9	縦輪	胎剥		密 良 色好	胎土は 淡灰色 良質
#15	"	土師	塊	12.6 — —			黑色	密 良 色好	
#16	"	須恵	塊	12.8 4.5 —				灰 色	
#17	"	須恵	环	13.0 3.8 —				灰 色	
第59 1 回	7.8号集石	土師	羽釜把手部	(推)31.0 — —	横ハケ口			密 良 色好	
#2	"	土師	环	8.8 — —				密 良 色好	
#3	"	土師	环	— — (推)5.6				密 良 色好	反転
#4	"	土師	台付碗	13.0 (推)7.9				密 良 色好	砂粒を含む

横田 番号	出土地点	種類	器 形	法 (口径 底径)	調 整			胎 色 成	土 調 成	備 考
					外 面	内 面	底			
* 5	*	土師	壺	12.7 3.4 6.0				密 適良	密 色好	
* 6	*	須恵	台付碗	(底)8.6				綈灰良	面白好	
* 7	*	土師	台付壺	- 13.8				赤良	赤 色好	
* 8	*	土師	壺	13.6 5.4	外面底部 剥離	調成相應	糸切り	密 適良	密 色好	
* 9	*	土師	台付碗	- 9.4				綈灰良	白 密色好	
* 10	*	土師	壺	- 5.2	内面底部 コクロによる追 縫多量	糸切り	密 適良	密 色好		
* 11	*	土師	壺	12.2 3.2 5.0	コクロによる沈澱が目立 つ		糸切り	密 適良	密 色好	
* 12	*	土師	壺	14.0 4.2 6.1				粗 適良	面白好 い色好	反転
* 13	*	土師	壺	10.8 3.3 5.2				や 密 適良	や 粗 色好	反転
第 60 回	11号集石	土師	壺	25.4 -				や 密 適良	や 粗 色好	
* 2	*	土師	壺	14.8 -				密 適良	密 色好	
* 3	*	土師	羽釜	28.8 -				粗 適良	面白好 い色好	
* 4	*	土師	鉢	32.4 -				密 適良	密 色好	
第 61 回	2号カマド	土師	器台	8.4 4.2 4.5		コクロ水引	糸切り	砂 粒 合 成良	む 色好	
* 2	*	土師	置カマド	28.6 -				密 適良	密 色好	反転
第 62 回	3号カマド	土師	壺	11.6 3.8 6.0				や 密 適良	や 粗 色好	
* 2	*	土師	壺	11.7 3.7 4.3				赤 良	密 色好	一部反転
* 3	*	土師	壺	15.6 5.0 4.0				密 適良	密 色好	一部反転
* 4	*	灰釉	台付壺	7.6 2.5 7.0				綈 灰 良	面白好	
* 5	*	灰釉	台付瓶	10.2 -	コクロによる形成			密 良	密 色好	
* 6	*	須恵	壺	14.8 -				綈 青 良	密 色好	反転
* 7	*	土師	壺		横ナゲ	全体に作りが粗 雑		砂 粒 合 成良	む 色好	

井 田 書 号	出土地点	種類	器 形	法(口径 盤、底径)	調 整			粘 土 色 成	考 察
					外 面	内 面	底		
# 8	#	銀鉢	环	(推)10.0 — —	銀鉢			銀 良	粘土は 色好 良質
第78 58	銭製品	銭斧		長さ7.8 巾2.9					14G
# 2	#	火打金		長さ6.7 巾(推)1.7					11G
# 3	#	鎌		長さ13.5 巾2.5					14G
# 4	#	鍔鎌		長さ7.9 巾0.5					14G
# 5	#	(釣)		長さ9.3 巾0.6					7G
# 6	#	(釣)		長さ5.6 巾0.4					2G
第77 1	銭貨	銭貨	永承通寶						11G
# 2	#	銭貨	寛永通寶						6G
# 3	#	銭貨	開元通寶						14G
# 4	#	銭貨	成和通寶						6G
# 5	#	銭貨	天慶元寶						6G
第64 1	2G	土師	台付环	8.3 3.4 5.0			糸切り	面 高 良	色好
# 2	#	土師	台付环	— — 5.4			糸切り	高 良	色好
# 3	#	土師	壺	— — 17.6	ハケ目(再度粘土を貼付)			面 黄 良	色好
第65 1	5G	土師	环	14.0 3.7 (外径)14.0	ヘラ整形	横ナデ		や 茶 良	密 色
# 2	#	土師	环	14.6 4.5 (外径)14.6	ヘラ削り 赤色整形	赤色整形		赤 色 良	彩 好
# 3	#	土師	壺	— — 5.0				や 茶 良	褐色 い色
# 4	#	土師	壺	— 約6.0	ヘラ整形	ヘラ整形		粗 茶 良	褐色 い色
# 5	#	土師	高台付环	7.0	みがきの土に繪文有り	糸切りの土ヘラ 整形		茶 良	繪文あり 色
# 6	#	土師	高环	13.0 8.5		ナデあり		や 茶 良	密 色
# 7	#	土師	环	14.0 3.7 外径14.0	横ナデヘラ整形	横ナデ		や 茶 良	密 色好

捲回番号	出土地点	種類	器形	法(口径 基盤 底)	調 整			胎色 焼成	土 調 成	備 考
					外 面	内 面	底			
# 8	*	土師	环	16.0 3.2 14.6	ヘラけずり			暗良	密 湯	色好
# 9	*	土師	环	- 7.6	繪文ありヘラみがき		糸切りの上 ヘラ型	茶良	密 湯	色好
# 10	*	土師	高台付环	- 6.6		内黒	糸切り	や茶良 や良	や 湯	い 色好
# 11	*	土師	甕	32.0 - -	ハケ型	内面ハケ型		や茶良 や良	や 湯	い 色好
# 12	*	須恵	甕	21.0 - -				鐵良	密 湯	色好
# 13	*	須恵	底部	- 9.6				灰良	密 湯	色好
# 14	*	灰陶	甕	24.0 - -						
# 15	*	須恵	环	10.0 3.1 外径10.0				青良	灰 湯	色好
第 1 回	6 G	土師	环	11.5 2.8 5.8	=クロ水引	ロクロ水引	糸切り	鐵 良	密 湯	上層
# 2	*	土師	羽釜	(推)21.8 - -				鐵 良	密 湯	上層 皮板
# 3	*	土師	环	12.0 2.8 6.2	=クロ水引	ロクロ水引	糸切り	鐵 白良	湯	密 色好
# 4	*	土師	环	12.0 3.1 6.2	=クロ水引	ロクロ水引		鐵 白良	湯	密 色好
# 5	*	土師	环	(推)12.0 4.4 8.0	=クロ水引	ロクロ水引		鐵 茶良	湯	上層
# 6	*	綠釉	环		ロクロ沈線	文様有り		鐵 良	密 色好	上層
# 7	*	須恵	甕	(推)12.0	圓輪ナデ、ハケ目文様	圓輪ナデ、點化 底寸		灰良	密 色好	上層
# 8	*	土師	甕	(推)18.0	タテハケ目	ロコハケ目		砂粒を含む 湯	湯	下層
# 9	*	土師	环	10.6 2.6 5.8	ロクロ水引			砂粒を含む 湯	湯	下層
# 10	*	土師	环	12.0 3.7 4.0	=クロ水引	ロクロ水引		鐵 良	密 色好	下層
# 11	*	土師	环	11.2 4.5 3.5				鐵 良	密 色好	下層
# 12	*	土師	环	(推)13.0	ヘラ磨き	ヘラ磨き		鐵 良	密 色好	下層
# 13	*	土師	环		ロクロ水引	ロクロ水引	糸切り	鐵 良	密 色好	下層
# 14	*	土師	环	13.0 2.8 6.4			糸切り	鐵 良	密 色好	下層

特 別 國 寶 番 号	出土地點	種類	器 形	法 (口徑 量 底径)	調 整			土 色 成 分	備 考
					外 面	内 面	底		
#15	*	土師	高环の环形	6.4	クロ水引	クロ水引		白 高 良	密 色好 下層
第 6816 國	*	須恵	甕	(推)15.0	灰船を施釉	回転ナデ		灰 良	密 色好 下層
#17	*	須恵	甕			回転ナデ		灰 良	密 色好 下層
#18	*	灰船	台付杯	(推)8.0	クロ水引			灰 良	密 色好 下層
#19	*	土師	羽釜	(推)24.6				沙粒 良	含 色好 下層
#20	*	土師	甕	(推)29.0				沙粒 良	含 色好 下層
第 691 國	7 G	土師	鉢	13.8				白 高 良	密 色好 下層
#2	*	土師	环	12.0 4.5 5.0				高 良	密 色好 下層
#3	*	土師	甕	11.5 3.0 5.0				赤 良	密 色好 反転
#4	*	土師	羽釜	22.4				や 附 良	密 色好 下層
#5	*	須恵	甕	10.0				青 良	密 色好 下層
#6	*	須恵	鉢	(推)15.0				灰 良	密 色好 下層
#7	*	須恵	甕					青 良	密 色好 反転
第 701 國	8 G	土師	环	14.4 5.2 —				小 赤 良	石 漏 り 色好 下層
#2	*	須恵	甕					灰 良	密 色好 下層
#3	*	土師	环	15.8 4.4 8.0				高 庄	密 色好 下層
#4	*	須恵	甕	8.2 3.2 —				灰 良	密 色好 下層
#5	*	土師	甕	— — 6.8				小 赤 良	石 漏 入 色好 下層
第 711 國	9 G	土師	甕	27.0 — —				赤 良	密 色好 下層
#2	*	土師	环	13.0 4.2 5.0				赤 良	密 色好 反転
#3	*	土師	甕	(推)12.4 — —				赤	褐 色 反転
#4	*	土師	甕	6.8				小 赤 良	石 漏 入 色好 下層

排 出 土 地 点 番 号	出 土 地 点	種 類	器 形	法 (口徑 盤 底) 量	調 整			土 色 燒 成	備 考
					外 面	内 面	底		
# 5	*	土師	环	13.8 6.5 8.0				やや 褐色 良	反転
# 6	*	土師	甕	7.5	タテハケ目	ヨコハケ目	木葉模	密 燒 良	
# 7	*	土師	甕	7.6				密 燒 良	砂粒あり
# 8	*	土師	甕	19.0				やや 褐色 良	反転
# 9	*	土師	小皿	(底)8.0 — (底)5.0			糸切り	密 燒 良	
第 72 回	11G	土師	内耳	29.3				密 燒 良	反転
# 2	*	須恵	蓋					密 燒 良	
# 3	*		土製円盤	長さ4.2 厚み1.2					植林
# 4	*		内耳	29.0 16.0 34.6				密 燒 良	反転
# 5	*		土製円盤	長さ4.2 厚み0.8					須恵質
# 6	*	土師	环	10.0 2.3 4.7		ヨタヨ木引	糸切り	密 燒 良	
# 7	*	土師	甕	10.6 — —				やや 褐色 良	転
# 8	*	土師	甕	20.0 — —		赤色塗彩		密 燒 良	反転
第 73 回	12G	土師	环	— — 7.2			糸切り	密 燒 良	
# 2	*	土師	环	7.2 — 4.1			糸切り	密 燒 良	反転
# 3	*	土師	环	15.3 5.6 5.6			糸切り	密 燒 良	反転
# 4	*	土師	环	17.6 — —				密 燒 良	反転
# 5	*	土師	环	10.8 4.3 —				密 燒 良	反転
# 6	*	土師	环	17.0 5.1 —				密 燒 良	反転
# 7	*	須恵	蓋	16.4 3.2				密 燒 良	
# 8	*	須恵	环	— — 6.0				密 燒 良	反転
# 9	*	土師	甕	14.2 — —		ヘラ調整		やや 褐色 良	一部反転

井戸番号	出土地点	種類	器形	法(口径 底直径)	調整			胎色 土調皮	備考
					外面	内面	底		
#10	*	土器	台付碗	- 7.3	褐色	黑色		良 密好	内黑
#11	*	土器	台付碗	- 7.3	褐色	黑色		良 密好	内黑
第74 1 回	12-13G	土器	羽口					粗褐良	い色好
#2	*	土器	兔高环	12.6 4.1 3.9				精良	密好
#3	*	土器	环	10.7 2.4 5.6			回転み切り	密 湯良	反転
第75 1 回	13G	土器	皿	19.2		繪文あり		密 湯良	反転
#2	*	土器	手底	3.6 2.7				や や 湯良	い色好
#3	*		土製円盤	長さ3.8 厚み1.1					
#4		土器	环	11.6				精良	密好
#5	*	土器	环	10.8 3.3 5.5			回転 糸切り	密 湯良	
#6	*	土器	高台付环	- 5.4				精良	密好
#7	*	土器	环	11.4 3.3 5.4			回転 糸切り	密 湯良	
#8	*	須恵	蓋					精良	密好
#9	*	土器	环	8.3 2.7 4.2			糸切り	密 湯良	
#10	*	土器	甕	22.6 -				密 湯良	反転
第76 1 回	14-15G	土器	环	16.0 - 4.0				や や 湯良	い色好
#2	*	土器	环	14.0				精良	密好
#3	*	土器	束高	10.8 3.2		茶褐色		茶良	密好
#4	*	綠釉	高台付环	(推)		ロク		綠良	密好
#5	*	土器	土製円盤	長さ3.1 厚み0.9					胎土は 緑灰色 硬質
#6	*	石器	火で鉢	(推口径) 20.0					

第5章 下長崎遺跡と地域の歴史

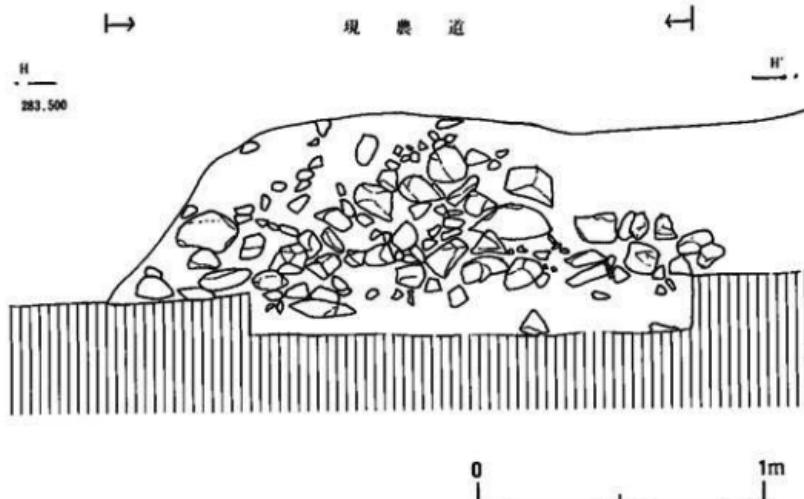
第1節 条里型地割との関係

班田収授法によって施行された条里制は、甲府盆地にも実施され、その遺構としての道路による方格地割（坪）や、坪内には長地型と半折型の水田址が残されているといわれてきた。しかし近年条里制の研究が進み、その内容や時期などについて明らかにされつつあり、その遺構を概括的に「条里制遺構」と呼ぶのに疑問が生じてきたので、ここでは「条里型地割」とした。この項目では道による地割が施行された時期について検討する。

甲府盆地には断片的に多くの条里型地割が広がる。その一つである浅川・境川扇状地におけるこの地割は典型的であるといわれている。下長崎遺跡はこの上（東）部末端地域にあり、坪割の道は正しく一町方格に敷かれてはいないが、その形態を残している。発掘地域内を巾約4mのこの道路が一本横切っていて、わざかに延長4mだけであったが、発掘することができた。

道の直下から平安時代後期、12世紀前半と思われる石組・水溜が、また周囲からはこれに伴う同時期の住居址群が検出されたことは、道路が集落が移動した後に敷設されたものであることを物語るであろう。これは石橋条里制遺構第3地点より約1世紀遅い時期であるので、扇状地では条里型土地割が扇状地扇端から行われたことを意味し、場合によっては集落を移動させて、条里型地割を施行し、耕地化したこととも考えられる。

（註1）『石橋条里制遺構 藏福遺跡 伊ノ下遺跡』 山梨県教育委員会 1984



第79図 道路セクション図 (IIG北壁)(1/20)

第2節 八代郷と長江郷について

下長崎遺跡は分布調査の結果、濃密に遺物が散布している範囲はほぼ東西150m、南北150mで、発掘地はその南端あたりに位置することは前述した。この発掘地は北側を東西に走る町道51号線に1部が接している。そこで条里型地割の道であると考えられる51号線と下長崎遺跡との関係を、さらには51号線が八代郷と長江郷との境界の一部であった可能性のある理由をいくつか取り上げてみたい。

和名抄に記載されている長江郷は八代郷の南にあるとの説があり、現在の八代町永井はその遺名、八代郷は南八代村、北八代村となって残ったといわれていて（甲斐国志）、現在もその位置関係になっている。

長江郷には現在の八代町永井区、米倉区、岡区が入ると考えられているが、さらに増田区増利も入ると思われる。

町道51号線は江戸時代中期には既に、今の南区と岡区、その下の南区と永井区との境になっていてさらにその下では川（界川）を境に増利と大間田が分かれ、畠の耕作者もほぼこれで分かれていたので、中世紀末にもこの形態になっていたことがうかがえる（八代町誌）。中世の武田氏の支配下でも江戸時代と大差はないであろう。

小字地名も道を挟んで両側では、著しい差がみられる。条里型地割の地名は坪付名に由来するものがあると考えられ、また永井区地内には中世以前に付されたと考えられるような信仰関係の地名が約18ヶ所あると言われている。これらの地名は52号線の南側（永井区・増田区増利）ではほぼ1坪毎にあるのに対し、北側の南区ではほぼ4坪を1単位として付けられている。また道の北側と南側には同じ小字名が10あり、その小字名は穴田（あなだ）、宮田（みやた）、泉田（いずみだ）、柳田（やなぎだ）、池田（いけだ）、横田（よこた）、長崎（ながさき）、神田（じんでん）、盛ノ上（ままのうえ）、一丁田（いっちょうだ）である。この1坪毎に付けられた小字名はさらに南の境川村石橋条里遺構に統く。南側で重複しているものは角田（すみだ）、山形（やまがた、山家田）だけの2ヶ所だけである（第80図）。両者の重複は異状に多いといわざるを得ない。これは両者がそれぞれ統治系統が異なることを意味しないであろうか。

51号線に南と北から直交する条里型地割の道路は、小字五反田から小字下長崎までの間では、四叉路が5ヶ所、三叉路が9ヶ所である。本来条里型地割は交点が直交する四叉路である可きであるが、この51号線では周囲に比較して四叉路が少なく、51号線で止まる道（三叉路）が多い。四叉路が下（西）方に多いのは条里型地割が下方からなされたため、すなはち下方から開墾されてきたためであろうか。上方では51号線の南と北では別べつに敷設されたために交点が交わらなかったのではないであろうか。したがって51号線は条里型地割を施行する当初にまず計画道路として、西から東（上）方に向かって1本長く敷設されたものと思われる。

以上は明治25年に作成された分間図と現地を調査検討したものである。

下長崎遺跡とこの51号線が敷設された時期の重複（前後）関係は、51号線が今回の発掘域外であったので、前述のように推定の域を出ない。

町道51号線を挟んで南と北では地形が同様であるにもかかわらず、以上のように相違があり、それが条里制に基づくものであるか、莊園成立後になってからのものであるかは詳かにできなかつたが、少なくともその相違は平安時代後期までは開拓ができるであろう。

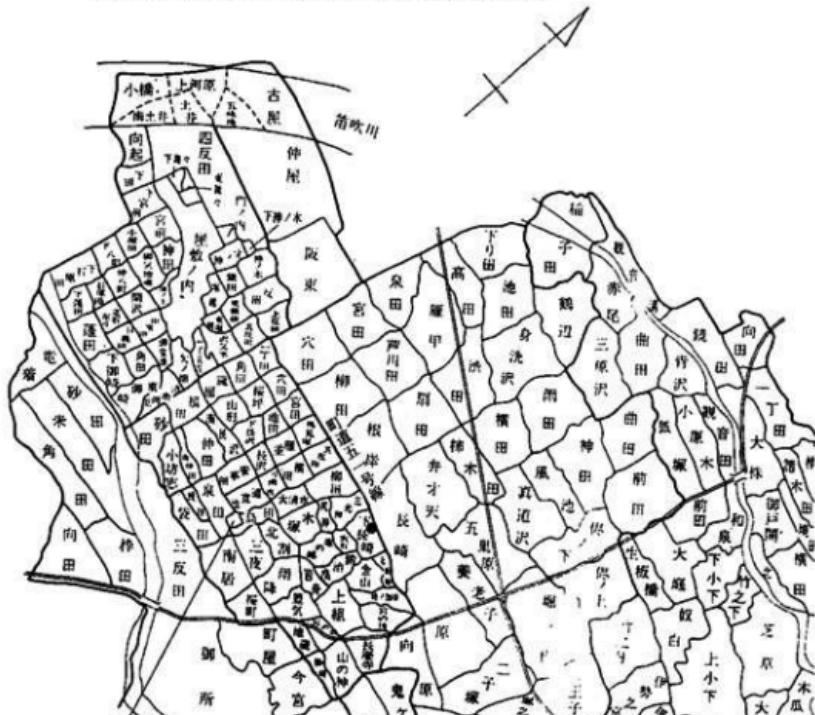
(註1) 『山梨県の歴史』 磯貝正義 藤田文弥 1973

(註2) 「甲斐の郡(評)郷制」 坂本美夫 『研究紀要』 I 1983 山梨県立考古博物館 埋蔵文化センター

(註3) (註2)に同じ

(註4) 「地名考」 中村良一 『広報やつしろ』 7月号 1988

(註5) 「八代荘の成立事情」 秋山教 『甲府盆地ーその歴史と地域性』 昭和59年 に八代荘は12世紀中葉久安間に立荘(成立)したものと考察している。



●印下長崎道跡

第80図 八代町小字図(部分)

第6章 結び

下長崎遺跡では、古墳時代後期後葉(第Ⅰ期=6世紀第Ⅳ四半期項)より、奈良時代を経て、平安時代後期(第Ⅳ期=11世紀第4四半期~12世紀第1四半期項)までの遺構と遺物が、ほぼ連続的に検出されたので、この地域に集落が約600年間にわたって営まれたと考えてよいであろう。

浅川扇状地の後期古墳時代は初頭の6世紀前半に築造されたと考えられている莊(樹)塚古墳に始まり、これに続く大型石室をもつ地蔵塚古墳が、さらに多くの後期後半の古墳群が築造されるようになる。莊(樹)塚古墳と地蔵塚古墳がこの近くにあるのは、中道町銚子塚古墳築造に始まる甲府盆地の古墳時代初期の強力な政権が北に進み、6世紀前半には、その政治的文化的中心が浅川扇状地扇央に移ったといわれる所以である。後期後葉になると扇頂下部から扇端にかけて古墳群が広がる。

奈良時代、あるいはその前後には、八代郷と長江郷が置かれて国衙の支配下となり、律令政府の支配に組み込まれていく。2つの郷の中心地は旧南・北八代村(現在南区、北区)と旧永井村(現在永井区)にあったものと考えられているので、両者が接する所にあるこの遺跡も、郷の中心域にあったと考えてよいであろう。

平安時代後半、遺跡の分布範囲は浅川扇状地のみならず、山間部にまでおよぶのは、集落が拡散したことを、濃密になったことは人口密度が高くなつたことを意味すると考えられる。

一方、平安時代後半に、条里型地割りは前述したように、扇状地扇端から扇央に向って進められたものと考えられる。この遺跡付近でも、遺物の分布状況から推測すると、集落の下方は徐々に上に移り、そこは耕地化していったようである。この遺跡が廃絶したのは平安時代末期の12世紀と考えられ、統いて耕地になったと思われる。

下長崎遺跡には例が少ない石組の遺構が多くあり、綠釉陶器、灰釉陶器、鉄製品などの貴重品も多く出土している。また、この遺跡がある字下長崎に接して金山、銀治島、三光神、荒神の字名があり、少し離れて弁才天などもあるので、この遺跡は当時重要な施設があった集落と考えられる。発掘した範囲は幅が3mと狭かったので、遺跡全体はもちろん、検出した遺構の大きさや性格なども不明な点が多かった。ただこの中のほとんどの石組遺構に破壊された痕跡があったことは注意すべきことであった。

下長崎遺跡付近が何時、莊園領となつたかは明らかではないが、以上のような発掘状況によって、以下のような事件との関係が推測できる。

1162年(応保2年)から1163年(長寛元年)にかけて、熊野權現社領八代莊と国衙との間に起つた領地をめぐる訴訟事件に対して出された勘文(長寛勘文)がある。この勘文によると、在府官人三枝守政等に率いられた軍兵は八代莊で、四至の榜示を抜き捨て、莊内の在家を追捕したり、神人を捕めとったりして、乱暴狼籍を働いたとある。下長崎遺跡廃絶時の状態はこの事件を彷彿とさせるものがある。この事件の内容については「山梨県の歴史」(磯貝正義・飯田文弥 1975)に詳しいが、その歴史上の意義を、(この事件は)「時代を画する大きな事件といわねばならない。

…中略…甲斐の古代豪族三枝氏は、この事件を契機にして没落し、新たに勃興してきた甲斐源氏にその席を譲らなければならなかつたのである」としている。これは古代社会から中世社会に移行する節目となる一つの象徴的な事件であった。

下長崎遺跡が時代的、地理的に考えると、この事件と関係あっても不自然ではないと考えられるが、八代郷と長江郷の中心的施設やその後にできた莊園の莊家がどこに置かれたかが、明らかにされないので、ここでは問題点として提起するにとどめたい。

(註1) 「古墳時代土器の研究」 古墳時代土器研究会 末木健 坂本美夫 1984による

(註2) 「甲斐国における古代末期の土器様相」 坂本美夫 『神奈川考古』 第21号 1986

図 版

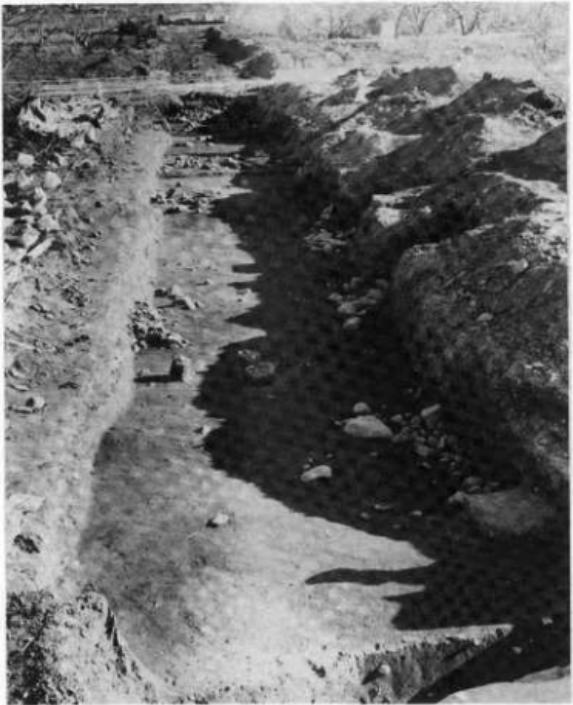


遠景 一甲府盆地・八ヶ岳を眺む一



近景

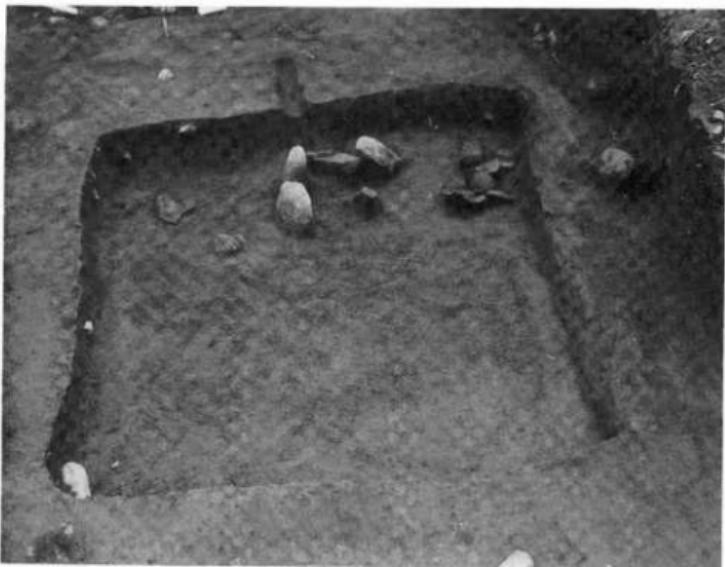
図版2 下長崎遺跡全景



4・3・2・1G



西より



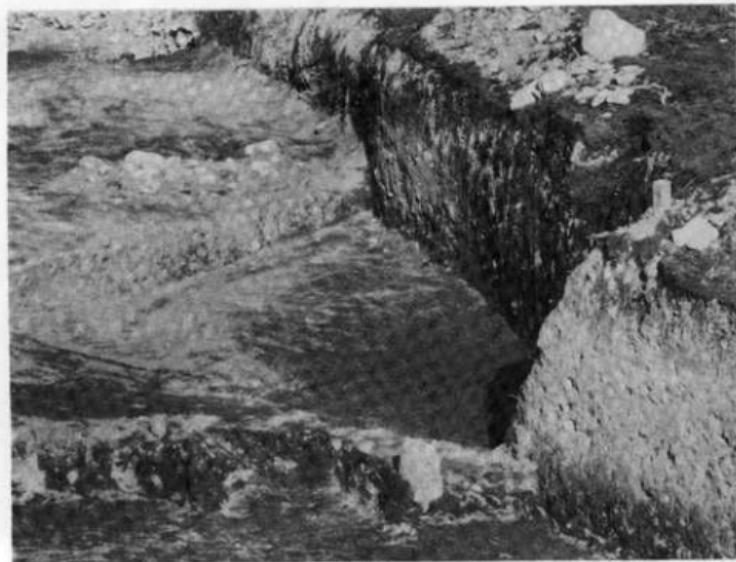
3號住居址



9·10號住居址



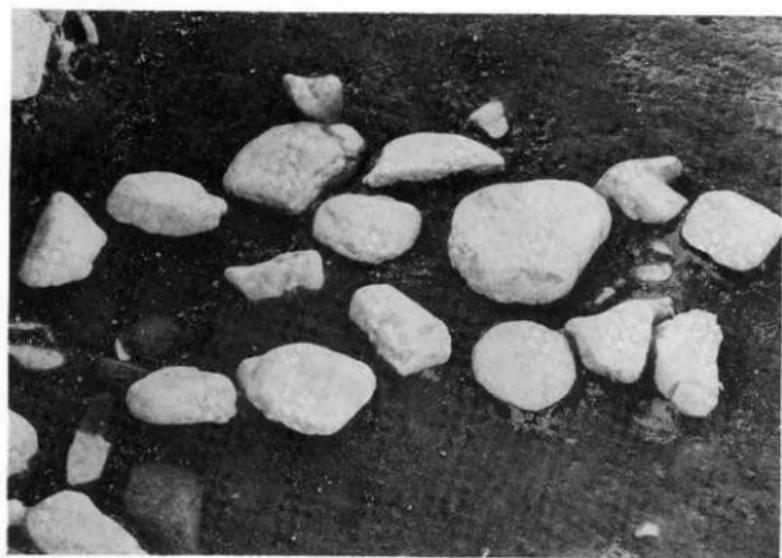
11号掘立柱建物址



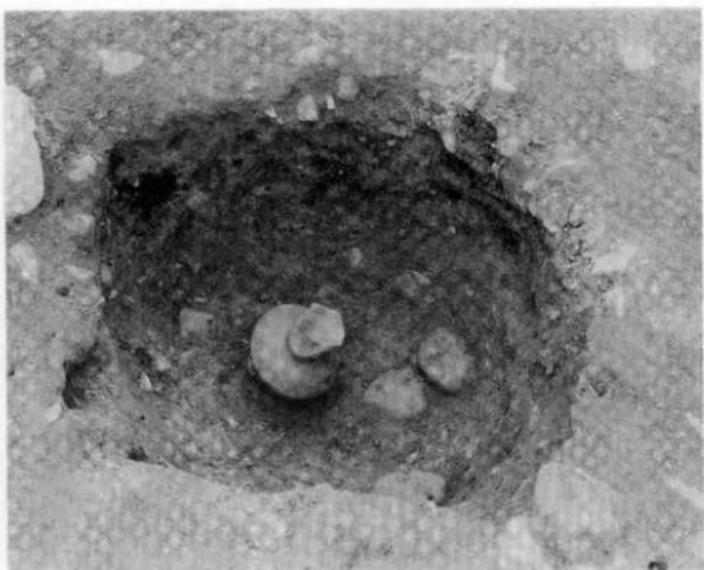
6号住居址



1號配石



2號配石



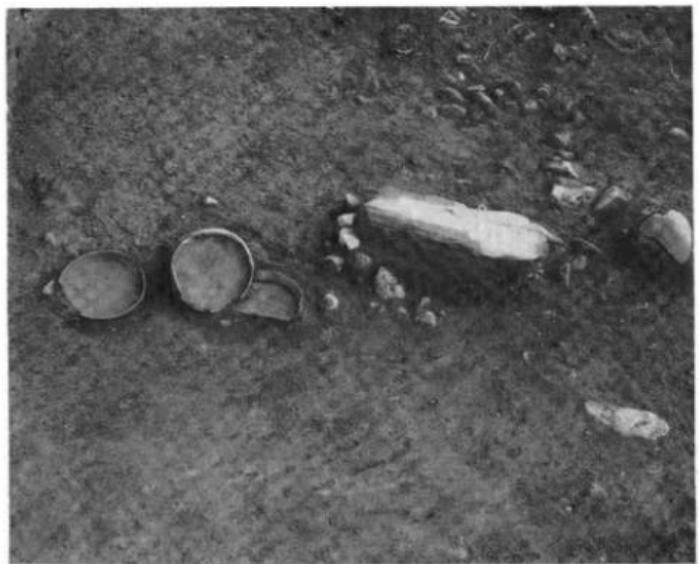
2號土坑



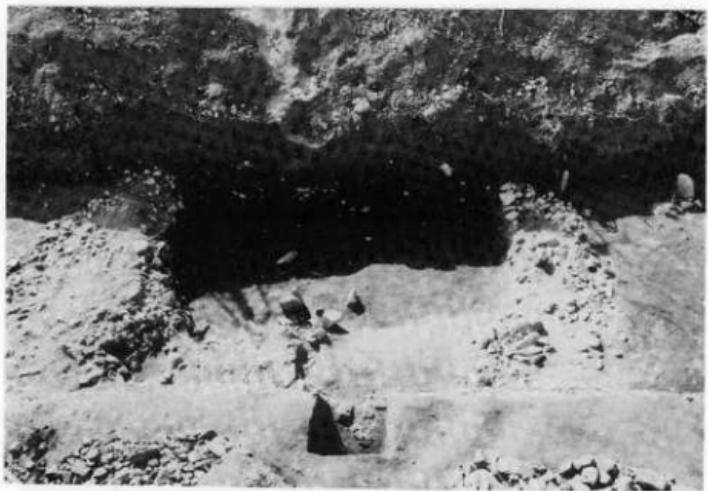
鐵冶遺構



2号集石列



粘板岩を囲む配石



1號住居址



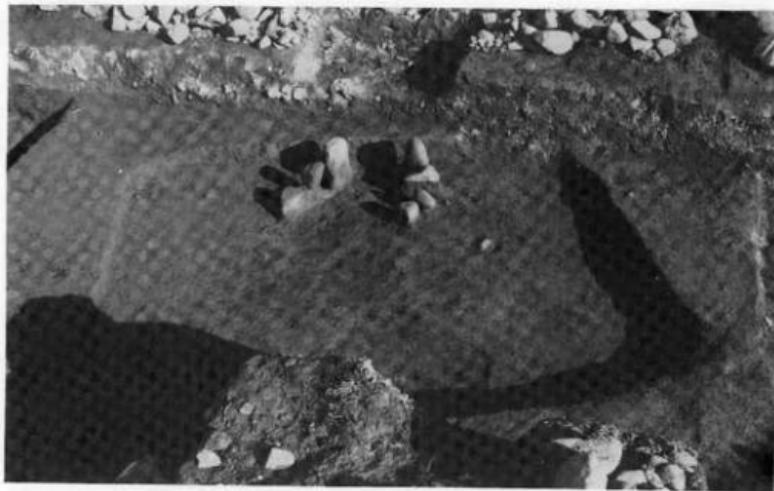
2號住居址



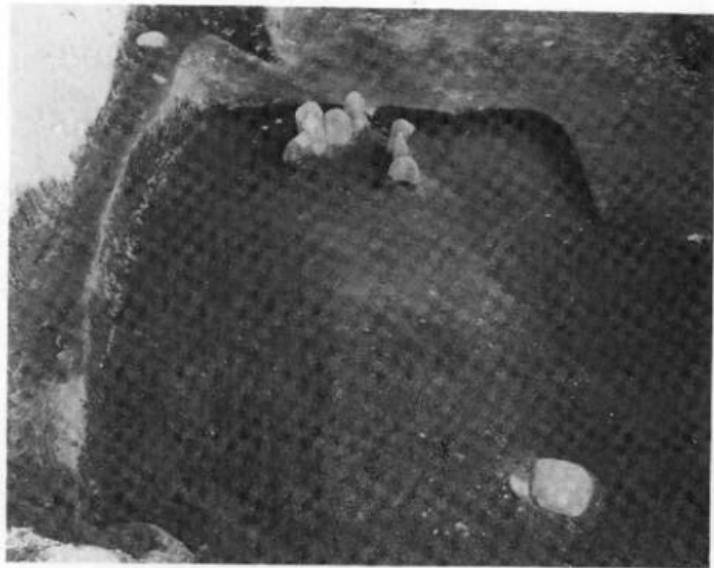
4号住居址



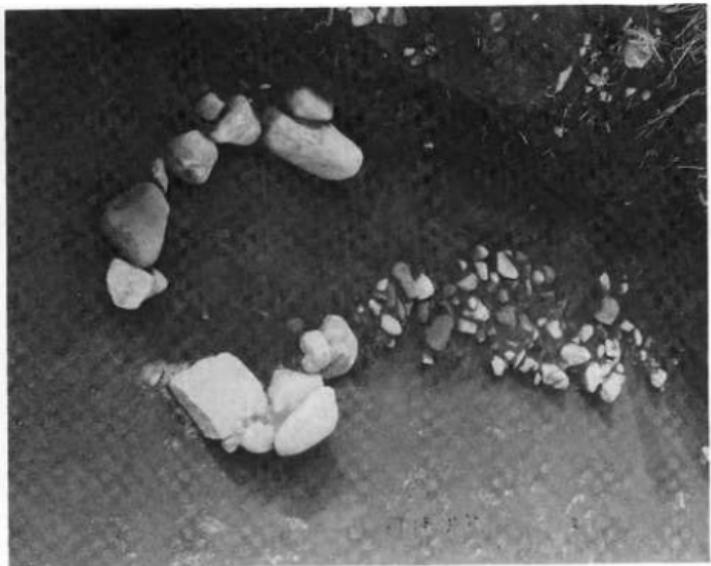
5号住居址



7號住居址



8號住居址



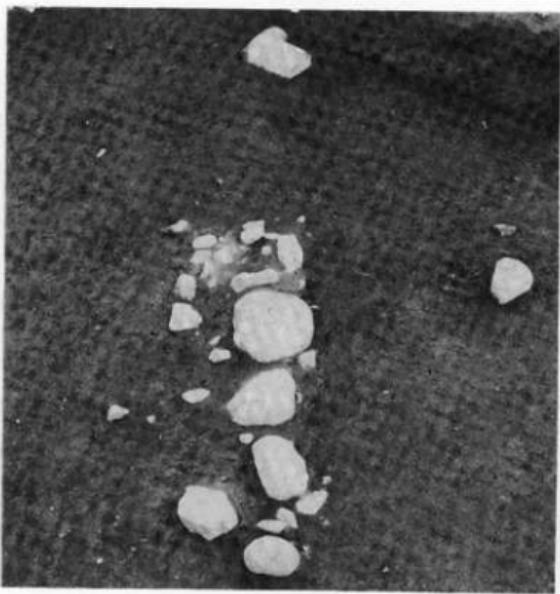
円形配石



1号・2号列石



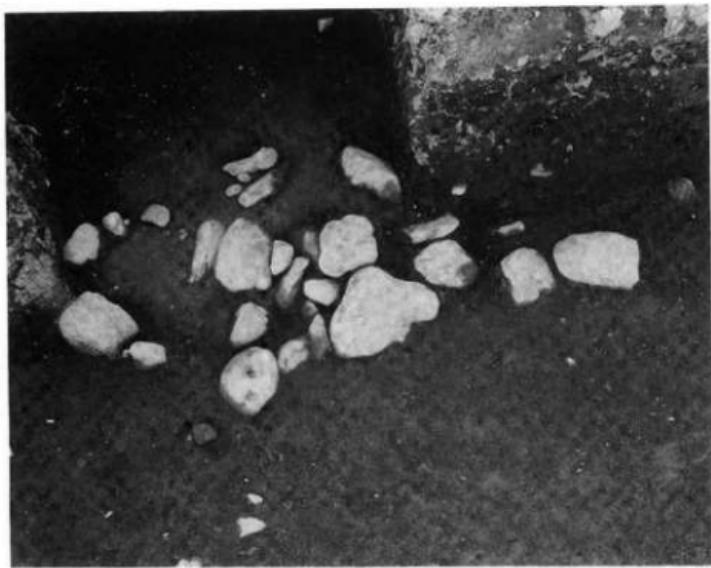
3號列石



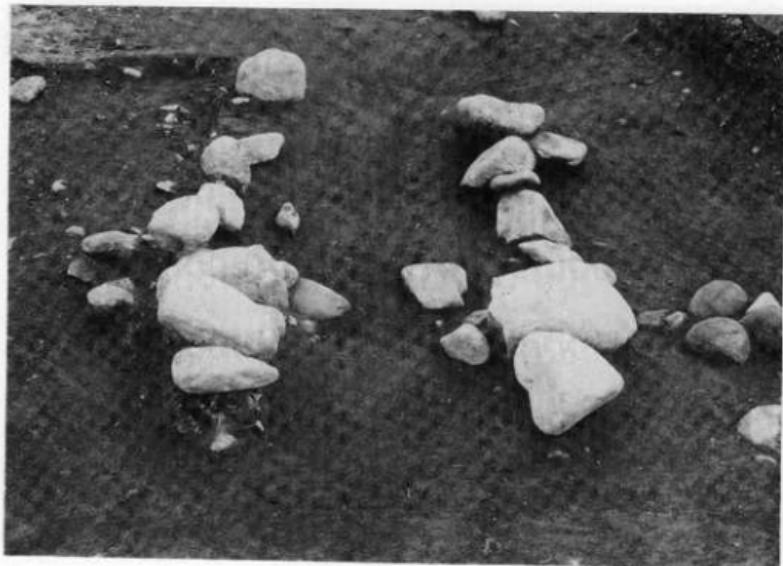
4號列石



5号·6号列石



7号列石



8號列石



1號溝、水澗

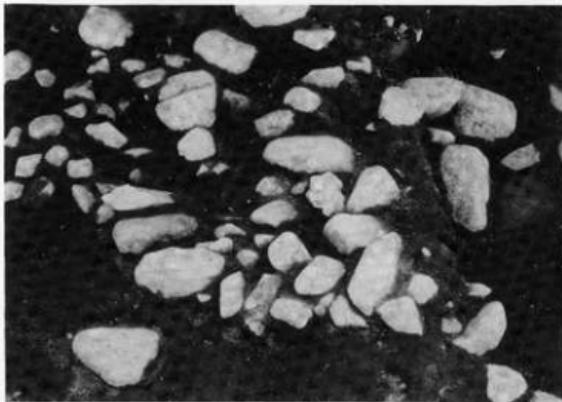


1号溝



水溜め

図版16
3号土壠上部1号溝移築風景他



3号土壠上部



発掘風景



1号溝移築風景



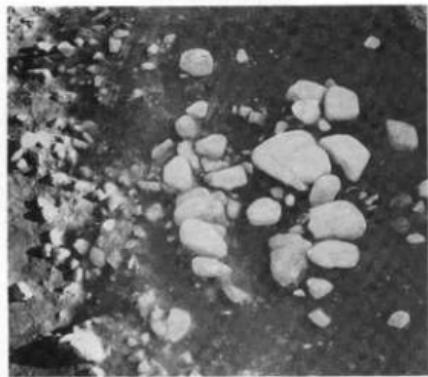
発掘参加者



11G 道セクション



3号集石



5号集石



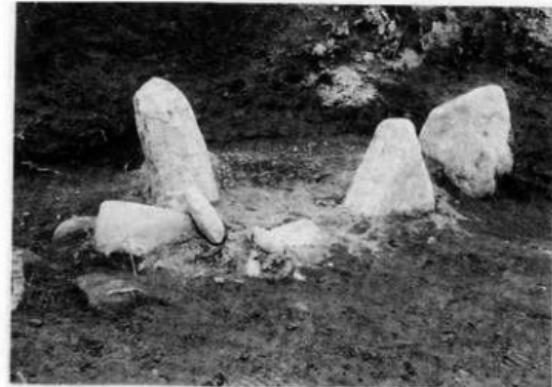
7号集石



11号集石



12号集石



1号かまと



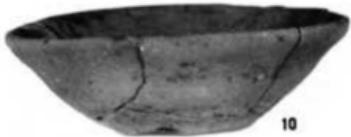
6号遺物出土状況



3住(1~4)、6住(5) SB11付近(6)



SB11付近(1.2)、1・2号配石(3・4)、2・3号土坑(5・6)、2号集石(7)
粘板岩(8)



2·7·8號住(1~5)、5號列石(6)、7·8集石(7~10)



3号かまと(1-4) 2G(5) 3G(6) 4G(7-9) 5G(10-13)

2 5 ·
6 ·
7 ·
9 ·
10 G 出土遺物



1



2



3



4



5



6



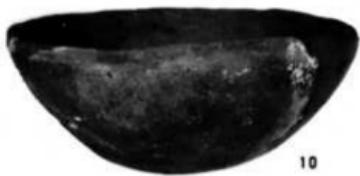
7



8



9



10



11

5G (1) 6G (2~8) 7G (9) 9G (10) 10G (11)

11. 12. 13. 14 G 出土遺物 出土錢貨



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10

11 G (1) 13~14 G (2) 12 G (3) 13 G (4.5) 錢貨(6~10)

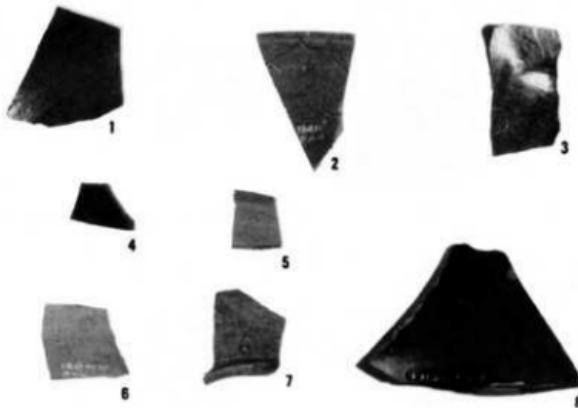
図版25
11G水溜付近出土遺物 石臼 火手鉢 羽口 土製円盤



11G 水溜付近 石臼(1) 火手鉢(2) 羽口(3) 土製円盤(4・5・6)



2G (6) 11G (1) 14G (2·3·4·7)



3G (3·5) 4G (6·8) 6G (2·4) 14G (1·7)

りょうのきじんじ
両の木神社遺跡

両の木神社遺跡発掘調査報告書

1. 調査に至る経過

昭和62年9月18日 文化庁に発掘通知を提出する。
昭和62年11月4日から11月14日まで調査をする。
昭和62年2月5日石和警察署に遺物の発見通知を提出する。

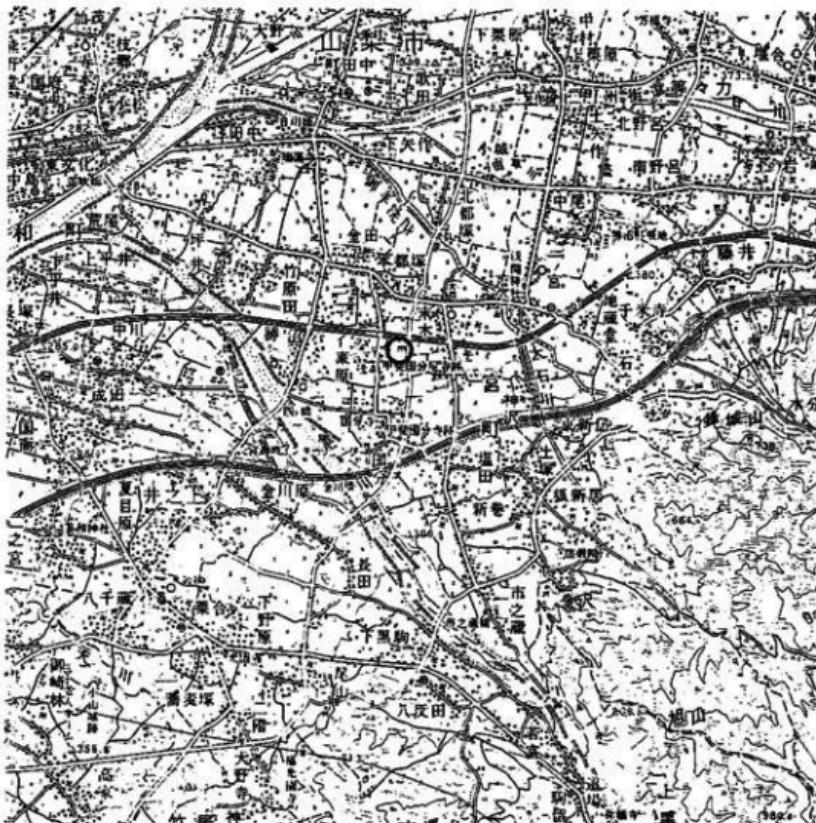
2. 調査の組織

調査主体 山梨県教育委員会
調査機関 山梨県埋蔵文化財センター
担当者 主任・文化財主事 小野正文
作業員 八代米子、山下延子、加藤道、米波伊久保、大村和子、降屋末子、伊藤洋子

3. 遺跡の位置と歴史的環境

遺跡は山梨県東八代郡一宮町末木子字両の木神社境内に位置する。遺跡より西300mには国分尼寺跡があり、南には国分寺跡がある。また神社前をほぼ南北に走る大型広域農道の建設に伴う調査で平安時代の住居址が5軒検出されている。(『甲斐国国分寺周辺聚落址の調査(予報)』)また、遺跡のすぐ北を走る国道20号線の建設に伴う事前調査で、やはり、平安時代の住居址が検出されている。

『甲斐国志』によれば、両ノ木神社は
両木八幡ト称ス一村ノ土神ナリ御朱印社領十四石四斗（慶長黒印帳ニ三斗九升二合ニ作ル其後増加スト見エタリ）社中（東西一町余南北二町余）祭礼角力場（縦二十間横十五間）正殿方六尺葺下リ三尺）拝殿（桁間二間桁行六間九尺）鳥居（桁行一丈）真言宗慈眼寺兼帯スとある。



第1図 西の木神社遺跡位置図 (1/50,000)

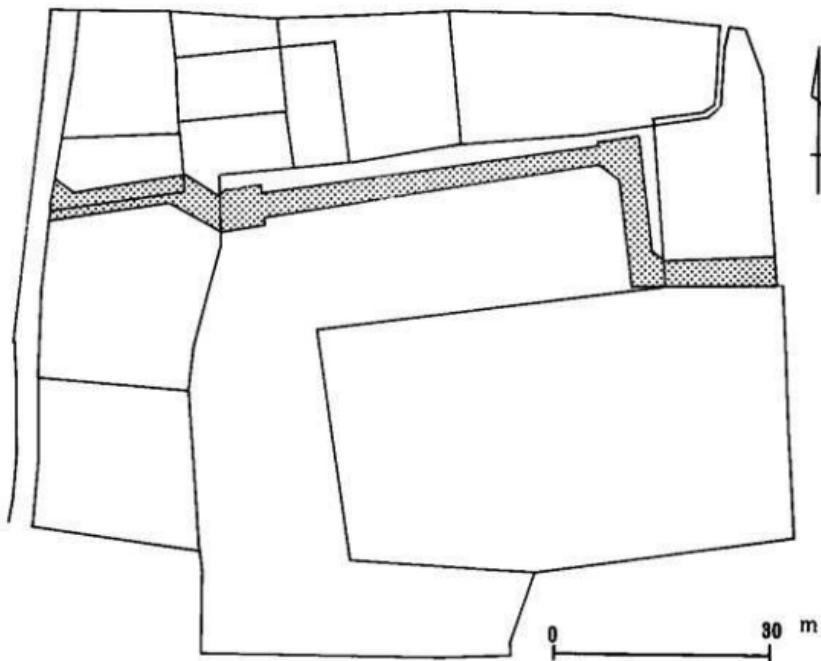
4. 調査の方法

調査は幅2回という範囲があるので、トレンチ調査と殆ど変わりのないものであるので、まず、神社境内の運動場の部分を中心に重機を使い盛り土部分を剥ぎ、遺構面を探すという方法を取った。そして、遺構面を検出し、これを調査したのである。

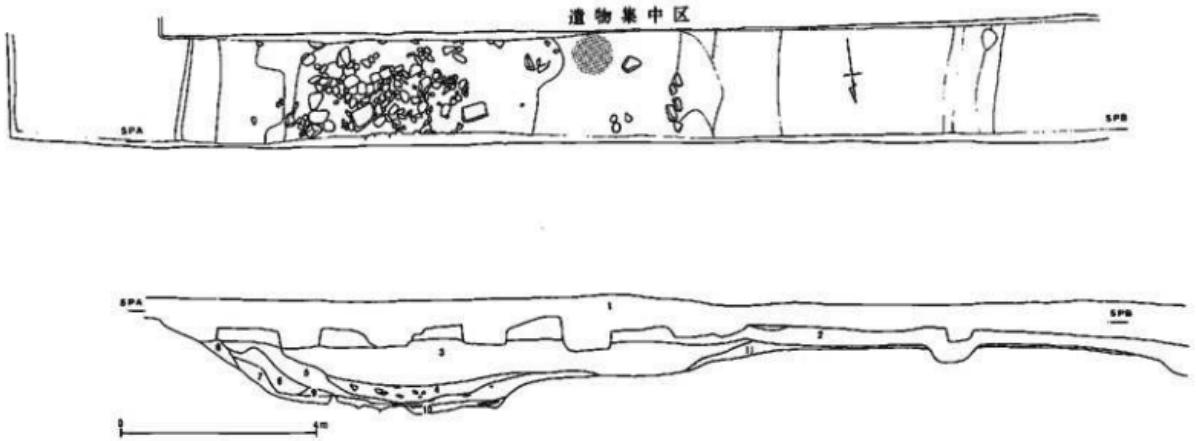
5. 検出した遺構

遺構は神社境内の北の端にあたる部分で、落ち込みを検出し、これを掘り進め、溝を検出した。溝の幅10匁であり、東側部分は急激な落ち込みとなっているが、西側部分はなだらかな立ち上がり

りで、一部はテラス状となり、頂部に至る。頂部にも幅50cmの溝がある。これより西側は礫層となり、自然の落ち込みとなっている。自然地形も神社の西側は埋没谷となっているので、これに統くものとおもわれる。



第2図 両の木神社遺跡発掘区域図



第3図 遺構

- ① 黒 土 グランド整備のための移の盛上
- ② 田畠表土 杜地および掘の田表土
- ③ 黒褐色土 黒褐色の地積土で砂礫を含まない
- ④ 黒 色 土 真黒色をなす。鐵を含む有機質を多量に含んだもの
- ⑤ 黑 色 土 豆土等の褐色土の混入がみられる。
- ⑥ 5層とは同様であるから褐色土の混入の割合が高い。
- ⑦ 5層と同様な土層
- ⑧ 黄褐色土 地山の黄色砂質土が侵入している。
- ⑨ 黄褐色土 地山の土層に鉄バクテリアによる鉄分が含まれる。
- ⑩ 黄褐色斑点土 地山の土層に鉄物が点在する。
- ⑪ 黄 色 土 地山の黄色砂層の上に堆積した褐色土

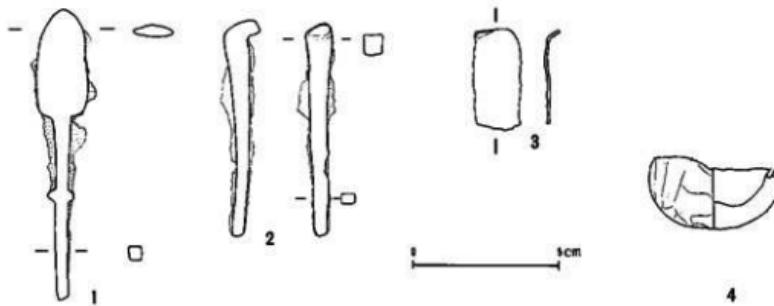
6. 遺物の出土状況

遺物の出土状況は第3図に示したが溝のテラス部分に集中している。鉄鎌は溝の深い部分にあり、丸瓦も溝の中から検出している。

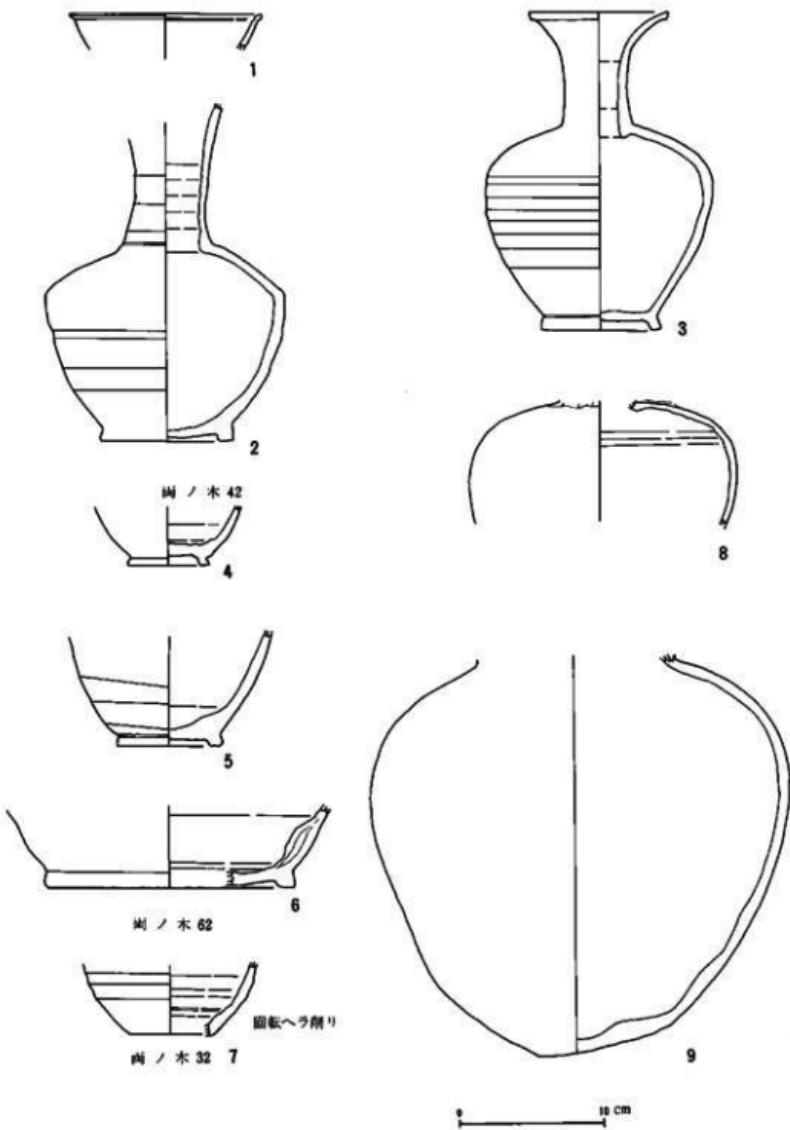
7. 遺物（第4図1～3、第5図1～9、第6図1）

第5図1は土師器で、玉縁口縁をもつ。この種の破片は数多く見られる。2以下9まで須恵器である。2は長頸壺で、肩部の張った形態で、高台をもち、口縁部を欠く。3はほぼ完形の長頸壺で、2よりやや肩部の張りが丸みを帯びる。4はやはり長頸壺の底部、5もやはり長頸壺の底部、6はやや大型の壺の底部。7は高台がないが、壺の底部かもしれない。8は無頸壺の肩部と思われる。肩部には自然釉が見られる。9は甕であるが、口辺部を欠く。

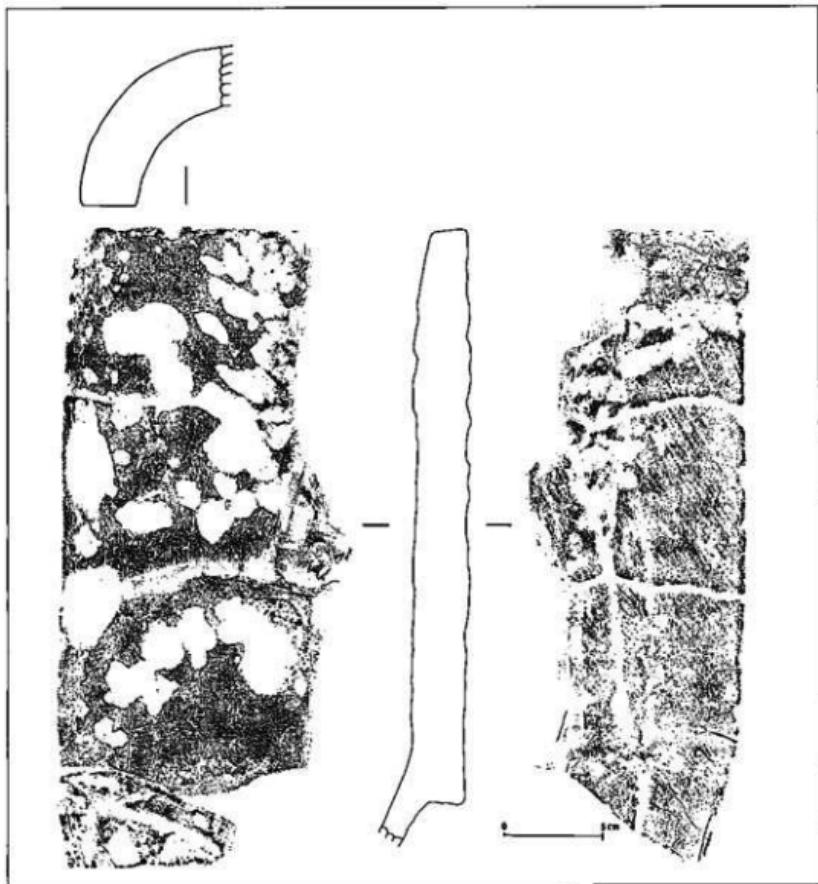
第4図1は鉄鎌で形式は笠被三角形式で、2は鉄釘、3は不明の鉄製の小さい鉄板である。第6図1は丸瓦である。表面の剝離が著しいが溝の底近くで検出されている。



第4図 出土鉄製品ほか



第5図 出土 土師器・須恵器



第6図 九瓦





8. まとめ

遺構の性格

遺構の性格については、はなはだ狭い範囲の調査で結論的なものはないが、まず古墳の周溝と考えられる。この地区にはかつて古墳がいくつかあったと伝えている。また溝の底より、西側にむかって、立ち上がる部分にテラス状の部分があり、そこに遺物が集中した点も古墳説を裏付ける。ただし、レーダー探査のデモ調査では、この溝は円形に曲がらず、東南の方向に伸びるようである。また西側の部分が自然の落ち込みとなり、古墳の墳丘とするにはやや無理があるようである。先の県埋蔵文化財センターの年報では、レーダー探査の結果から古墳説を否定し、地名の両ノ木→龍ノ木から何か門址のような施設の存在を予想したが、古墳説もあながち否定できない。

遺物の時期

遺物の時期は土師器はおよそ9世紀後半に位置付けられようが、須恵器がこの溝状遺構に伴うものであるから、この年代が重要である。もし仮に土師器と同様な年代が与えられるとすれば古墳説は成立しない。

しかしながら、溝の立ち上がりより、検出された須恵器は、年代的には6世紀後半から7世紀前半に比定され、この付近の国分古墳群、千米寺・石古墳群の出土遺物と近似し、溝の立ち上がりのテスト状の部分より出土したことと合わせて、須恵器からは古墳である可能性の方が大きい。

山梨県埋蔵文化センター調査報告 第44集

1969年3月25日 印 刷

1969年3月31日 発 行

下長崎遺跡

両の木神社遺跡

発行 山梨県教育委員会
関東農政局笛吹川農業水利事業所

印 刷 株式会社 少国民社
